

# 琉球銀行の現状

2020年版 ディスクロージャー誌



第28回（2019年度）りゅうぎん紅型デザインコンテスト  
技術賞「帰り道の花」 喜屋武 滉子



## 目次

## I N D E X

- P1 琉球銀行のあゆみ
- P3 トップメッセージ
- P5 地域における琉球銀行
- P7 ニュース&トピックス
- P9 中小企業の経営の改善および  
地域の活性化のための取り組み
- P21 コーポレート・ガバナンス
- P23 法令等遵守(コンプライアンス)体制
- P25 リスク管理への取り組み
- P29 コーポレートデータ
- P34 資料編

当行の概要 (2020年3月31日現在)

## P R O F I L E

設立:1948年5月1日

資本金:569億67百万円

本店所在地:〒900-0015

沖縄県那覇市久茂地1丁目11番1号

TEL:098-866-1212(大代表)

店舗数:76カ店

従業員数:1,367名

株主数:13,265名



# 琉球銀行のあゆみ



## 「株式会社琉球銀行の設立」

琉球銀行は、米軍統治下の1948年5月1日、戦後のインフレ抑制と沖縄経済の正常な発展のため、「金融秩序の回復と通貨価値の安定」を目的とし、米国軍政府布令に基づく特殊銀行として設立されました。資本金の51%を米国軍政府が出資し、米国の連邦準備制度とフィリピンの中央銀行をモデルに設立された当行の設立初期の業務内容は、米国軍政府資金の預託機能や一般銀行業務に加え、通貨発行権、金融機関の監督統制権、加盟銀行に対する援助、不動産債券の発行権など、中央銀行的色彩がきわめて強いものでした。

そして、本土復帰を控えた1972年の春、株式会社へ組織変更するとともに米国軍政府が保有していた当行株式を県民へ開放し、復帰の日を期して「銀行法」に基づく普通銀行として再スタートしました。復帰に伴う通貨交換では、ドルから日本円への切り替えなどで、経済・金融制度の円滑な移行を推進し、沖縄のリーディングバンクとしての責務を果たしてきました。

復帰後は、1983年に県内企業として初の株式上場を実現し、また1986年には情報センタービル（浦添ビル）完成、さらに1988年には「りゅうぎん国際化振興財団」を設立するなど、地域への貢献活動にも積極的に取り組むとともに、経営体質の強化に努めてきました。1999年9月には、資産の健全化と財務体質の強化を図るため、227億円の第三者割当増資ならびに400億円の公的資金の導入を実施しました。

2006年10月には、優先株式の発行により財務基盤を強化する一方、公的資金400億円のうち340億円を返済しました。

2010年7月には、公的資金400億円のうち、残る60億円を返済し、公的資金を完済しました。



## 琉球銀行の沿革

2020年6月30日現在

<b>1948年</b>	5月 琉球列島米軍政府（以下米軍政府） 布令第1号により設立 7月 特別布告第29号に基づきB円（軍票）に通貨交換	<b>1994年</b>	3月 信託代理店業務の認可
<b>1950年</b>	6月 米軍政府布令第4号に基づく琉球復興金融基金の業務を開始 10月 米軍政府布令第11号「琉球列島における外国貿易および外国為替」公布に伴い外国為替公認銀行に指定	<b>1997年</b>	4月 資本金127億円に増資
<b>1952年</b>	11月 米国財務省より米国政府公金受託銀行に指定	<b>1998年</b>	5月 営業時間を全店舗午後4時まで延長 12月 証券投資信託の窓口販売業務開始
<b>1958年</b>	9月 高等弁務官布令第14号に基づきB円からドルに通貨交換実施	<b>1999年</b>	6月 事務代行業務を行う会社として、りゅうぎんオフィスサービス株式会社を設立（現・連結子会社） 9月 資本金241億円に増資 同月 公的資金400億円（無担保転換社債）導入および経営健全化計画を策定
<b>1959年</b>	3月 米国財務省預託金勘定の操作を受託 12月 弁務官布令第25条により琉球復興金融基金事務を琉球開発金融公社に引き継ぎ	<b>2000年</b>	7月 コンビニATM「イーネットATM」サービスを開始 9月 無担保転換社債400億円を優先株式へ転換
<b>1966年</b>	8月 現在地に本店を新築移転	<b>2001年</b>	4月 基幹コンピューターのシステム共同化に関する最終合意（じゅうだん会） 同月 インターネット・モバイルバンキング取扱開始
<b>1972年</b>	1月 米軍政府布令に基づく特殊法人から商法上の株式会社へ移行し、株式会社琉球銀行と改称 5月 琉球政府立法の銀行法の規定により営業免許を取得 布令銀行から民立法「銀行法」に基づく普通銀行へ転換	<b>2002年</b>	6月 執行役員制度導入
<b>1974年</b>	10月 コルレス契約包括承認銀行となる	<b>2004年</b>	8月 法人向けインターネットバンキング「りゅうぎんBizネット」取扱開始
<b>1977年</b>	7月 全店へ総合オンラインシステム移行完了	<b>2006年</b>	1月 基幹コンピューターの「共同版システム」をスタート 6月 調査・研究等を行う会社として、株式会社りゅうぎん総合研究所を設立（現・連結子会社） 10月 第二種優先株式（200億円）を発行 資本金541億円へ増資 同月 公的資金340億円（第一種優先株式）を買受け消却
<b>1979年</b>	7月 信用保証業務を行う会社として、りゅうぎん保証株式会社を設立（現・連結子会社）	<b>2007年</b>	6月 第二種優先株式全株が普通株式へ転換
<b>1983年</b>	9月 現金精査整理業務等を行う会社として、りゅうぎんビジネスサービス株式会社を設立（現・連結子会社） 10月 資本金42億円に増資 沖縄県で初の株式上場（東京証券取引所第2部、福岡証券取引所）	<b>2010年</b>	7月 県内のファミリーマート、ローソンほぼ全店にコンビニATM設置拡大 同月 公的資金60億円（第一種優先株式）を買受け消却し、公的資金を完済
<b>1984年</b>	4月 クレジットカード業務を行う会社として、株式会社りゅうぎんディーシーを設立（現・連結子会社）	<b>2014年</b>	4月 リース業務を行う持分法適用関連会社株式会社琉球リースを連結子会社化
<b>1985年</b>	6月 債券ディーリング業務開始 9月 東京証券取引所第1部へ指定	<b>2015年</b>	4月 中期経営計画「Shared Value 2015」をスタート 同月 クレジットカード、個別信用購入斡旋業務を行う株式会社OCSを連結子会社化 10月 「りゅうぎんVisaデビットカード」取扱開始
<b>1986年</b>	12月 琉球銀行浦添ビル（県内初の情報センタービル）が完成	<b>2017年</b>	1月 「りゅうぎんカード加盟店サービス」取扱開始 4月 中期経営計画「Customer Centric 2017」スタート 7月 株式会社琉球リースを完全子会社化（現・連結子会社）
<b>1987年</b>	11月 国内コマース・ペーパー取扱業務開始	<b>2018年</b>	5月 創立70周年を迎える 9月 資本金569億円に増資
<b>1988年</b>	2月 資本金64億円に増資 4月 財団法人りゅうぎん国際化振興財団を設立 総資金量1兆円を達成 5月 資本金68億円に増資	<b>2020年</b>	4月 中期経営計画「SINKA 2020」スタート 同月 「TSUBASAアライアンス」へ参加
<b>1989年</b>	4月 資本金93億円に増資 8月 資本金98億円に増資		
<b>1990年</b>	5月 新総合オンラインシステムが稼働 6月 担保附社債信託業務の営業免許を取得		
<b>1993年</b>	6月 「りゅうぎんユイメール助成会」設立		



皆様には、平素より、琉球銀行をご利用、お引き立ていただきまして、誠にありがとうございます。

今年も、多くの皆様に琉球銀行をより一層理解していただくために、「琉球銀行の現状」(2020年版ディスクロージャー誌)を作成しました。

### 金融経済環境

2019年度の国内経済は、年度の前半は企業業績が堅調を維持し雇用情勢の着実な改善が続いたことから、消費にも底堅さがみられ緩やかな回復が続きました。年度の後半は、10月の消費税率引き上げ後に個人消費が弱含みとなり、また年度の終盤には新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、経済は大幅に下押しされ厳しい状況となりました。

県内経済においては、年度の前半は入域観光客数の増加を背景に観光が好調を維持し、高水準な民間・公共工事により建設も概ね順調に推移しました。さらに雇用情勢の改善により消費も概ね堅調に推移したことも伴い拡大を続けました。しかしながら、消費税率引き上げ後に消費が弱含み、年度の終盤には新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、特に入域観光客が激減し、宿泊施設の稼働が急低下するなど、観光が一転して弱くなったことから景気は後退しました。

### 事業の経過および成果

このような環境のもと、中期経営計画「Customer Centric2017」の最終年となった今年度は、「顧客本位の収益モデルの展開」を目標に、コンサルティング業務を通じたソリューションの提供による顧客基盤拡大、非金利収入増強を図りながら、業務効率化および人材育成改革を積極的に推し進めてまいりました。

法人ビジネス戦略では、好調を維持していた沖縄県経済を支えるため資金ニーズへの積極的な対応や、事業承継





支援、民事信託を活用した相続ニーズへの対応等に積極的に取り組みました。これらに加え、なお一層の法人ソリューション提案力の強化を目的に銀行本体にてリース案件の媒介業務を開始し、これにより従来の紹介業務よりも踏み込んだ提案が可能となりました。また、昨年度に引き続き「OKINAWA STARTUP PROGRAM」を株式会社沖縄タイムス社など県内4社と共同開催したほか「BORベンチャーファンド1号投資事業有限責任組合」を通じた出資を積極的に行う等、他県にはない独自のベンチャー企業(スタートアップ)の創出・育成に取り組みました。

個人ビジネス戦略では、2019年6月に個人特化型店舗「パルコシティ出張所(りゅうぎん パルコシティ・パーソナルプラザ)」を新規に出店し、個人のお客様の資産運用のご相談から住宅ローンを含む各種ローンのご相談まで、ライフステージに応じたお客様の資産形成ニーズにお応えできる体制を整えました。また、2019年10月にはお客様の相続や資産承継ニーズをサポートするため、トータルプランニングの取り組みを強化することを目的に「遺言信託・遺産整理」業務の取り扱いを開始しました。

カード戦略では、個人向けのりゅうぎんVisaデビットカードが発行累計枚数13万枚を突破したほか、2017年1月より取り扱いを開始しているカード加盟店サービスの加盟店数は6,000店を突破しました。沖縄県と同様に観光客が増加しカード決済ニーズが高まりつつある奄美群島地域の奄美信用組合様とカード加盟店サービスの提携を行ったほか、地域活性化および地域住民の生活環境の充実を目的に八重山地域や伊江村などと「キャッシュレス推進に関する地域協定」を締結しました。また、2020年度には隣国台湾で最も浸透している「悠遊カード(悠遊卡股份有限公司)」の加盟店業務を国内で初めて開始することになり、今後は日本国内での展開を支援させていただくこととなりました。今後も引き続き、沖縄本島のみならず、これまで金融サービスの提供が難しかった離島地域においても、金融仲介機能を発揮し地域社会の発展に寄与してまいります。

## 対処すべき課題

これまで好調に推移してきた沖縄県経済は、2019年末頃より日韓関係の悪化や新型コロナウイルス感染症拡大などにより、観光関連業にとどまらず幅広い業種で非常に大きな影響を受けています。その影響は雇用環境にも及んでおり、全体的にリーマンショック時よりも厳しい状況だと認識しています。

当行の営業現場はお客様を訪問し新型コロナウイルス感染症拡大による影響を確認したうえで、借入金の元金返済を据え置き提案を行っているほか、新規の借入相談にも積極的に応じるなど、お客様の資金繰りを支援しております。

さらに、沖縄振興開発金融公庫との連携、電話での相談受付の開始、雇用調整助成金相談窓口の設置などお客様の支援体制を強化しました。また、行員が感染するリスクに備えて二交代制の勤務体制とするなど、金融サービスの継続にも全力で取り組んでおります。

このような厳しい環境の中にもありますが、2020年4月より中期経営計画「SINKA 2020」(期間3年:2020年4月～2023年3月)をスタートさせました。

新しい中期経営計画「SINKA 2020」では、「景況に左右されず、どんな時も地域を支え、地域の発展に寄与する真のリーディングバンクへ」を目指す姿に掲げ、前回の中期経営計画の流れを汲みつつ、預金、融資、為替といった銀行本来のコア業務を「進化」させ、新たに取り組んできたキャッシュレス決済などの銀行付随業務の「深化」を図り、琉球銀行グループ全役職員がチャレンジし続けることで「SINKA」していくという思いが込められております。

具体的には、人材育成改革によりお客様に付加価値の高いサービスを提供できる人材を増やしていくとともに、営業店現場改革による業務効率化を徹底的に行い、お客様と向き合う時間を創出することで顧客本位の業務運営態勢を確立させ、法人ビジネス戦略、リテールビジネス戦略、キャッシュレス戦略、チャネル戦略で掲げた各施策をスピーディーに実行に移し、新中期経営計画の目指す姿に掲げる「景況に左右されず、どんな時も地域を支え、地域の発展に寄与する真のリーディングバンクへ」の達成に向け取り組んでまいります。

今後も引き続き、「地域から親しまれ、信頼され、地域社会の発展に寄与する銀行」という経営理念を達成すべく、地域の課題解決に努め、お客様が真に求める商品・サービスの提供に努めてまいります。

# 地域における琉球銀行



第35回ナイスハートバザールイン沖縄

## りゅうぎんユイマール助成会

役職員による募金と銀行からの寄付金とで基金を造成する「りゅうぎんユイマール助成会」を通じて、地域の社会福祉活動や環境保全活動を支援しています。2019年度は120団体に対し、合計1,376万円の助成金を贈呈しました。また、授産施設や小規模福祉作業所等の製品即売会「ナイスハートバザールイン沖縄」に協賛金を提供するほか、当行職員がボランティアスタッフとして参加し、全面的な支援を継続して行っています。

**地域とともに**  
社会貢献活動を展開

琉球銀行は、社会貢献活動を地域金融機関の重要な役割と考え、各地域での清掃活動や諸行事への参加、社会福祉活動や環境保全活動への助成など、様々な活動に取り組んでいます。



りゅうぎんユイマール助成会贈呈式

### ※ りゅうぎんユイマール助成会

「りゅうぎんユイマール助成会」は、1993年に当行の創立45周年を記念して設立した基金です。毎年、役職員に募金を募り、さらに同額を銀行が寄付することで基金を造成します。「りゅうぎんユイマール助成会」では、地域の福祉活動や環境保全活動を継続的に支援しており、設立からの助成実績は1,118件、2億1,524万円となりました(2020年3月31日現在)。

## りゅうぎん国際化振興財団

当行の40周年を記念して設立した「一般財団法人りゅうぎん国際化振興財団」は、諸外国との人的、経済的交流に資する事業等の実施および助成を行うことを通じて国際相互理解を図り、沖縄県の国際化に寄与しています。2019年度は、沖縄県の国際化を推進する事業を実施する9団体へ合計335万円の助成金を贈呈しました。

また、2018年3月から沖縄県内の学生等の諸外国への留学支援のため「りゅうぎん海外留学支援事業」を開始しました。「りゅうぎん海外留学支援事業」は、当行の創立70周年事業の一つとして起ち上げた事業で、①返還義務のない奨学金を提供し、経済的な理由で留学が困難な学生および専門性の高い学業を目指す学生や社会人を支援すること、および②人材育成を通して社会の発展に寄与することを目的としています。

2019年度は、高校生1名、大学院生2名の計3名の留学生を派遣しました。



りゅうぎん国際化振興財団助成金贈呈式



留学派遣者奨学金贈呈式



## 子ども居場所づくりイベント事業助成金

2018年度に開始した「子ども居場所づくりイベント事業助成金」は、沖縄県内の子どもの居場所づくり等を目的とした団体等が実施する、誕生会、夏祭り、クリスマス会、もちつき大会等、子どもたちが中心となるイベントに対する助成事業です。2019年度は35団体に対し、合計99.5万円の助成金を贈呈しました。



子ども居場所づくりイベント事業助成金贈呈式

## りゅうぎんキッズスクール

毎年夏休み期間中に小学5・6年生を対象として「りゅうぎんキッズスクール」を開催しています。17回目となる2019年度は、ゲームを通じて経済の仕組みやお金の流れ等を学習する「いきいき・ゲーム経済教室」や、コンピュータを使いプログラミングに必要な基礎知識を習得できる「プログラミング教室」を開催しました。



第17回りゅうぎんキッズスクール



いきいき・ゲーム経済教室

## 芸術文化支援活動

沖縄県の伝統工芸の一つである紅型の振興と若手工芸家の育成ならびに紅型デザインの新しい領域の追求を目的に「りゅうぎん紅型デザインコンテスト」を毎年開催しています。入賞作品については、当行のカレンダーや通帳、広報物等に幅広く活用されています。

また、創立70周年記念事業の一環として、株式会社沖縄タイムス社（代表取締役社長 武富 和彦）との共催で、「りゅうぎん琉球漆芸技術伝承支援事業」を2019年より開始しました。これは琉球漆芸における若手従事者の確保と技術の伝承、および従事者が生計を立てられる収入を得られることを目的とするものです。



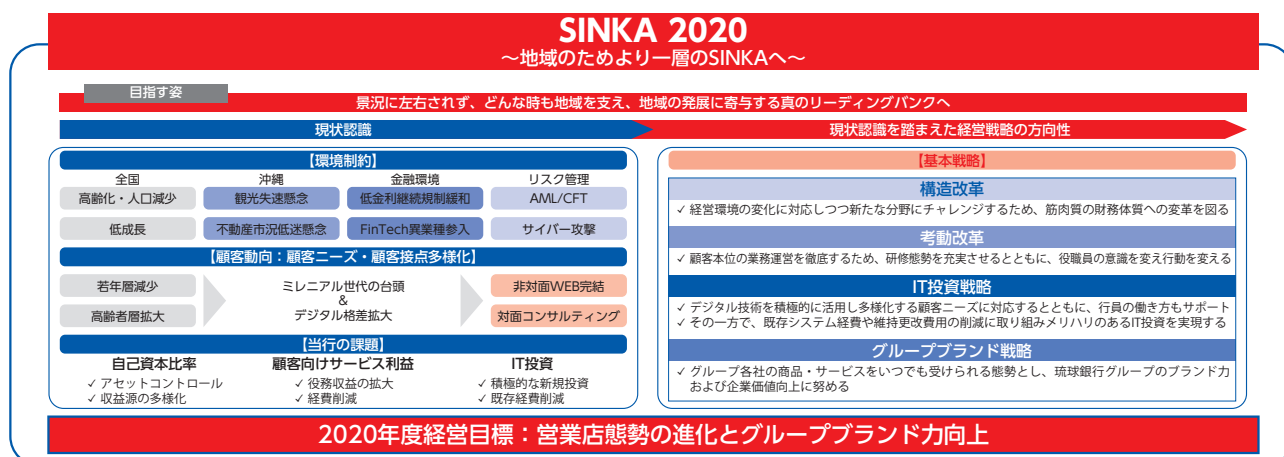
第28回りゅうぎん紅型デザインコンテスト



## 新中期経営計画「SINKA 2020」スタート

琉球銀行は、低金利の継続や好調に推移していた県内景況の失速懸念等、厳しさを増す経営環境を踏まえ、2020年4月より新たにスタートした新中期経営計画「SINKA 2020」では、「景況に左右されず、どんな時も地域を支え、地域の発展に寄与する真のリーディングバンクへ」を目指す姿として掲げました。

新中期経営計画「SINKA 2020」では、前回の中期経営計画「Customer Centric 2017」の流れを汲みつつ、預金、融資、為替・決済といった銀行本来のコア業務を「進化」させ、新たに取り組んできた銀行付随業務の「深化」を図り、琉球銀行グループ全従業員がチャレンジし続けることで当行グループが「SINKA」していくという思いが込められており、本計画に掲げた目標を達成することで、ステークホルダーの皆様の期待に応えてまいります。



## 「TSUBASAアライアンス」へ参加

琉球銀行は、2020年4月27日（月）、「TSUBASAアライアンス」に新たに参加しました。「TSUBASAアライアンス」は千葉銀行、第四銀行、中国銀行、伊予銀行、東邦銀行、北洋銀行、北越銀行、武蔵野銀行、滋賀銀行の9行が加わっており、今回琉球銀行が参加することで10行の連携となり、北海道から沖縄まで全国を網羅するネットワークが形成されます。

「TSUBASAアライアンス」では2015年10月の発足以来、フィンテックや事務・システムの共同化、相続関連業務、国際業務、グループ会社の活用など、幅広い分野で連携施策を推し進めております。これら先進的な施策を琉球銀行に取り入れるとともに、各行のノウハウや知見を結集し、戦略的アライアンスを一層加速させていくことで、お客様により付加価値の高い金融サービスを提供してまいります。







## FTB※タブレットシステムの導入

琉球銀行は、営業店業務改革に向けてFTBタブレットシステムを全店（ローンセンター除く）へ導入することとしました。FTBタブレットシステムは、普通預金口座開設など個人向け業務の一部をタブレット処理へ移行することで、お客様の記入負担軽減や待ち時間短縮によるサービスの向上を目指し、また、手続きを簡素化することでお客様とのコミュニケーション強化を図るシステムです。2019年10月より一部店舗にて試行を行い、想定通りの期待効果が得られたこと、およびお客様から一定のご評価をいただいたことから全店への導入を決定いたしました。

※FTBとはFlexible & Traditional Bank（柔軟性と伝統を兼ね備えた銀行）の略称で、システムは琉球銀行と日本アイ・ビー・エム株式会社が共同で開発しました。



## 健康経営優良法人の認定を取得

琉球銀行は、経済産業省と日本健康会議が共同で実施する「健康経営優良法人2020」※の認定を取得しました。琉球銀行は、全職員へのウェアラブルデバイスの貸与やそれを利用したウォーキングイベントの実施により、職員の生活習慣の改善を支援しています。また、喫煙および受動喫煙による健康被害防止の観点から、卒煙支援としての禁煙外来自己負担分補助や卒煙報奨金の支給、就業時間内禁煙（MO! SWANデー）の実施等に取り組んでいます。

※「健康経営優良法人認定制度」とは、地域の健康問題に即した取り組みや日本健康会議が進める健康増進の取り組みをもとに、特に優れた健康経営を実践している法人を顕彰する制度です。





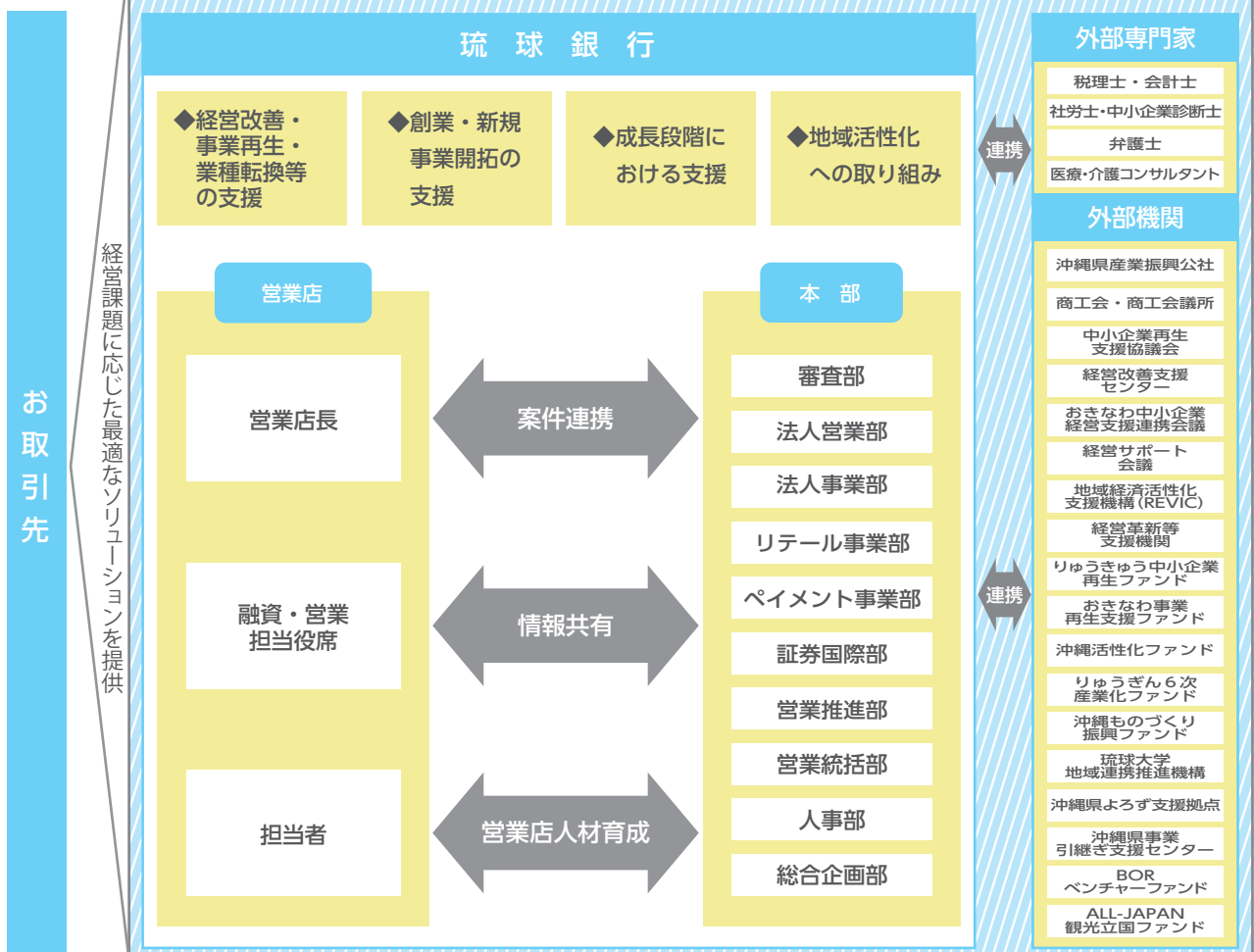
## 経営支援に関する取組方針

琉球銀行では、地域金融機関の使命は、お客様への円滑な資金供給など金融仲介機能の発揮と金融サービスの提供を通じて地域経済の発展に貢献していくことにあると考えており、これまで「ライフサイクルに応じた取引先企業の支援強化」、「事業価値を見極める融資手法をはじめ中小企業に適した資金供給手法の徹底」、「地域の情報集積を活用した持続可能な地域経済への貢献」を3本の柱とする地域密着型金融の推進に取り組んできました。

2009年12月の中小企業金融円滑化法施行後は、地域金融機関としてさらに金融仲介機能を発揮していくために、「金融の円滑化に関する基本方針」を策定するとともに、金融円滑化への取り組みを強化するための体制を整備し、お客様からのご相談・ご要望に積極的に対応しており、2013年3月末の中小企業金融円滑化法の期限到来後においても上記方針に基づき、貸付条件の変更等や円滑な資金供給に努める体制を継続しています。

琉球銀行では、これからも、「創業・新規事業開拓の支援」、「成長段階における支援」、「経営改善・事業再生・業種転換等の支援」等について、外部専門家や外部機関等と適切に連携し、本部・営業店が一体となってお客様の経営課題に応じた最適なソリューションを提供するなど、コンサルティング機能を発揮した中小企業の経営支援に積極的に取り組み、地域の活性化・発展に貢献してまいります。

### 中小企業への経営支援態勢





# 中小企業の経営の改善および地域の活性化のための取り組み

## ライフステージ別の融資先数

創業期 1,783社 (1,254社)	成長期 610社 (419社)	安定期 3,087社 (2,129社)	低迷期 223社 (156社)	再生期 820社 (549社)
---------------------------	-----------------------	---------------------------	-----------------------	-----------------------

※ ( ) 内はメイン融資先数

### 【用語解説】 ライフステージ

創業期：創業・第二創業から5年未満

成長期：売上高の平均で直近2期が過去5期の120%超

安定期：売上高の平均で直近2期が過去5期の120%～80%

低迷期：売上高の平均で直近2期が過去5期の80%未満

再生期：貸出条件の変更等

## 当行メイン融資先<sup>※1</sup>の先数、融資残高

経営指標等の改善・・・データ収集が可能な先は3,886先であり、データ収集可能先に対する改善率は75.1%

(単位：件、億円)

メイン先数			メイン先残高		
	うちデータ収集可能	うち改善 <sup>※2</sup>		うちデータ収集可能	うち改善
6,436	3,886	2,920	7,435	6,398	4,985

※1 企業をグループ単位とした当行融資先のうち借入残高に占める当行の割合が1位の先

※2 売上高・営業利益率・労働生産性のうちいずれかの向上、または就業者数が増加した先



## ■ 創業・新事業開拓の支援

### 創業・新事業開拓支援

沖縄県の制度融資「創業支援資金」などにより創業向けサポートを実施しています。

	2019年度実績
創業への支援先数	873先

また、法人事業部に調書作成支援を行うローンサポートグループ、大口案件組み立て支援を行うソリューション1,2グループ、医療開業支援を行う医療・福祉推進グループを設け、新たに新規事業を営むお客様向けの支援を実施しております。

その他の支援施策としては、産業競争力強化法における市町村「創業支援事業計画」に積極的に参加しており、当行は県内ではじめて国から「創業支援事業計画」の認定を受けた久米島町をはじめ、那覇市、宜野湾市、石垣市、浦添市、名護市、沖縄市、うるま市、南城市、糸満市、豊見城市、宮古島市、与那原町、南風原町、嘉手納町、読谷村、北中城村、八重瀬町において、認定創業支援機関として参画しております。

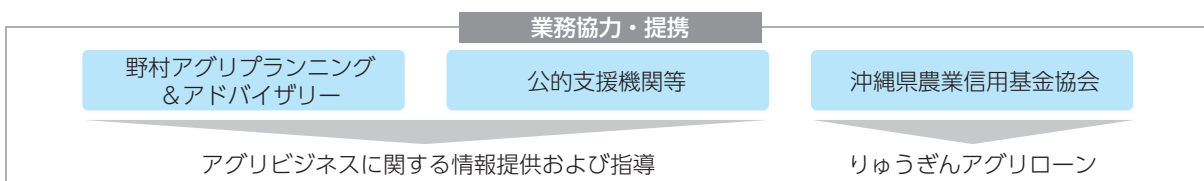
また、県内の起業家支援を目的に「OKINAWA Startup Program」を県内他社と共同主催しており、沖縄から革新的で競争力のあるベンチャー企業（スタートアップ）の創出・育成に注力しております。

本プログラムの参加企業（チーム）には、当行および県内外の起業家支援機関によるビジネスプラン熟成のメンタリング等を行い、事業化が見込まれる優れたプランに関しては、BORベンチャーファンドからの出資やパートナー企業とのマッチング等のサポートを実施しております。

### 6次産業化支援

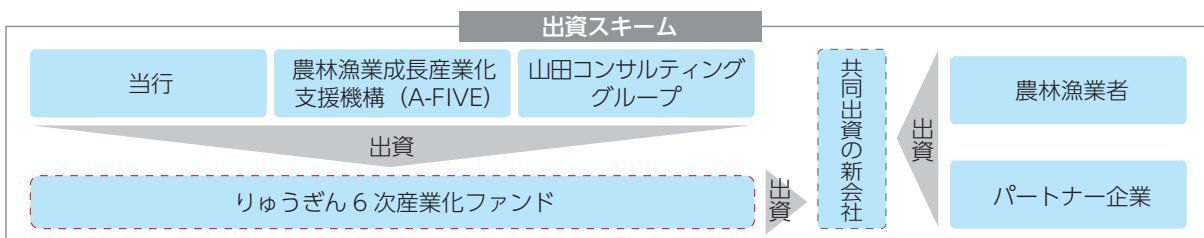
#### ①6次産業化に関する支援

今後の成長が見込まれる農林畜産漁業の6次産業化に向け、県内外機関との業務提携、業務協力を進め、農業ビジネスに関して積極的な情報発信を行うとともに、個別相談に対応するなど、県内の6次産業化支援に努めております。また県内銀行初の沖縄県農業信用基金協会提携ローン「りゅうぎんアグリローン」や肉用牛繁殖農家向けローン「モーちゃんパワー」を取り扱っています。



#### ②6次産業化ファンドによる支援

農林漁業成長産業化支援機構（A-FIVE）、山田コンサルティンググループ株式会社と共同で「りゅうぎん6次産業化ファンド」を設立し、2020年3月31日現在、6次産業に取り組む2社への出資を実行しています。



# 中小企業の経営の改善および地域の活性化のための取り組み

## ■ 成長段階における支援

### 目利き力向上への取り組み

#### (1) 事業内容を適切に理解する取り組み

財務分析に加えて、経営環境や将来性などお客様の事業内容の適切な理解に努めています。さらなるお客様の企業価値向上に向け、対話を通じた事業性評価シート\*の作成等による経営課題の共有に取り組んでいます。

	先数	融資残高
事業性評価に基づく融資を行っている与信先数および融資残高	2,874先	4,327億円

**【用語説明】** \*お客様との対話を通じて当行が作成する独自の事業性評価の分析資料

#### (2) 経営者保証に関するガイドラインへの取り組み

当行では、2013年12月5日に「経営者保証に関するガイドライン研究会」が発表した「経営者保証に関するガイドライン」および2019年12月24日に発表した『事業承継に焦点を当てた「経営者保証に関するガイドライン」の特則』の趣旨や内容を踏まえ、お客様と保証契約を締結する場合、お客様から既存の保証契約の見直しの申し入れがあった場合、および保証人のお客様が保証債務の整理を申し立てられた場合は、本ガイドラインに基づき誠実に対応するよう努めております。

	項目	2019年度実績
1	新規に無保証で融資した先数 (経営者保証の代替的な融資手法として、停止条件付保証契約および解除条件付契約、ABLを活用した先数含む)	1,820先

	項目	2019年度実績	
			うち2019年度下期実績
1	新規に無保証で融資した件数 (経営者保証の代替的な融資手法として、停止条件付保証契約および解除条件付契約、ABLを活用した件数含む)	2,498件	1,262件
2	保証契約を解除した件数	181件	93件
3	新規融資件数	7,208件	3,572件
4	新規融資に占める経営者保証に依存しない融資の割合	34.65%	35.33%

#### 事業承継時における保証徴求割合(4類型)

	項目	2019年度下期実績	
		件数	割合
1	代表者の交代時において、旧経営者との保証契約を解除せず、かつ、新経営者との保証契約を締結した件数と割合	1件	2.22%
2	代表者の交代時において、旧経営者との保証契約は解除しなかったが、新経営者との保証契約は締結しなかった件数と割合	0件	0.00%
3	代表者の交代時において、旧経営者との保証契約を解除する一方、新経営者との保証契約を締結した件数と割合	44件	97.78%
4	代表者の交代時において、旧経営者との保証契約を解除し、かつ、新経営者との保証契約を締結しなかった件数と割合	0件	0.00%

#### (3) 無担保融資の取り組み

お客様との対話を通じ目利き力向上に努め、担保・保証に依存しない融資慣行を確立させ、円滑な資金供給を行ってまいります。

(2020年3月31日現在)

項目	無担保融資先数
地元の中小企業融資における無担保融資先数	5,111先

#### (4) ABL (動産・債権担保融資)

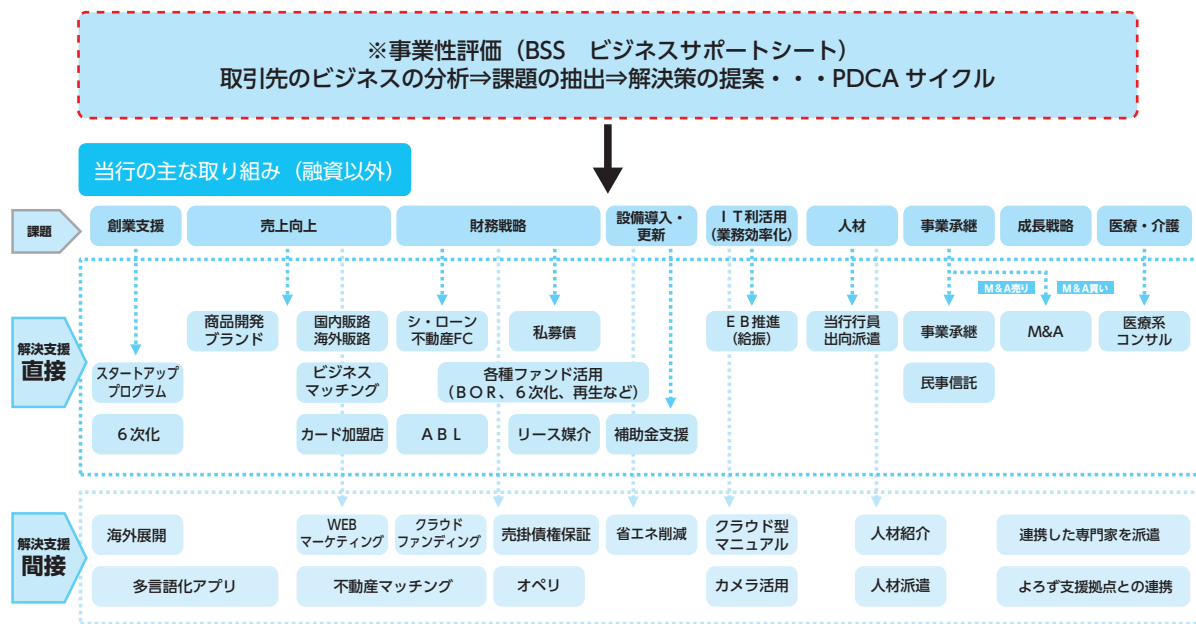
不動産担保や個人保証に必要以上に依存しない融資に積極的に取り組んでおり、動産や債権を担保としたABLを推進していくために、本部・営業店に25名の動産評価アドバイザーを配置しています。

	2019年度実績
ABL (動産・債権担保融資)	12件/2,556百万円
うち動産担保融資	4件/555百万円
うち債権担保融資	4件/1,769百万円
うち動産・債権担保融資	4件/232百万円



## 地域の課題に対する取り組み

当行では、事業性評価を起点に取引先企業のビジネスの把握および様々な課題を共有し、解決に向けて直接または間接（提携先活用）にソリューション提案を行い、取引先の課題解決をサポートしております。



## トップライン支援

	2019年度実績
本業支援先数	327先

### ①こととや商談会の開催

2019年4月、国内大手小売店と連携して個別商談会を開催し、県内企業の販路開拓支援を行いました。

### ②台湾マーケットセミナー

2019年7月、台湾マーケットセミナーを開催し、台湾への事業展開を考える県内企業の販路開拓支援を行いました。

### ③沖縄大交易会への参画

2019年11月、国内最大規模の「食」の商談会である沖縄大交易会が開催され、当行は企画・運営に携わるとともに、行員の派遣および参加企業のサポートを通して販路開拓支援に取り組んでいます。

### ④宿泊業向け外国人材活用セミナー

2020年2月、海外日本語学校等と連携して外国人材活用セミナーを開催し、人手不足の状況にある宿泊業の課題解決に取り組んでいます。

### ⑤ビジネスマッチング先の拡充

売上増加を図る県内企業のニーズに対応するため、外国語対応、ECサイト、売掛債権保証サービス等のビジネスマッチング提携先を拡充しております。

### ⑥外部機関との連携等

よろず支援拠点との連携および専門家派遣の活用を通して、取引先の売上向上や販路拡大支援に取り組んでいます。

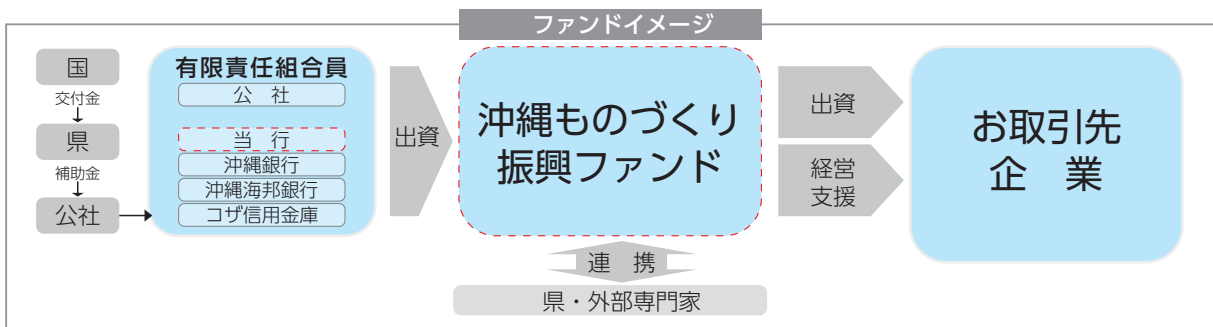
# 中小企業の経営の改善および地域の活性化のための取り組み

## ファンドによる支援

### ① 沖縄ものづくり振興ファンド

2014年12月、ものづくり産業の活性化・効果的な成長支援を目指し設立された官民ファンド「沖縄ものづくり振興ファンド」に出資・参画いたしました。これまで、同ファンドより当行のお取引先3社への投資を実行いたしました。

実行件数	金額
3件	2.5億円



### ② 沖縄活性化ファンド

2015年6月、沖縄経済の活性化を目的に設立された官民ファンド「沖縄活性化ファンド」に出資いたしました。2016年6月、第1号案件として当行お取引先企業へ出資が実行されました。今後も「沖縄活性化ファンド」と共同しながら、沖縄県経済の活性化ならびに県内企業の成長支援に取り組んでまいります。

実行件数	金額
3件	2.5億円





### ③BORベンチャーファンド

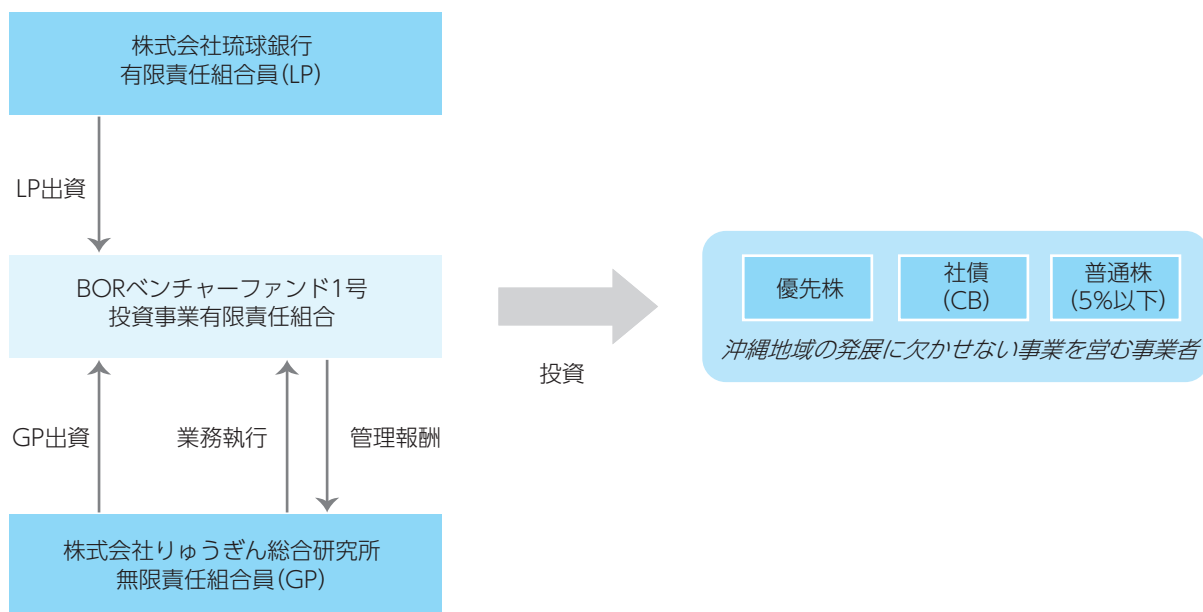
琉球銀行は、沖縄県内のスタートアップエコシステムの構築および地域経済の活性化に向けた取り組みとして、りゅうぎんグループである株式会社りゅうぎん総合研究所を運営会社（無限責任組合員：GP）とする、「BORベンチャーファンド1号投資事業有限責任組合（名称：BORベンチャーファンド）」を設立しました。

本ファンドは、成長・拡大が見込める企業に対して株式による出資を行い、地域の発展に貢献していくものです。

実行件数	金額
8件	約1.1億円

名 称	BORベンチャーファンド1号投資事業有限責任組合
ファンド総額	2億円
設立日	2018年2月20日
存続期間	2018年3月1日からの10年間
出資者	株式会社琉球銀行 株式会社りゅうぎん総合研究所
ファンド運営会社	株式会社りゅうぎん総合研究所
投資形態	株式による出資（株式・種類株・新株予約権付社債等）
投資対象	当行の営業エリア内で事業を営む未上場企業のうち、将来性のある企業や地域活性化につながる事業に取り組む企業等

子会社である株式会社りゅうぎん総合研究所をGP（無限責任組合員）として、ファンドを設立し、当行はLP（有限責任組合員）として当該ファンドに出資しています。



# 中小企業の経営の改善および地域の活性化のための取り組み

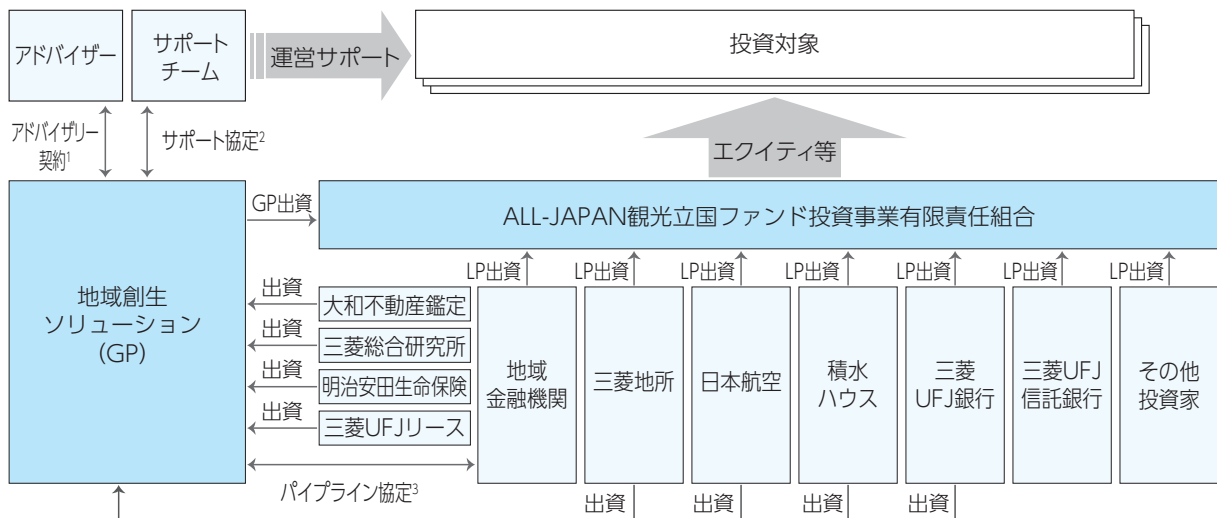
## ④ALL-JAPAN観光立国ファンド

ALL-JAPAN観光立国ファンドは、三菱UFJ銀行が中心となり、立ち上げたファンドになります。国内の観光産業の成長を後押しすることを目的に、ホテル等の宿泊施設の開発プロジェクトや観光関連産業に携わる企業を中心に投資を行います。

また、観光関連事業のサポートチームも備えており、資金提供だけでなく、企業の観光事業運営の支援も行います。

当行を含めた全国の地方銀行31行が当ファンドに出資しています。(2020年3月31日現在)

名称	ALL-JAPAN観光立国ファンド投資事業有限責任組合
組成年月日	2018年4月27日
無限責任組合員	地域創生ソリューション株式会社
有限責任組合員	株式会社三菱UFJ銀行、地方銀行等計39社
出資金総額 (2018年4月27日時点)	200.1億円
存続期間	10年間
投資対象	宿泊施設等、宿泊施設運営会社等、観光関連企業等
投資形態	株式、優先出資、貸付債権、社債等

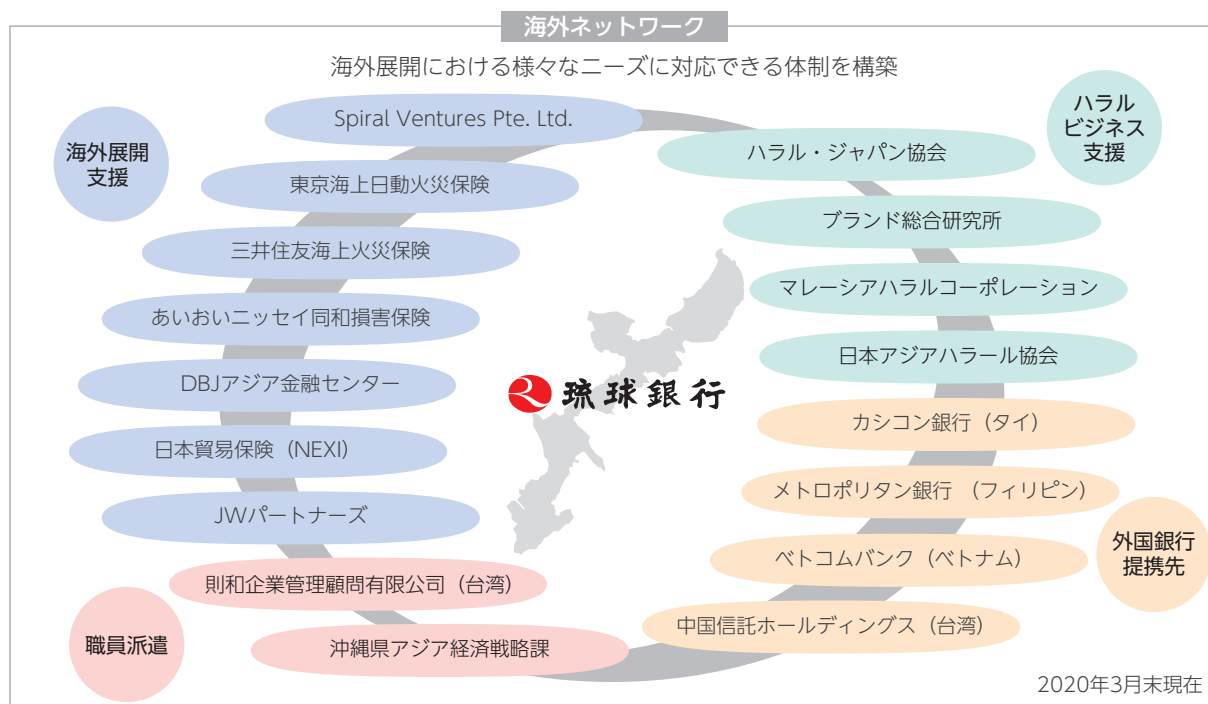


- 注1 アドバイザリー契約…投資判断に関する助言・コンサルティング等  
 注2 サポート協定…投資案件のバリューアップに対してサポートを行う協定  
 注3 パイプライン協定…地域金融機関からの投資案件紹介に関する協定



## 海外ビジネスサポート

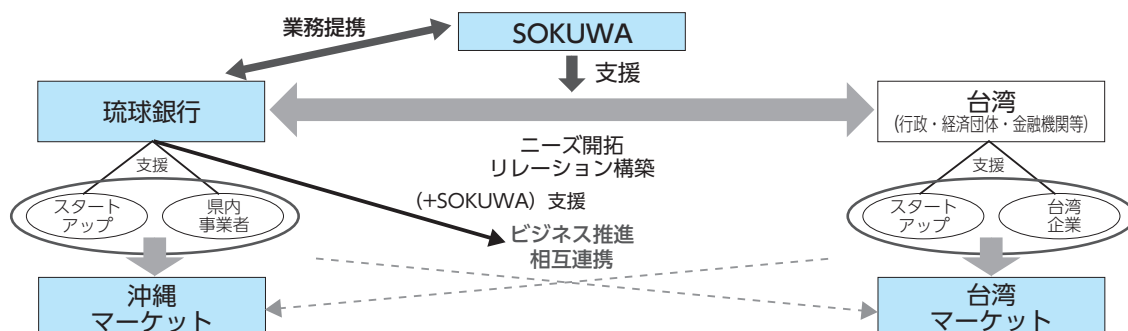
沖縄においては、アジアと近接する好立地条件のもと海外航空キャリアの乗り入れ数、クルーズ船寄港回数の増加や沖縄国際物流ハブ機能の構築等によりアジアへのアクセスが格段と向上しつつあります。足元では世界的な新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い人的往来が一時的に停滞しておりますが、アジアの富裕層・中間層の台頭による海外からのインバウンド観光客の潜在的ニーズは増加基調にあり、「沖縄」の海外における認知度も高まりをみせています。このような環境下において、県内では海外への販路拡大に対する機運が向上していることも踏まえ、当行は外部機関への職員派遣によるアジア地域の情報収集や実務連携などにより、海外ビジネス展開を希望されるお客様へのサポート体制を構築・強化しています。



当行は2018年1月に台湾の事業推進コンサルタント：則和企業管理顧問有限公司（董事長 畠中則和 / 以下、SOKUWA）と業務提携を行い、同年4月より職員1名を同社（台湾）に派遣しております。

SOKUWAは台湾において多くの日系企業の台湾進出や日本各地の自治体等を支援した実績があり、その数は累計100社を超えております。台湾マーケットに関する幅広い知見とネットワークを有している同社との業務提携により、沖縄県内企業の台湾展開ニーズに対し、台湾現地側でより実務的なサポートを実施できる体制を構築いたしました。具体的には、2018年4月の職員派遣以降、2年間で県内企業4社の台湾事業展開を支援しております（※うち一部は継続支援中）。

また、台湾から最も近い日本として認知されている沖縄への進出や県内企業とのビジネス連携を志向する台湾企業およびスタートアップ企業も増えております。そのような環境下において、台湾側のニーズを開拓・把握したうえで県内企業との協業をご提案するなど、当行は今後も沖縄と台湾の双方向におけるビジネス推進や相互連携に向けて尽力してまいります。

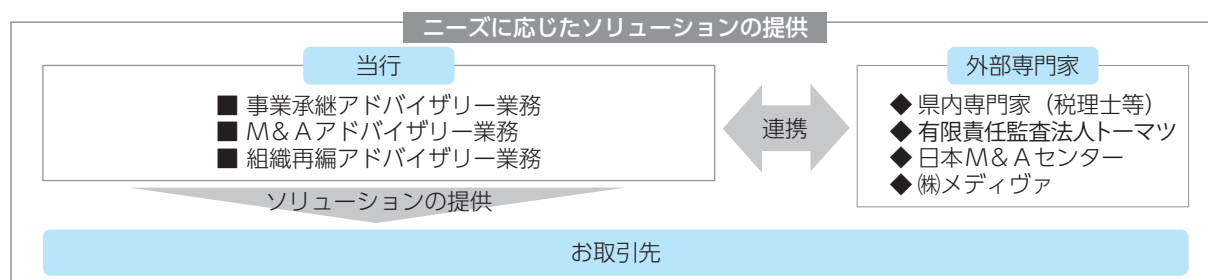


# 中小企業の経営の改善および地域の活性化のための取り組み

## 事業承継・M&A・組織再編支援等

日々の訪問活動などで把握したお取引先の事業承継等に関する経営課題を法人事業部に集約し、外部専門家と連携の上、最適なソリューションを提供しております。

	事業承継支援先数	M&A支援先数
2019年度実績	273先	112先



## ■ 経営改善・事業再生・業種転換等の支援

### 事業再生支援

中小企業再生支援協議会などの外部機関と連携し、個々のお取引先に適した再生手法を検討し、早期の事業再生に取り組んでいます。

外部機関	2019年度実績
中小企業再生支援協議会の活用	4件
経営改善支援センターの活用	6件
経営サポート会議の活用	13件
信用保証協会の経営支援強化促進補助事業の活用	13件
その他外部機関・専門家	0件

※当行メイン先の2019年度完了件数

### 経営改善支援

経営改善の取り組みとして、2019年度は258先の取引先に対し計画策定支援、および経営アドバイス等の支援を行いました。

そのうち9先については債務者区分がランクアップしております。

また、資本金借入金、会社分割、ABL（動産・債権担保融資）等、多様な制度を活用した事業再生支援にも積極的に取り組んでいます。

■貸出条件の変更を行っている中小企業の経営計画の進捗状況（2020年3月末）

条件 変更先数	経営改善 計画書	合計	進捗状況			
			好調先	順調先	不調先	
					①	②
730先	作成	68	9	6	12	41
	未作成	662	-	-	-	-

好調先・売上高、経常利益、実質CFのすべてが計画比120%超の先

順調先・売上高、経常利益、実質CFのすべてが計画比80%以上120%以下の先

不調先①・売上高、経常利益、実質CFのすべてが計画比80%未満の先

不調先②・計画初年度等につき実績比較検証できない先

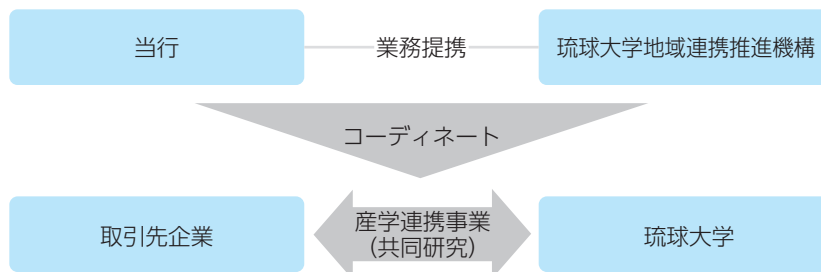


## ■ 地域活性化への取り組み

### 産学官の連携

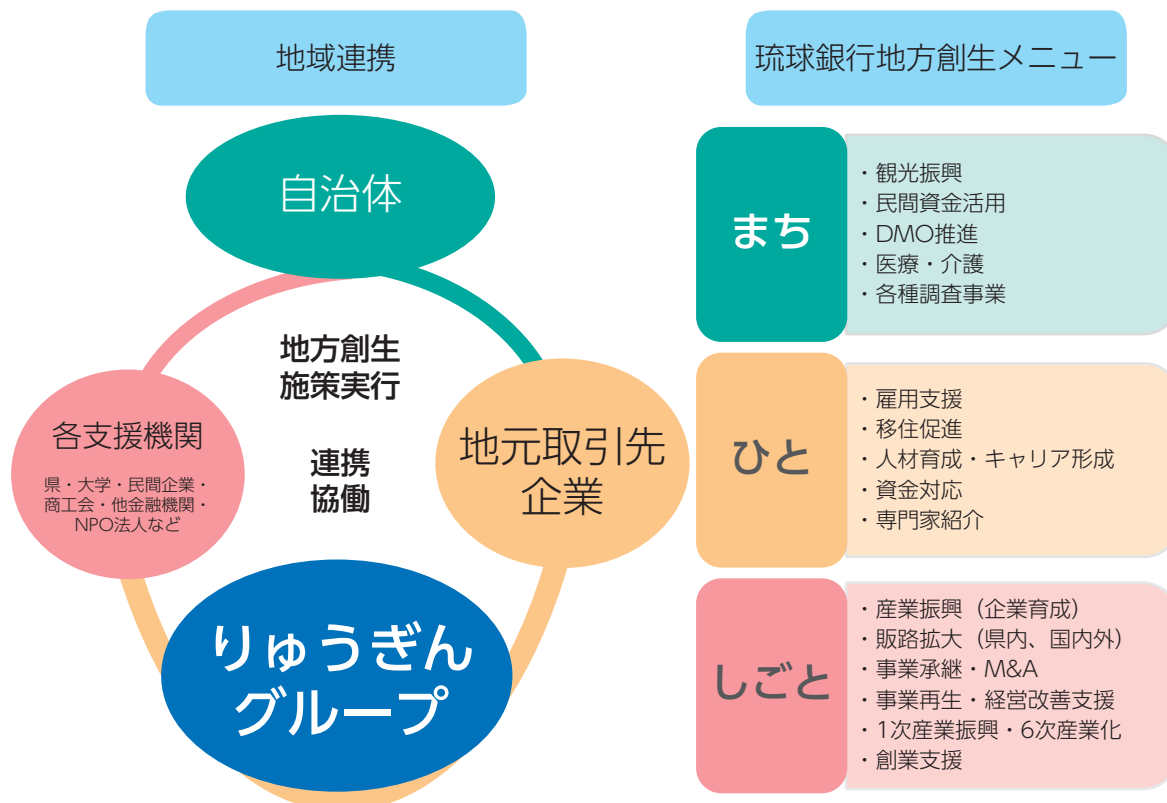
産学が連携し、それぞれのもつノウハウや情報を有効に活用して、地域経済の活性化へと繋げていくことを目的に琉球大学地域連携推進機構と業務提携を締結しています。2015年5月には当行のコーディネートにより県内初となる共同研究の契約が締結され、2020年3月までに4件の契約締結をサポートしました。また、昨年より琉球大学が保有する研究シーズに対して、ビジネス化にかかる検証を支援するギャップ資金を提供し、琉球大学発ベンチャーの創出をサポートしています。

今後も幅広いネットワークを活用し、琉球大学の知的資源とお取引先のニーズをマッチングさせ地域産業の活性化に貢献していきます。



### 地方創生にかかる取り組み

2017年4月、法人事業部内に“地方創生グループ”を設置し、各支店の支店長を地方創生に係る営業店責任者とするなど、本部・営業店が一体となり地方創生の実現に向けて取り組んでいます。また、2018年11月から2020年3月まで、琉球銀行が受け取る手数料の一部を地方創生を目的に設立された団体へ寄付する「りゅうぎん地方創生応援私募債」を取り扱い、沖縄県内の地方創生に積極的に取り組んでおります。



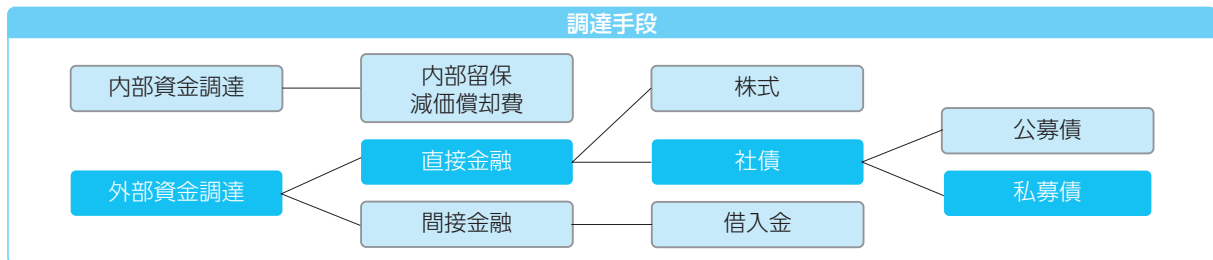
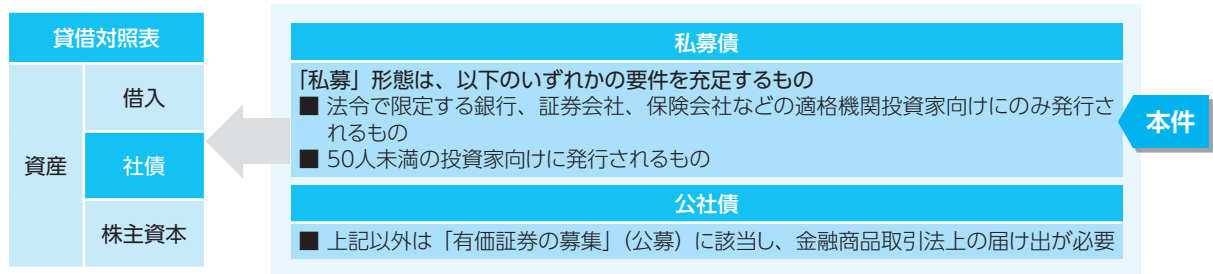
# 中小企業の経営の改善および地域の活性化のための取り組み

## ①りゅうぎん地方創生応援私募債

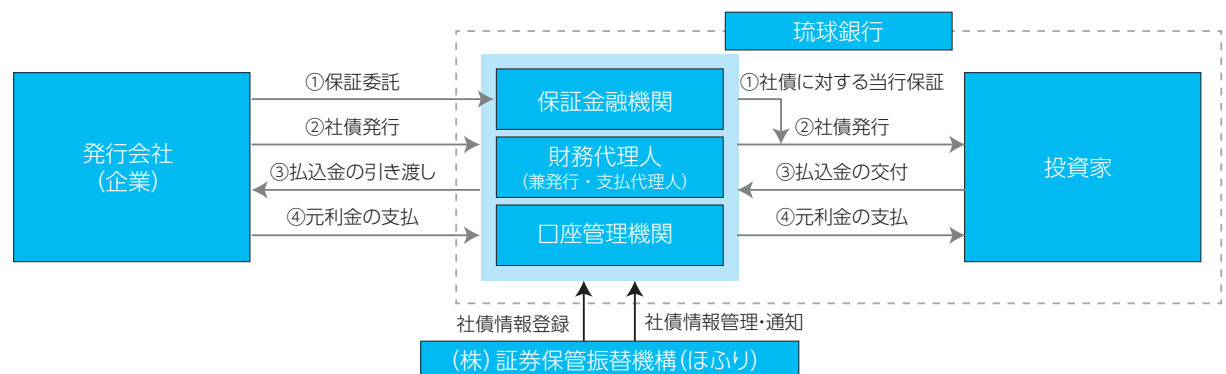
琉球銀行は、2018年11月から2020年3月まで、中小企業の健全な発展を支援し地方創生に寄与するため、間接調達による資金調達のみならず、資本市場からの直接調達の道を開き、資金調達の多様化を図るため「りゅうぎん地方創生応援私募債」を取扱いいたしました。

今後も「地域から親しまれ、信頼され、地域社会の発展に寄与する銀行」を目指して、地域貢献・地方創生に資する活動に取り組んでまいります。

	組成件数
2019年度実績	19件



- 企業が無担保で発行する私募債について、当行が保証し、且つ私募債は、当行が投資家として買受けます。  
※社債そのものは、無担保ですが、当行の保証に対して担保提供や連帯保証人をお願いする事があります。
- また、当行は企業発行の私募債の財務代理人として、契約書の作成および投資家への元利金の支払等の事務を行います。





## コーポレートガバナンスの基本的な考え方

当行は、経営理念の実現に向けて、株主をはじめお客様・従業員・地域社会等のステークホルダーに配慮しつつ、透明・公正かつ迅速・果敢な意思決定を行うための仕組みを構築し、当行の持続的な成長と企業価値の向上を図ることをコーポレートガバナンスの基本的な考え方としております。なお、コーポレートガバナンスの充実にあたっては、以下を基本方針としております。

- ・当行は、株主の権利を尊重し、株主が権利を適切に行使することができる環境の整備と、株主の実質的な平等性の確保に努める。
- ・当行は、株主、お客様、従業員、地域社会等の幅広いステークホルダーとの適切な協働により、健全な事業活動倫理を尊重する企業文化・風土の醸成に努める。
- ・当行は、非財務情報を含む会社情報の適切な開示と、経営の透明性・公正性の確保に努めるとともに、当行の持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に資するよう、株主との建設的な対話に努める。
- ・当行は、取締役会および監査役会が株主に対する受託者責任・説明責任を踏まえ、当行の持続的成長と中長期的な企業価値の向上を図るとともに、職務執行の監督および監査の実効性確保に努める。

## 会社の機関の内容および内部統制システムの整備の状況

当行の取締役会は取締役9名（うち社外取締役3名 2020年6月24日現在）で構成されており、毎月1回、定例の取締役会を開催するほか、必要に応じ臨時取締役会を開催しております。取締役会には監査役4名（うち社外監査役3名 2020年6月24日現在）、執行役員1名（2020年6月24日現在）を参加させ、取締役・監査役および執行役員間の十分な討議と意思疎通により、迅速な意思決定と相互牽制機能の強化を図っております。取締役会の権限は定款で定められており、業務執行の決定や法令および定款に定める事項を決し、取締役の職務の執行を監督しています。また、頭取、専務、常務の三役以上で構成する常務会を設置し、取締役会より委任を受けて経営上の重要課題について決議するとともに、頭取の職務を補佐するために日常業務の計画・執行・管理に関する重要事項を審議し、または頭取の諮問に答申しています。

監査役会は監査役4名（2020年6月24日現在）で構成されており、毎月1回、定例の監査役会を開催するほか、必要に応じ随時開催しております。監査役会は、当行での業務経験が豊かな常勤監査役1名、コンサルタントおよび大学教授としての専門的な知見がある社外監査役1名、会計の専門家としての豊富な経験と高い見識がある社外監査役1名、企業経営に関する豊富な経験と幅広い見識がある社外監査役1名で構成され、オブザーバーとして社外取締役3名（2020年6月24日現在）も参加し、取締役会から独立した立場で、内部監査部門や会計監査人と連携して取締役の職務執行を適切に監査しており、経営の監視機能として十分機能するものと判断し、現行の態勢を採用しております。

また、当行のコーポレート・ガバナンスに関わる特に重要な事項を検討するに当たり、取締役会の諮問機関としてコーポレート・ガバナンス委員会を設置しており、取締役会の機能の独立性・客観性と説明責任を強化するほか、独立役員間および独立役員と経営陣幹部との連携・認識共有を図っております。なお、コーポレート・ガバナンス委員会は独立役員の適切な関与・助言を得るため過半数を独立役員で構成しているほか、委員長は独立社外取締役の中から委員の互選により選任しております。

2019年度は取締役会を15回、常務会を60回、コーポレート・ガバナンス委員会を5回開催し、経営に関する諸問題をスピーディーかつ的確に協議・決定しております。また、監査役会は15回開催しております。

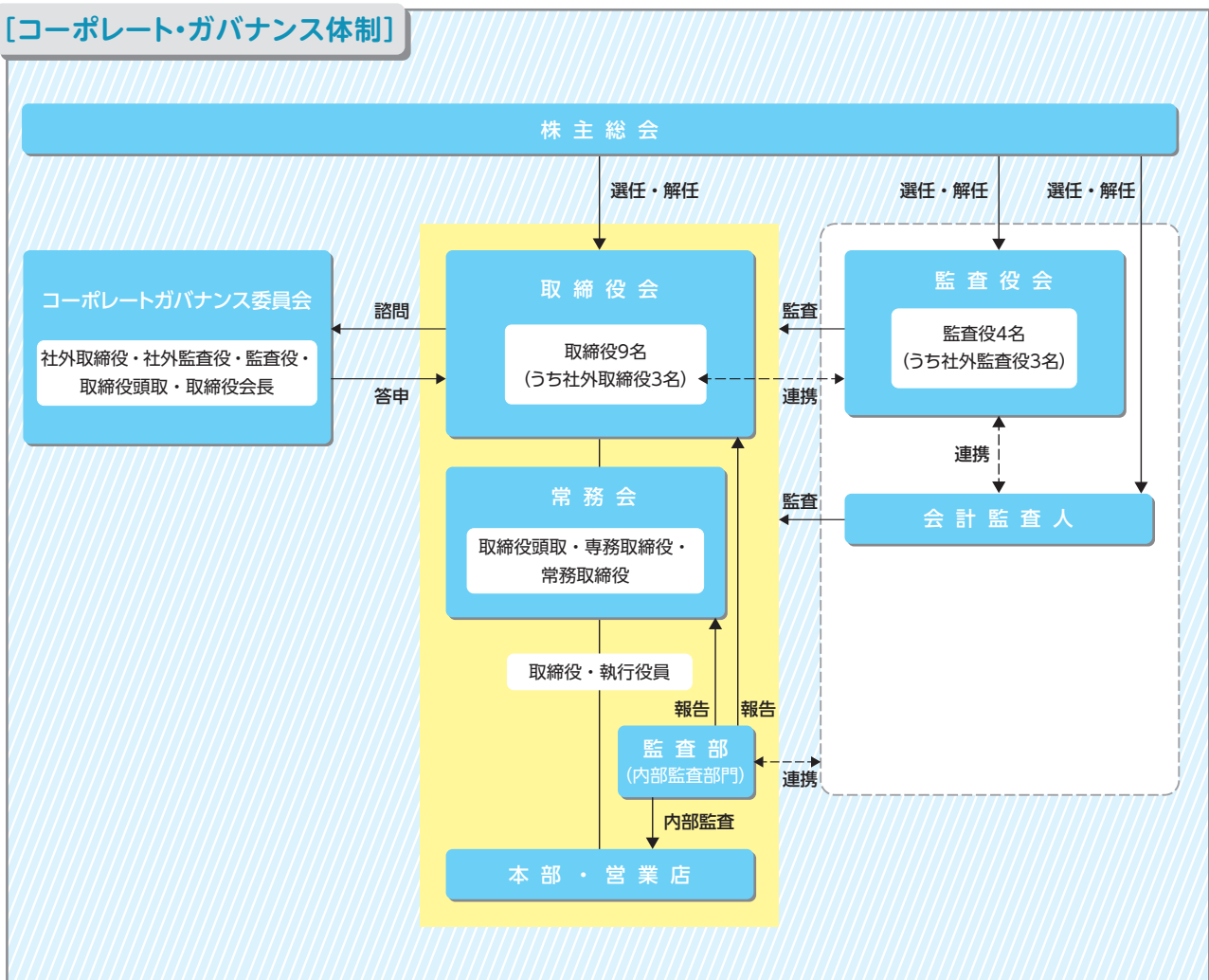
当行は、会社法第427条第1項の規定により、社外取締役および社外監査役との間において、会社法第423条第1項に定める損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく責任の限度額は会社法第425条第1項各号に定める額の合計額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役および社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意かつ重大な過失がないときに限られます。

# コーポレート・ガバナンス

その他、会社法の定めにより、「内部統制システムの構築に関する基本方針」を制定し、適時見直しを行うとともに、頭取を委員長とするコンプライアンス委員会を設置し、法令遵守に係る基本方針の策定、内部規程・組織体制の整備、評価・改善活動に積極的に取り組んでいるほか、重要な協議事項について取締役会へ報告する体制を構築しております。また、子会社の業務の適正性を確保し、経営の効率化ならびに適切なリスク管理を実現するため、管理体制、権限、当行への調整・報告事項等を「りゅうぎんグループ統括要綱」で定めております。

リスク管理体制については、銀行における各種リスクを適切に管理することを目的に、リスクの種類ごとに管理部署を設置し、重要なリスクは管理部署から統括部署であるリスク統括部に情報を集約し、網羅的にリスクを把握、コントロールする体制を構築しております。

## 【コーポレート・ガバナンス体制】





# 法令等遵守（コンプライアンス）体制

## 法令等遵守（コンプライアンス）体制

金融取引では、公正な競争の確保、マネー・ロンダリングの防止、インサイダー取引の禁止など、遵守すべき法令やルールが多数存在するほか、社会的規範を逸脱することがないように、不健全な融資や営業活動を慎み、誠実で公正な行動をとることが求められます。

琉球銀行は、こうした法令やルールを厳正に遵守するため、法令等遵守（コンプライアンス）の徹底を経営の最重要課題と位置づけ、経営陣自ら率先してコンプライアンス、マネー・ロンダリング等防止の推進に取り組んでいます。

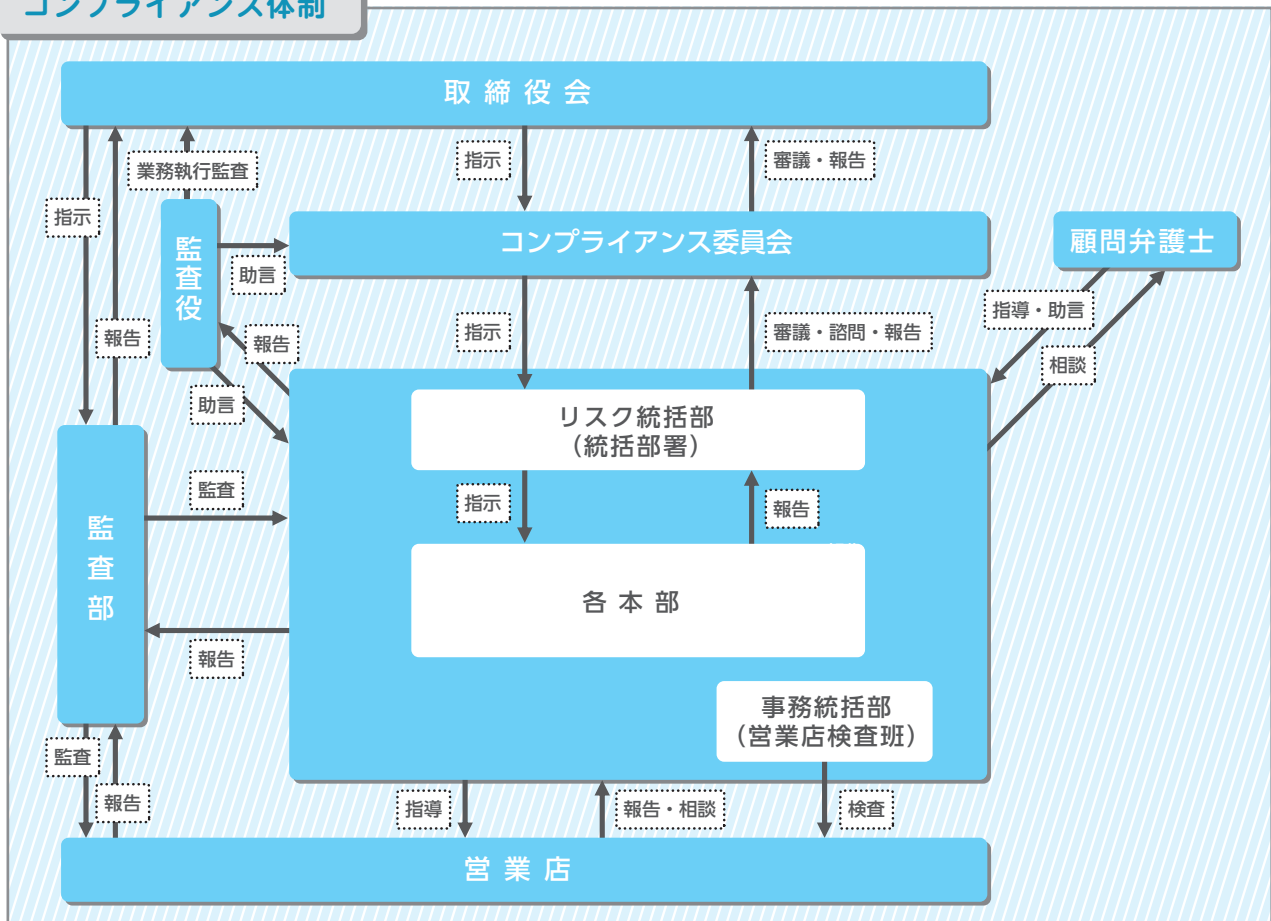
コンプライアンス、マネー・ロンダリング等防止に関する企画・推進は、コンプライアンス担当役員のもとリスク統括部が担い、重要事項は経営陣が参加するコンプライアンス委員会やAML/CFT対策委員会で審議しています。各本店には、コンプライアンス統括責任者（部長、支店長）およびコンプライアンス担当者（副部長、次長、副支店長等）を配置し、日々のチェック体制を強化しています。また、「コンプライアンス・マニュアル」を作成し、コンプライアンス関連研修や各部署における勉強会などを通じて、コンプライアンスの周知、徹底を図っています。

さらに、コンプライアンスを着実に実現させるために、毎年度コンプライアンス・プログラム（実践計画）を策定し、コンプライアンスに関する諸施策や担当部署等を明確にしています。プログラムの具体的な内容としては、新商品・サービス等の取り扱いを開始する際のリスク統括部による法令等遵守事前確認や、全ての役職員による定期的なコンプライアンス自己チェックなどがあり、こうしたコンプライアンス・プログラムの実施状況をコンプライアンス委員会等で定期的にフォローすることで、法令等遵守（コンプライアンス）に関する諸施策を着実に実践しています。

**マネー・ロンダリング**：日本語では資金洗浄といい、麻薬や各種の犯罪等を通じた不正な利益を預金や為替、有価証券等の取引を通じて正当な収入に見せかけたり、資金の真の所有者を分からなくする行為です。

**インサイダー取引**：内部者取引ともいい、役職員が業務上知り得た未公開の情報に基づき株式等を売買することで、法律により禁止されています。

## コンプライアンス体制



# 法令等遵守（コンプライアンス）体制

## コンプライアンス基本方針

琉球銀行は、コンプライアンスに対する基本方針を、経営理念に則り、また全国銀行協会制定の「行動憲章」を踏まえて策定しています。これらは、琉球銀行の職員が日々の業務を遂行する上で基本となるものです。

1. 銀行の社会的責任と公共的使命を果たします。
2. 法令やルールを厳格に遵守します。
3. 反社会的勢力との関係遮断を徹底します。
4. 質の高い金融サービスを提供します。
5. 社会とのコミュニケーションを図ります。
6. 役職員の人権等を尊重します。

## 反社会的勢力に対する基本方針

琉球銀行は、市民社会の秩序や安全に脅威を与え、健全な経済・社会生活の発展を妨げる反社会的勢力に対する基本方針を以下のように定め、役職員一同これを遵守することにより、業務の適切性と健全性の確保に努めます。

1. 反社会的勢力には組織として対応します。また、反社会的勢力に対応する役職員の安全確保に努めます。
2. 反社会的勢力からの不当要求に備えて、平素から警察や、警察関係機関および弁護士等外部の専門機関との連携関係を構築することに努めます。
3. 反社会的勢力とは取引関係を含めて一切の関係をもちません。
4. 反社会的勢力による不当要求に対しては一切応じず、民事および刑事の両面から法的対応を行います。
5. 反社会的勢力に対して裏取引や資金提供は絶対に行いません。

## 勧誘方針

琉球銀行は、金融商品の販売等にあたって以下の項目を遵守し、お客さまに対して金融商品の適正な勧誘を行います。

1. お客さまの知識、経験、投資目的および財産等の状況に照らし、適切な金融商品の勧誘を行います。
2. 商品内容やリスク内容など重要な事項を十分理解していただけるよう、適切な商品説明に努めます。
3. 断定的判断を提供したり、事実と異なる情報を提供するなど、お客さまの誤解を招くような説明は行いません。
4. お客さまにとって不都合な時間帯やお客さまに迷惑な場所などで勧誘を行いません。
5. お客さまに対し適切な勧誘を行うことができるよう行内の研修体制を充実させ、商品知識の習得に努めます。

当行が確定拠出年金制度の運営管理業務を行うにあたって、確定拠出年金法上の「企業型年金に係る運営管理業務のうち運用の方法の選定および加入者等に対する提示の業務」および「個人型年金に係る運営管理機関の指定もしくは変更」に関して、上記の勧誘方針を準用いたします。

「勧誘方針」は、「金融商品の販売等に関する法律」第9条に定める「勧誘に関する方針」です。

## 当行が契約している指定紛争解決機関

### 【全国銀行協会】

連絡先：全国銀行協会相談室  
電話番号：0570-017109 または  
03-5252-3772  
受付日：月曜日～金曜日（祝日および銀行の休業日を除く）  
受付時間：午前9時～午後5時  
※全国銀行協会は銀行法および農林中央金庫法上の指定紛争解決機関です。

### 【信託協会】

連絡先：信託協会信託相談所  
電話番号：0120-817335 または  
03-6206-3988  
受付日：月曜日～金曜日（祝日および銀行の休業日を除く）  
受付時間：午前9時～午後5時15分  
※信託協会は信託業法および金融機関の信託業務の兼営等に関する法律上の指定紛争解決機関です。

### 【特定非営利活動法人 証券・金融商品あっせん相談センター】

連絡先：特定非営利活動法人 証券・金融商品あっせん相談センター（略称：FINMAC）  
電話番号：0120-64-5005  
受付日：月曜日～金曜日（祝日（振替休日を含む）および年末年始（12月31日～1月3日）を除く）  
受付時間：午前9時～午後5時  
※特定非営利活動法人 証券・金融商品あっせん相談センター（略称：FINMAC）は、金融商品取引法上の指定紛争解決機関です。



# リスク管理への取り組み

## リスク管理体制

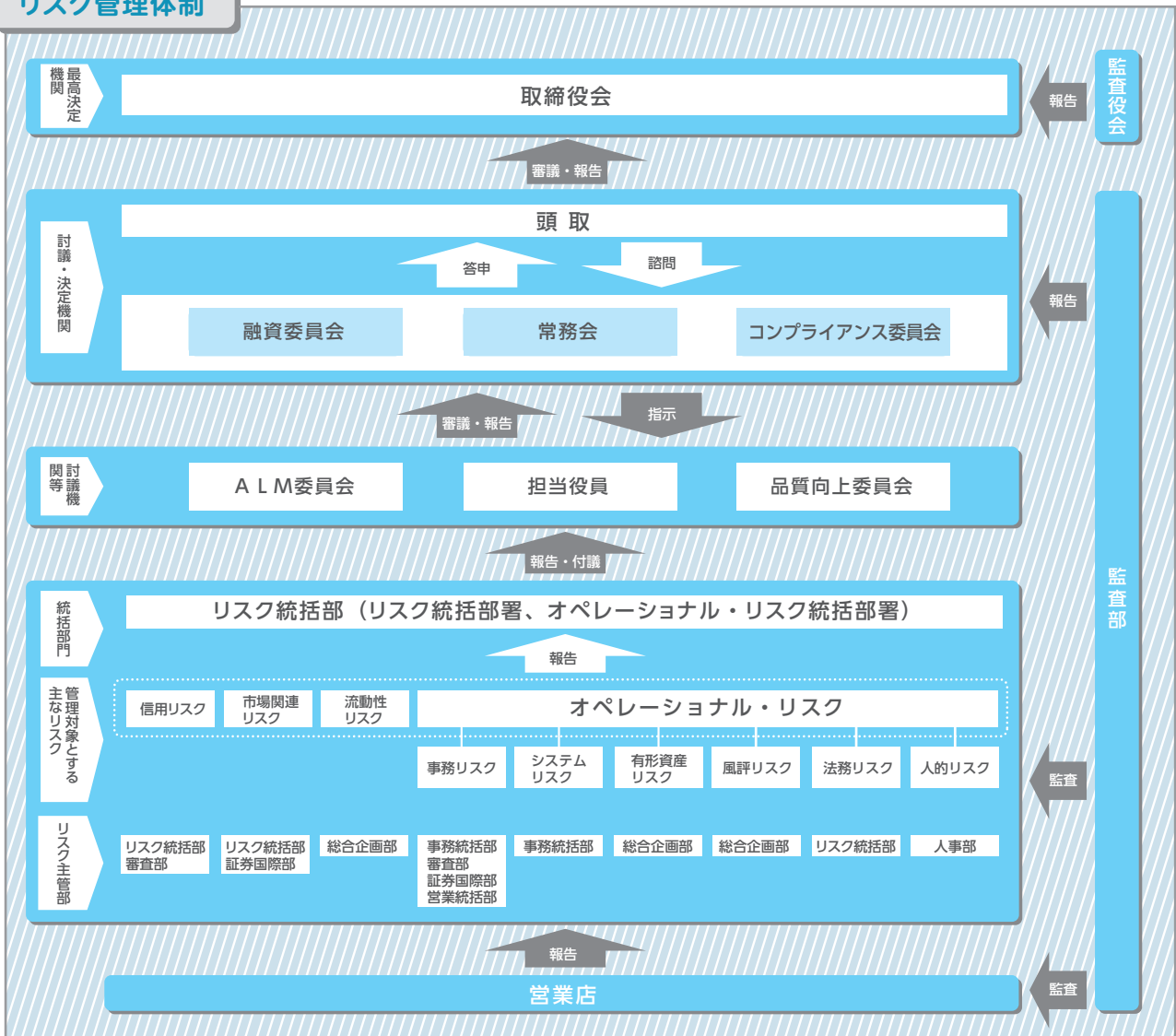
金融の自由化・国際化の進展や銀行の資金運用、調達手段の多様化、証券化商品等の金融技術の発達などにより銀行が直面するリスクはますます多様化・複雑化しています。銀行が経営の適切な運営および、健全性や安定的な収益を確保していくためには、このように多様化・複雑化するリスクを適切に把握・管理しコントロールしていく必要があります。

さまざまなリスクの中でも、特に銀行が注意すべきリスクは、お取引先の倒産等により貸出金などが回収できなくなる「信用リスク」、市場金利や市場価格の変動による貸出金や預金の価値の変動や、株式・投資信託・債券などの投資有価証券の価値の変動によって損失を被る「市場関連リスク」、資金の決済が滞る「流動性リスク」、不適切な事務処理により損失を被る「事務リスク」、コンピュータシステムでトラブルが発生する「システムリスク」などです。

琉球銀行では、このようなさまざまなリスクを適切に把握・管理することを目的に、リスクの種類ごとに管理部署を設置し、これら管理部署から統括部門であるリスク統括部へ重要なリスク情報を集約する体制としています。

集約されたリスク情報は、各管理部署やリスク統括部で分析された後、ALM委員会等で討議し、重要性を勘案して決定機関である常務会や取締役会で審議するなど、経営陣が各種リスクへの対応策を適切に判断する体制となっています。

## リスク管理体制



# リスク管理への取り組み

## リスク管理の基本方針

琉球銀行では、「リスク管理態勢の一層の充実・強化」を経営上の重要課題のひとつと位置づけ、そのための組織体制を整備・強化するとともに、諸リスクを統合的に管理し、その総量と自己資本を比較・対照することによって、「収益の安定性」と「経営の健全性・適切性」とのバランスを重視した経営を目指すことを基本方針としています。

## 統合的リスク管理

リスク管理の基本方針に基づき、2007年度より、統一的な計測手法（**VaR**）により信用リスク、市場関連リスク等を計測し、それぞれのリスクに対して資本を配賦する「統合的リスク管理」を実施しています。

具体的には、半期毎に自己資本を各リスクに配賦し、配賦した資本に対する各リスクカテゴリーのリスク量（**VaR**）の状況を毎月開催のALM委員会でモニタリングし、リスクのコントロールを行っています。

**VaR (Value at Risk)** : 価格が変動する資産や負債を過去の価格変化のデータに基づき、統計的な手法を用いて考えられる最大の損失額を計測する手法のことです。たとえば過去1年間の株式相場の変動を基に、現在保有している株式で最大いくらの損失が発生するかを計測し、その金額をリスク量とします。

## 管理対象とする主なリスク

リスクの種類	概要	
信用リスク	お取引先の倒産や経営悪化などにより、貸出金などの元本や利息が当初の契約どおりに返済されないなど、価値が減少ないし消失することにより損失を被るリスク	
市場関連リスク	金利リスク	貸出金・投資債券や預金など、資産や負債の価値が金利変動によって変動し損失を被るリスク
	価格変動リスク	株式や投資信託の市場価格が変動することにより、金融資産の価値が変動し損失を被るリスク
流動性リスク	市場環境の悪化などにより、必要な資金が確保できずに資金繰りがつかなくなる場合や、通常より著しく高い金利での資金調達を余儀なくされることにより損失を被るリスク	
オペレーショナル・リスク	業務の過程、役職員の活動もしくはシステムが不適切であることまたは外生的な事象により損失を被るリスクであり以下のリスクをいう	
事務リスク	役職員が事務処理を誤ったり、あるいは事故・不正等を起こすことにより損失を被るリスク	
システムリスク	コンピュータシステムのダウンまたは誤作動等、システムの不備等に伴い損失を被るリスクと、コンピュータが不正に使用されることにより損失を被るリスク	
法務リスク	当行が関与する各種取引や訴訟等において、法律関係に不確実性や不備等があることにより損失を被るリスク、ならびに法令等遵守態勢の未整備や遵守基準の不徹底等により損失を被るリスク	
風評リスク	評判の悪化や風説の流布により当行の信用が著しく低下し、預金流出、株価下落、顧客取引消失等により経営危機につながり不測の損失を被るリスク	
有形資産リスク	災害や犯罪または資産管理の瑕疵等の結果、有形資産の毀損や執務環境等の低下等により損失を被るリスク	
人的リスク	重大な就業規則違反や法令等遵守の観点から問題となる行為および職場環境の悪化による健康障害等により損失・損害を被るリスク	

## 信用リスク管理

琉球銀行の信用リスク管理体制は、営業部門から独立し与信判断や貸出金等の与信から生ずる信用リスクの管理を行う審査部、市場部門の信用リスクテイクや信用リスク管理を行う証券国際部、与信監査部門として資産の自己査定を監査するリスク統括部の相互牽制体制から構成されています。

信用リスクのうち与信集中リスクについては、取締役会の定めた「融資運用方針」や「信用リスク管理方針」により特定の業種・企業・グループへの与信の集中を統制しており、融資運用方針の遵守状況を定期的に取り締役会が確認しております。

貸出金などの与信から生ずる信用リスクの全体的な把握については、**信用格付**毎の倒産確率や債権毎の保全状況に応じた**信用リスクを計量化**することで行っており、格付毎・業種毎・地域毎の信用リスクの分布状況を把握・分析することで信用リスクを管理しております。

市場取引にかかる信用リスク管理は、おもに公正な第三者機関である外部格付機関の評価を用い、格付ランクに応じた取引限度額を設定、遵守することでリスク管理を徹底しております。

**信用格付制度**：琉球銀行では、お取引先の信用度を正確に把握するための指標として信用格付制度を採用しております。信用格付は、主にお取引先の財務状況、技術力、経営手腕等を総合的に勘案して13段階に区分しており、与信の決裁権限、金利適用基準、お取引先の業況管理基準など幅広く活用するなど、信用リスク管理の根幹をなす指標となっております。

**信用リスクの計量化**：琉球銀行では、全国地方銀行協会が開発した信用リスク情報統合システム（CRITS）を採用し、信用格付毎の倒産確率の算出、倒産確率に応じたリスク量の計測、倒産確率の変動によるリスク量の変動幅をモンテカルロシミュレーションで算出し、信用リスク管理を行っております。

## 市場関連リスク管理

琉球銀行では、自己資本・収益力・リスク管理能力などの経営体力を勘案の上、許容可能なリスク量をあらかじめ定め、市場リスクのコントロールと収益の安定的な確保に努めています。

体制面では、市場取引（フロント）業務、市場リスク管理（ミドル）業務、事務管理（バック）業務を厳格に分離することで、相互牽制が有効に機能する体制を整えています。たとえば、市場リスク管理業務部門においては、市場リスク量を常時モニターできる体制を整えており、計測した損益状況やリスク量を定期的に経営陣に報告しています。また、事務管理業務部門は市場取引業務部門が約定した取引内容をチェックしています。

## ALM体制（Asset and Liability Management 資産・負債総合管理）

ALM（資産・負債総合管理）とは、収益に直結するリスクを銀行の経営体力の範囲内に収めつつ、安定的かつ持続的に収益を増加させるために、銀行の資産・負債を総合的に管理することをいいます。

琉球銀行では、金利リスクをコントロールするための手法として、スプレッド収益管理を導入しています。スプレッド収益管理は、銀行とお客様との預金・貸出金取引や銀行が独自に行う対マーケット取引などが、個別に市場金利と比較して効率的に行われているかを分析する**管理会計制度**です。これにより、銀行の資産・負債に潜む金利リスクを的確に把握することが可能になりました。

さらに、琉球銀行では、スプレッド収益管理に加え、信用リスク、市場リスク、流動性リスクなどを一元管理するALM体制としています。ALMの基本方針を決定するALM委員会では、市場動向の把握・分析に加え、VaRや**bpV**などのリスク指標を用いてリスクの許容限度に対するリスク量の状況、収益とリスクテイクのバランスなどを十分に検討したうえで、リスクを所定の範囲内にコントロールし、収益の安定化を図っています。

**管理会計制度**：管理会計制度とは、単年度の収益状況などの情報を株主やお客様へ提供する財務会計制度と異なり、企業の収益管理や政策立案に役立てることを目的に、企業が独自に実施する会計制度です。

**bpV**（basis point Value）：金利変動によって価値が変動する資産や負債のリスク量を計測する手法のことです。たとえば金利が1%（100bp）上昇したときに、国債の価格がどの程度変化するかを計測し、その価値の変化額をリスク量（100bpV）とします。



# リスク管理への取り組み

## 流動性リスク管理

琉球銀行では、資金調達・運用構造に即した適切かつ安定的な資金繰りに加え、安全性・収益性のバランスを考慮した効率的な資金調達・運用を基本方針としており、日々の資金繰りを担う“資金繰り管理部署”と資金繰り管理部署の手法ならびに手続きなどの適切性を検証する“流動性リスク管理部署”を明確に区分し、相互に牽制する体制としています。

管理手法としては、支払準備額や預貸率等について、それぞれリスクリミットを設定し、モニタリングを実施することで、流動性リスクの状況を管理しています。また、不測の事態に備えて、資金繰りの状況を逼迫度に応じて4段階に区分し、それぞれの局面において対応策および実施権限者などを定め、速やかに対処できる体制を整えています。

## オペレーショナル・リスク管理

琉球銀行では、オペレーショナル・リスクを①事務リスク、②システムリスク、③法務リスク、④風評リスク、⑤有形資産リスク、⑥人的リスクの6つに区分し、各リスクに主管部を設置するとともに、オペレーショナル・リスクの総合的な管理部署を設置しています。

各オペレーショナル・リスクの主管部は、各リスク管理規程や関連規程等に基づき、専門的な立場からそれぞれのリスクを管理しています。

## 事務リスク管理

琉球銀行では、業務の多様化や取引量の増加に適切に対処し、想定される事務リスクを回避するために、機械化投資の拡充と営業店後方事務の集中処理を積極的に進め、業務の効率化と事務リスクの圧縮に努めています。

また、事務水準の向上や事務事故などの未然防止の観点から、本部の担当者が直接営業店で事務指導にあたるほか、業務別・階層別事務研修において事務取扱規程に基づく正確な事務処理の励行を徹底しています。

本部各部・営業店において「部店内検査」を毎月実施するとともに、本部による定期的な検査を実施し、事務処理全般に係る事務リスク管理態勢の適切性・有効性について検証しています。

## システムリスク管理

今日の銀行業務においては、多種・多様で大量な取引を迅速かつ正確に処理することおよび、お客様に質の高いサービスを提供するため、コンピュータシステム（以下、「システム」）が必要・不可欠な存在となっています。そのシステムに障害が発生すると、預金の払戻しといった日常生活や資金決済などの経済活動に大きな影響を及ぼす恐れがあり、システムを適正かつ円滑に運用することは極めて重要なこととなっています。

琉球銀行では、システムリスク管理方針・管理規程等を定め、システムの適正かつ円滑な運用体制を整えています。また、災害や障害に備えた危機管理計画（コンティンジェンシープラン）を策定し、不測の事態に対応できるよう万全を期しています。

システムの安全対策として、無停電設備を備えた建築構造的にも堅牢なコンピュータセンターにシステムを設置し運用しております。また、コンピュータ機器や通信回線の障害に備えて機器・回線の二重化を図るとともに、大規模災害等によるコンピュータセンター被災に備えた災害対策センターを確保し、バックアップ体制を構築しています。

個人情報・機密情報等のデータ管理におけるシステム対応として、マニュアルで管理方法を明確に定めるとともに、データ使用者の制限や特定を行う本人確認システムを導入するなど、データの不正利用・流出を防止する体制を強化しています。

# コーポレートデータ (りゅうぎんグループ)

## 事業の内容 2020年3月31日現在

当行グループは、当行と連結子会社6社で構成され、銀行業を中心にリース業などの金融サービスを提供しております。

### 【銀行業】

当行は本店を含む営業店76カ店（うち出張所数15）において、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務などを取り扱い、県内中小企業ならびに個人の資金ニーズに対して安定的に資金を供給し、沖縄県における中核的金融機関として、金融システムの安定さらには県経済の発展に寄与しております。また、当行の資金証券部門においては、県内の投資ニーズに対応するため、商品有価証券売買業務、投信窓販業務を取り扱うとともに、有価証券投資業務では預金の支払準備および資金運用のため国債、地方債、社債、株式、その他証券に投資しております。

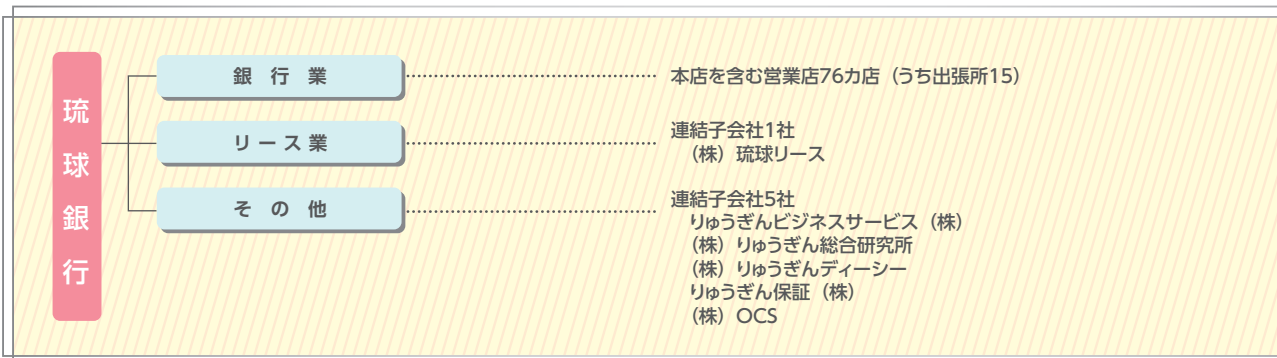
### 【リース業】

株式会社琉球リースにおいて、リース業務等を行っております。

### 【その他】

りゅうぎんビジネスサービス株式会社においては現金精査整理業務、株式会社りゅうぎん総合研究所においては産業、経済、金融に関する調査研究業務、株式会社りゅうぎんディーシーおよび株式会社OCSにおいてはクレジットカード業務、りゅうぎん保証株式会社においては住宅ローン等の保証業務を行っております。

以上に述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



## 子会社等の状況 2020年3月31日現在

(単位：百万円、%)

会社名	所在地	主要業務内容	設立年月日	資本金	当行が有する子会社等の議決権比率	その他
りゅうぎんビジネスサービス株式会社	那覇市久茂地1丁目9番17号	現金精査整理業務等	1983年9月16日	10	100.00	-
株式会社りゅうぎん総合研究所	那覇市壺川1丁目1番地9	産業、経済、金融に関する調査研究業務等	2006年6月28日	23	100.00	-
株式会社りゅうぎんディーシー	那覇市久茂地1丁目7番1号	クレジットカード業務等	1984年4月25日	195	100.00	-
りゅうぎん保証株式会社	那覇市壺川1丁目1番地9	信用保証業務等	1979年7月2日	20	100.00	-
株式会社OCS	那覇市松山2丁目3番10号	クレジットカード、個別信用購入斡旋業務等	2008年8月26日	279	100.00	-
株式会社琉球リース	那覇市久茂地1丁目7番1号	総合リース業務等	1972年5月10日	346	100.00	-

# コーポレートデータ (主要な業務の内容／取締役・監査役)

## 主要な業務の内容

### 預金業務

- (1) 預金  
当座預金、普通預金、貯蓄預金、通知預金、定期預金、別段預金、納税準備預金、外貨預金などを取り扱っています。
- (2) 譲渡性預金  
譲渡可能な預金を取り扱っています。

### 貸出業務

- (1) 貸付  
手形貸付、証書貸付および当座貸越を取り扱っています。
- (2) 手形の割引  
銀行引受手形、商業手形、荷付為替手形および電子記録債権の割引を取り扱っています。

### 商品有価証券売買業務

国債の売買業務を行っています。

### 有価証券投資業務

預金の支払準備および資金運用のため国債、地方債、社債、株式、その他の証券に投資しています。

### 内国為替業務

為替送金、振込および代金取立等を取り扱っています。

### 外国為替業務

輸出、輸入および外国送金その他外国為替に関する各種業務を取り扱っています。

### 付帯業務

- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 代理業務                     <ol style="list-style-type: none"> <li>① 日本銀行代理店、日本銀行歳入代理店業務</li> <li>② 地方公共団体の公金取扱業務</li> <li>③ 株式払込金の受入代理業務および株式配当金、公社債元利金の支払代理業務</li> <li>④ 沖縄振興開発金融公庫の代理貸付業務</li> <li>⑤ 信託代理店業務</li> </ol> </li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>(2) 保護預りおよび貸金庫業務</li> <li>(3) 有価証券の貸付</li> <li>(4) 債務の保証 (支払承諾)</li> <li>(5) 国債および投資信託の窓口販売</li> <li>(6) 生命保険の窓口販売</li> <li>(7) 損害保険の窓口販売</li> <li>(8) 金融商品仲介業務</li> <li>(9) 確定拠出年金業務</li> <li>(10) クレジットカード業務</li> </ol> |
|--|--|

## 取締役・監査役

2020年6月24日現在

### 取締役

取締役会長 (代表取締役)	監査部担当	きん 川	じょう 城 かみ 上	とう 棟	けい 啓 やすし 康
取締役頭取 (代表取締役)		まつ 松	ばら 原	とも 知	ゆき 之 ゆき 之
専務取締役 (代表取締役)	営業統括部、営業推進部、 事務統括部、事務集中部、 ペイメント事業部、 リテール事業部担当	まつ 松	ばら 原	とも 知	ゆき 之 ゆき 之
常務取締役	審査部、リスク統括部担当	ふ 普	く 久	けい 啓	し 靖 やすし 泰
常務取締役	法人営業部、法人事業部、 証券国際部担当	ふ 渡	く 嘉	まさ 當	の り 則
常務取締役	総合企画部、人事部、 総務部担当	しろ 城	ま 間	まさ 當	は る 晴
取締役		ふ 譜	く 久	まさ 當	の り 則
取締役		は 花	ぎ 崎	まさ 正	は る 晴
取締役		と み 富	は ら 原	な 加	こ 子

### 監査役

常勤監査役	とよ 豊	だ 田	りょう 良	じ 二
監査役	たか 高	はし 橋	しゅん 俊	すけ 介
監査役	なか 中	やま 山	きょう 恭	こ 子
監査役	きた 北	がわ 川		ひろ 洋

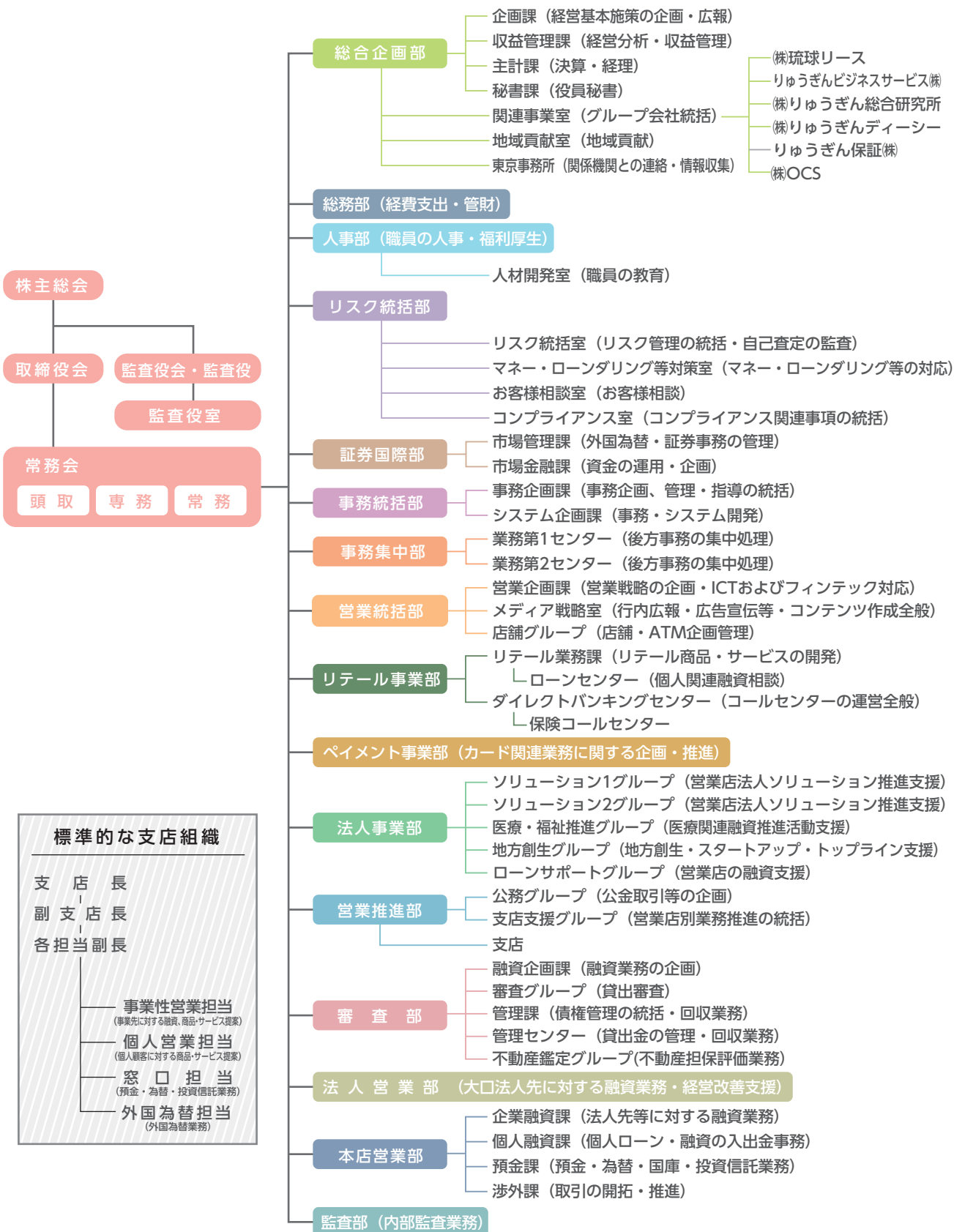
(注) 取締役譜久山當則、取締役花崎正晴、および取締役富原加奈子の3名は、会社法第2条第15号に定める社外取締役です。

(注) 監査役高橋俊介、監査役中山恭子、および監査役北川洋の3名は、会社法第2条第16号に定める社外監査役です。



# コーポレートデータ (組織図)

組織図 2020年4月1日現在



# コーポレートデータ (店舗一覧)

2020年6月30日現在

コーポレートデータ (店舗一覧)

- 各店舗の窓口営業時間は9時～15時までとなっています。  
※バルコシティ出張所の窓口営業時間は、平日10時～19時(16時以降は相談業務のみ) 土日祝10時～19時(相談業務のみ)となります。  
※松尾支店、屋敷支店、久米島支店、県庁出張所、那覇空港内出張所、石田出張所は12時～13時の窓口営業はお休みとなります。
- Ⓐは貸金庫設置店。Ⓐは全ての外国為替取引取扱店。
  - Ⓑは外貨両替と外貨預金のみの取扱店。Ⓒは外貨預金のみの取扱店。
- ATMの機能は下記の通りです。
  - ・当座預金への入金、平日16時前に限ります。
  - ・休日の入金および記帳は、普通預金に限ります。
  - ・当座預金宛の振込は、平日16時以降ならびに土・日・祝日は当日扱いです。(他行宛振込は、平日15時以降ならびに土・日・祝日は翌営業日扱いです)
  - ・振込欄の○は、キャッシュカードならびに現金でお振り込みができます。△はキャッシュカードを利用してお振り込みができます。(現金でのお振り込みはできません)
- Ⓓは、視覚障がい者用ATM設置店。

## 那覇市 (29ヵ店)

**本店** ⒶⒸ Ⓓ ☎(098) 866-1212 (大代表)  
〒900-0015 那覇市久茂地1-11-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込○

**県庁出張所** ⒷⒸ ☎(098) 862-0185 (代)  
〒900-0021 那覇市泉崎1-2-2  
(県庁庁舎内1階)  
 Ⓐ 平日 8:00～20:00 振込○

**那覇市役所内出張所** ⒸⒹ ☎(098) 868-6662 (代)  
〒900-0021 那覇市泉崎1-1-1  
(那覇市役所本庁舎1階)  
 Ⓐ 平日 8:45～18:00 振込○

**那覇空港内出張所** ⒷⒸ ☎(098) 857-6898 (代)  
〒901-0142 那覇市鏡水150  
(那覇空港国内線ビル1階)  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込△  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**那覇ポート支店** ⒷⒸ ☎(098) 868-5181 (代)  
〒900-0033 那覇市久米1-24-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**若狭支店** ⒷⒸ ☎(098) 868-2111 (代)  
〒900-0032 那覇市松山1-34-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**那覇出張所** ⒷⒸ ☎(098) 866-3911 (代)  
〒900-0032 那覇市松山1-34-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**樋川支店** ⒷⒸ ☎(098) 855-6151 (代)  
〒900-0023 那覇市楚辺1-3-25  
 Ⓐ 平日 8:45～18:00 振込○

**松尾支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 861-0111 (代)  
〒900-0013 那覇市牧志1-2-24  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**壹屋支店** ⒷⒸ ☎(098) 867-7121 (代)  
〒902-0067 那覇市安里2-1-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**牧志市場出張所** ⒷⒸ ☎(098) 866-1025 (代)  
〒900-0014 那覇市松尾2-10-10  
 Ⓐ 平日 8:45～20:00 振込○  
 Ⓜ 休日 9:00～20:00 振込△

**泊支店** ⒷⒸ ☎(098) 867-0151 (代)  
〒900-0012 那覇市泊1-6-6  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**大道支店** ⒷⒸ ☎(098) 887-0171 (代)  
〒902-0066 那覇市字大道128-3  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**与儀支店** ⒷⒸ ☎(098) 854-0191 (代)  
〒902-0064 那覇市寄宮2-38-22  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**寄宮支店** ⒷⒸ ☎(098) 854-1124 (代)  
〒902-0064 那覇市寄宮2-38-22  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**石田出張所** (愛称:リゅうざんハロープラザ石田) ⒸⒹ ☎(098) 854-1137 (代)  
〒902-0071 那覇市繁多川1-6-18  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**小祿支店** ⒷⒸⒹ ☎(098) 857-2101 (代)  
〒901-0151 那覇市鏡原町34-47  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**田原支店** ⒷⒸ ☎(098) 857-0391 (代)  
〒901-0152 那覇市字小祿902-3  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**金城支店** ⒸⒹ ☎(098) 858-3933 (代)  
〒901-0155 那覇市金城5-4-11  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**安謝支店** ⒶⒸ ☎(098) 861-2011 (代)  
〒900-0002 那覇市曙3-2-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**商業団地支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 876-2355 (代)  
〒900-0002 那覇市曙3-2-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**安謝市場出張所** Ⓒ ☎(098) 861-7116 (代)  
〒900-0002 那覇市曙3-2-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**那覇新都心支店** ⒷⒸⒹ ☎(098) 864-2233 (代)  
〒900-0004 那覇市銘苅2-2-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**真嘉比支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 886-1510 (代)  
〒902-0069 那覇市松島1-4-8  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**古島支店** ⒷⒸ ☎(098) 886-1217 (代)  
〒902-0069 那覇市松島1-4-8  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**首里支店** ⒷⒸ ☎(098) 886-1125 (代)  
〒903-0805 那覇市首里鳥嶋町1-20  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**石嶺支店** ⒷⒸⒹ ☎(098) 886-2211 (代)  
〒903-0804 那覇市首里石嶺町4-44  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**古波蔵支店** ⒷⒸ ☎(098) 854-1113 (代)  
〒902-0075 那覇市字国場272-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**国場支店** ⒷⒸ ☎(098) 854-0225 (代)  
〒902-0075 那覇市字国場272-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

## 南部 (7ヵ店)

**豊見城支店** ⒷⒸ ☎(098) 856-0220 (代)  
〒901-0243 豊見城市字上田552-1  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**糸満支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 994-4141 (代)  
〒901-0361 糸満市字糸満1492  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**西崎支店** ⒷⒸ ☎(098) 992-5858 (代)  
〒901-0305 糸満市西崎6-5-6  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**南風原支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 889-2821 (代)  
〒901-1111 南風原町字兼城206番  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**与那原支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 945-2213 (代)  
〒901-1303 与那原町字与那原3080  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**佐敷支店** ⒸⒹ ☎(098) 947-3825 (代)  
〒901-1303 与那原町字与那原3080  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**東風平支店** ⒷⒸ ☎(098) 998-6530 (代)  
〒901-0405 八重瀬町字伊覇227  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

## 浦添市 (6ヵ店)

**浦添支店** ⒶⒸ ☎(098) 879-1511 (代)  
〒901-2131 浦添市牧港1-11-30  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

**牧港支店** ⒶⒷⒸ ☎(098) 877-0114 (代)  
〒901-2131 浦添市牧港1-11-30  
 Ⓐ 平日 7:00～22:00 振込○  
 Ⓜ 休日 8:00～21:00 振込△

- 内間支店** ②③ ☎ (098) 879-2003 (代)  
〒901-2126 浦添市宮城5-2-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 城間支店** ②③ ☎ (098) 878-3121 (代)  
〒901-2133 浦添市城間2-5-2-101  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 安波茶支店** ②③ ☎ (098) 878-1031 (代)  
〒901-2114 浦添市安波茶2-18-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- パルコシティ出張所(愛称 りゅうぎんパルコシティ・パーソナルプラザ)** ② ☎ (098) 953-5700 (代)  
〒901-2123 浦添市西洲3-1-1  
平日 9:00~22:00 振込○  
休日 9:00~21:00 振込△

**宜野湾市 (4カ店)**

- 普天間支店** ②③④ ☎ (098) 892-1141 (代)  
〒901-2202 宜野湾市普天間1-9-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 宜野湾支店** ②③ ☎ (098) 893-2231 (代)  
〒901-2211 宜野湾市宜野湾1-5-3  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 真栄原支店** ②③ ☎ (098) 897-2872 (代)  
〒901-2215 宜野湾市真栄原2-3-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 大謝名支店** ②③ ☎ (098) 897-5101 (代)  
〒901-2225 宜野湾市大謝名215  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△

**沖縄市 (4カ店)**

- コザ支店** ②③④ ☎ (098) 938-8811 (代)  
〒904-0004 沖縄市中央1-1-10  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込○
- コザ十字路支店** ②③ ☎ (098) 939-1144 (代)  
〒904-2154 沖縄市東1-25-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 諸見支店** ②③ ☎ (098) 932-8181 (代)  
〒904-0032 沖縄市諸見里3-1-9  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 泡瀬支店** ②③ ☎ (098) 938-5560 (代)  
〒904-2171 沖縄市高原5-15-7  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△

**中・北部 (15カ店)**

- 西原支店** ②③ ☎ (098) 945-4006 (代)  
〒903-0102 西原町字嘉手刈76-2  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△

- 坂田支店** ②③ ☎ (098) 945-9445 (代)  
〒903-0117 西原町字翁長569  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 嘉手納支店** ②③ ☎ (098) 956-1122 (代)  
〒904-0203 嘉手納町字嘉手納463  
新町1号館東棟101  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 北谷支店** ②③④ ☎ (098) 936-3141 (代)  
〒904-0103 北谷町字桑江95-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 読谷支店** ②③ ☎ (098) 956-1181 (代)  
〒904-0303 読谷村字伊良皆267-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 北中城支店** ②③ ☎ (098) 935-3501 (代)  
〒901-2311 北中城村字喜舎場267-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 石川支店** ②③ ☎ (098) 965-1212 (代)  
〒904-1106 うるま市石川2-23-6  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 具志川支店** ②③④ ☎ (098) 973-4171 (代)  
〒904-2214 うるま市安慶名1-9-19  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 赤道支店** ②③ ☎ (098) 973-4944 (代)  
〒904-2245 うるま市字赤道2-15  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 屋慶名支店** ②③ ☎ (098) 978-3333 (代)  
〒904-2304 うるま市与那城屋慶名3517  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 本部支店** ②③ ☎ (098) 47-2600 (代)  
〒905-0212 本部町字大浜878-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 金武支店** ②③ ☎ (098) 968-2125 (代)  
〒904-1201 金武町字金武518  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 名護支店** ②③④ ☎ (098) 52-2816 (代)  
〒905-0017 名護市大中1-11-1  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込○
- 大宮支店** ②③ ☎ (098) 52-0031 (代)  
〒905-0015 名護市大南2-7-5  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 今帰仁支店** ②③ ☎ (098) 56-2301 (代)  
〒905-0401 今帰仁村字仲宗根264  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△

**県外・離島 (4カ店)**

- 久米島支店** ②③ ☎ (098) 985-2012 (代)  
〒901-3124 久米島町字仲泊1048  
平日 8:45~20:00 振込○  
休日 9:00~18:00 振込△
- 宮古支店** ②③④ ☎ (098) 72-2251 (代)  
〒906-0012 宮古島市平良字西里240-2  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 八重山支店** ②③④ ☎ (098) 82-6121 (代)  
〒907-0004 石垣市字登野城2-7  
平日 7:00~22:00 振込○  
休日 8:00~21:00 振込△
- 東京支店** ② ☎ (03) 5296-8611 (代)  
〒101-0046 東京都千代田区神田多町  
2-2-16 神田21ビル4階  
ATM 平日 9:00~15:00 振込△

**ローンセンター (7カ店)**

- 那覇ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-41-1924  
〒900-0015 那覇市久茂地1-9-17  
(りゅうぎん本店駐車場横)
- 真嘉比ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-41-0103  
〒902-0069 那覇市松島1-4-8  
(りゅうぎん真嘉比支店内)
- 牧港ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-19-6154  
〒901-2131 浦添市牧港1-11-30  
(りゅうぎん牧港支店内)
- 南部ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-09-7839  
〒901-1111 南風原町字兼城203-3
- 中部ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-41-1983  
〒904-2154 沖縄市東1-25-1  
(りゅうぎんコザ十字路支店内)
- 北部ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-41-1016  
〒905-0017 名護市中大1-11-1  
(りゅうぎん名護支店3階)

- 北谷ローンセンター+ (プラス)**  
**終活サポートプラザ** ☎ 0120-41-0780  
〒904-0103 北谷町桑江95-1

**りゅうぎんの主なフリーコール**

商品やサービスについては  
預金商品・ビジネスローン  
相談ダイヤル

☎ 0120-19-8689

個人ローンについては  
ダイレクトバンキングセンター

☎ 0120-38-8689

お客様相談ダイヤル

☎ 0120-44-1212

※2006年7月5日より、県外より沖縄へ移住を希望するお客様への利便性向上を図るため「りゅうぎん東京住宅ローンセンター」を東京支店内に設置しています。



## ■ 営業の概況

当連結会計年度の国内経済は、年度の前半は企業業績が堅調を維持し雇用情勢の着実な改善が続いたことから、消費にも底堅さがみられ緩やかな回復が続きました。年度の後半は、10月の消費税率引き上げ後に個人消費が弱含みとなり、また年度の終盤には新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、経済は大幅に下押しされ厳しい状況となりました。

県内経済においては、年度の前半は入域観光客数の増加を背景に観光が好調を維持し、高水準な民間・公共工事により建設も概ね順調に推移しました。さらに雇用情勢の改善により消費も概ね堅調に推移したことも伴い拡大を続けました。しかしながら、消費税率引き上げ後に消費が弱含み、年度の終盤には新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、特に入域観光客が激減し、宿泊施設の稼働が急低下するなど、観光が一転して弱くなったことから景気は後退しました。

こうした経済環境の中、当連結会計年度は次のような経営成績となりました。

経常収益は、株式等売却益や有価証券利息配当金が減少したものの、国債等債券売却益や貸出金利息収入の増加により前期を6億18百万円上回る627億35百万円となりました。

一方、経常費用は、金銭の信託運用損や債権売却損が減少したものの、国債等債券償還損や貸出金償却、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による貸倒引当金繰入額の増加により、前期を23億58百万円上回る558億15百万円となりました。

この結果、経常利益は前期を17億42百万円下回る69億19百万円となりました。親会社株主に帰属する当期純利益は前期を11億54百万円下回る49億51百万円となりました。

セグメントごとの業績は次のとおりであります。

### ① 銀行業

経常収益は前連結会計年度比4億36百万円増加の424億90百万円となり、セグメント利益は前連結会計年度比20億22百万円減少の53億74百万円となりました。

### ② リース業

経常収益は前連結会計年度比1億92百万円増加の170億59百万円となり、セグメント利益は前連結会計年度比53百万円増加の5億73百万円となりました。

### ③ その他

経常収益は前連結会計年度比39百万円増加の58億43百万円となり、セグメント利益は前連結会計年度比2億29百万円増加の13億72百万円となりました。

主要勘定としては、預金等（譲渡性預金を含む）は、個人及び法人預金が好調に推移し前連結会計年度末を587億7百万円上回る2兆2,443億75百万円となりました。貸出金は、住宅ローンやアパートローンを中心に好調に推移したことから、前連結会計年度末を246億72百万円上回る1兆7,235億32百万円となりました。有価証券は、債券の売却・償還等により前連結会計年度末を206億77百万円下回る2,584億36百万円となりました。

### ・ キャッシュ・フロー

現金及び現金同等物の期末残高は、前連結会計年度末比521億28百万円増加の3,057億54百万円となりました。

営業活動によるキャッシュ・フローは、預金の増加等により311億20百万円の収入（前連結会計年度は612億86百万円の支出）となりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、債券等を中心とした有価証券の売却・償還などにより229億52百万円の収入（前連結会計年度は1,203億71百万円の収入）となりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払いなどにより19億37百万円の支出（前連結会計年度は84億35百万円の支出）となりました。

## ■ 主要な経営指標等の推移

(単位：百万円)

	2015年度 自2015年4月1日 至2016年3月31日	2016年度 自2016年4月1日 至2017年3月31日	2017年度 自2017年4月1日 至2018年3月31日	2018年度 自2018年4月1日 至2019年3月31日	2019年度 自2019年4月1日 至2020年3月31日
連結経常収益	59,935	60,717	63,027	62,117	62,735
うち連結信託報酬	—	—	—	—	—
連結経常利益	10,039	9,711	12,395	8,661	6,919
親会社株主に帰属する当期純利益	10,331	6,494	8,785	6,105	4,951
連結包括利益	9,841	3,977	9,358	6,108	3,297
連結純資産額	108,284	110,988	117,937	128,115	129,960
連結総資産額	2,240,159	2,253,518	2,358,761	2,389,613	2,435,689
1株当たり純資産額	2,780.04円	2,842.33円	3,078.12円	2,982.60円	3,021.59円
1株当たり当期純利益	271.46円	170.51円	230.33円	149.13円	115.40円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	270.29円	169.67円	229.19円	148.39円	114.87円
自己資本比率	4.72%	4.80%	4.98%	5.34%	5.32%
連結自己資本比率（国内基準）	9.52%	9.22%	9.40%	9.07%	9.23%
連結自己資本利益率	10.15%	6.06%	7.77%	4.97%	3.84%
連結株価収益率	4.65倍	9.38倍	7.01倍	7.56倍	9.18倍
営業活動によるキャッシュ・フロー	△16,357	△49,329	△8,384	△61,286	31,120
投資活動によるキャッシュ・フロー	103,365	39,988	1,221	120,371	22,952
財務活動によるキャッシュ・フロー	△10,078	△1,939	△2,892	△8,435	△1,937
現金及び現金同等物の期末残高	224,324	213,040	202,959	253,626	305,754
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	1,442人 [491人]	1,443人 [500人]	1,475人 [470人]	1,616人 [400人]	1,562人 [354人]
信託財産額	—	—	—	—	—

- (注) 1. 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。  
 2. 自己資本比率は、(期末純資産の部合計－期末新株予約権－期末非支配株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。  
 3. 連結自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく2006年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。  
 4. 信託財産額は、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務に係るものを記載しております。なお、該当する信託業務を営む会社は提出会社1社です。

# 資料編 (連結情報)

当行は、連結貸借対照表および連結損益計算書について、会社法第396条第1項によるEY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。  
当行は、連結財務諸表（連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書）について、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。

## ■ 連結貸借対照表

	2018年度 (2019年3月31日)	2019年度 (2020年3月31日)
	金額	金額
現金預け金	254,210	305,962
コールローン及び買入手形	707	—
買入金銭債権	74	34
金銭の信託	15,148	4,103
有価証券	279,114	258,436
貸出金	1,698,859	1,723,532
外国為替	8,992	7,955
リース債権及びリース投資資産	22,183	24,914
その他資産	78,328	76,425
有形固定資産	23,985	22,766
建物	6,005	5,738
土地	13,188	13,426
リース資産	15	10
建設仮勘定	20	175
その他の有形固定資産	4,756	3,414
無形固定資産	4,266	4,930
ソフトウェア	2,520	3,832
リース資産	6	3
その他の無形固定資産	1,739	1,094
退職給付に係る資産	479	412
繰延税金資産	4,181	5,307
支払承諾見返	7,788	10,156
貸倒引当金	△8,708	△9,248
資産の部合計	2,389,613	2,435,689

	2018年度 (2019年3月31日)	2019年度 (2020年3月31日)
	金額	金額
<b>(負債の部)</b>		
預り金	2,154,239	2,213,744
譲渡性預金	31,428	30,631
債券貸借取引受入担保金	21,734	4,001
借入金	19,120	20,123
外国為替	108	225
その他負債	22,557	22,308
賞与引当金	696	674
退職給付に係る負債	810	1,123
役員退職慰労引当金	25	35
睡眠預金払戻損失引当金	109	70
偶発損失引当金	95	99
ポイント引当金	158	183
利息返還損失引当金	438	366
再評価に係る繰延税金負債	2,188	1,985
支払承諾	7,788	10,156
負債の部合計	2,261,498	2,305,729
<b>(純資産の部)</b>		
資本金	56,967	56,967
資本剰余金	14,275	14,264
利益剰余金	54,701	58,625
自己株式	△347	△250
株主資本合計	125,596	129,606
その他有価証券評価差額金	1,639	163
繰延ヘッジ損益	△0	1
土地再評価差額金	1,312	838
退職給付に係る調整累計額	△719	△899
その他の包括利益累計額合計	2,232	103
新株予約権	286	250
純資産の部合計	128,115	129,960
負債及び純資産の部合計	2,389,613	2,435,689

## ■ 連結損益計算書

(単位：百万円)

	2018年度 自 2018年4月1日 至 2019年3月31日	2019年度 自 2019年4月1日 至 2020年3月31日
	金額	金額
経常収益	62,117	62,735
資金運用収益	29,469	29,393
貸出金利息	26,373	26,785
有価証券利息配当金	2,408	1,718
コールローン利息及び買入手形利息	10	△3
預け金利息	85	84
その他の受入利息	590	808
役員取引等収益	9,454	9,929
その他業務収益	19,421	21,455
その他経常収益	3,772	1,955
償却債権取立益	837	414
その他の経常収益	2,935	1,541
経常費用	53,456	55,815
資金調達費用	1,535	1,326
預金利息	1,186	1,265
譲渡性預金利息	8	9
コールマネー利息及び売渡手形利息	△28	△18
債券貸借取引支払利息	240	0
借入金利息	67	65
社債利息	53	—
その他の支払利息	8	3
役員取引等費用	4,518	4,885
その他業務費用	16,863	18,414
営業経費	27,096	27,439
その他経常費用	3,441	3,748
貸倒引当金繰入額	333	718
その他の経常費用	3,108	3,029
経常利益	8,661	6,919
特別利益	3	9
固定資産処分益	3	9
特別損失	123	102
固定資産処分損	91	96
減損損失	32	6
税金等調整前当期純利益	8,541	6,826
法人税、住民税及び事業税	2,493	2,527
法人税等調整額	△57	△652
法人税等合計	2,436	1,874
当期純利益	6,105	4,951
親会社株主に帰属する当期純利益	6,105	4,951

## ■ 連結包括利益計算書

(単位：百万円)

	2018年度 自 2018年4月1日 至 2019年3月31日	2019年度 自 2019年4月1日 至 2020年3月31日
	金額	金額
当期純利益	6,105	4,951
その他の包括利益	3	△1,654
その他有価証券評価差額金	142	△1,476
繰延ヘッジ損益	△0	2
退職給付に係る調整額	△138	△180
包括利益	6,108	3,297
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	6,108	3,297



## ■ 連結株主資本等変動計算書

2018年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	54,127	11,437	50,271	△375	115,460
当期変動額					
新株の発行	2,840	2,840			5,680
剰余金の配当			△1,686		△1,686
親会社株主に帰属する 当期純利益			6,105		6,105
土地再評価差額金の 取崩			10		10
自己株式の取得				△2	△2
自己株式の処分		△2		30	28
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)					—
当期変動額合計	2,840	2,838	4,429	28	10,135
当期末残高	56,967	14,275	54,701	△347	125,596

	その他の包括利益累計額					新株予約権	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付に 係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	1,497	△0	1,323	△580	2,239	236	117,937
当期変動額							
新株の発行							5,680
剰余金の配当							△1,686
親会社株主に帰属する 当期純利益							6,105
土地再評価差額金の 取崩							10
自己株式の取得							△2
自己株式の処分							28
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)	142	△0	△10	△138	△7	49	42
当期変動額合計	142	△0	△10	△138	△7	49	10,177
当期末残高	1,639	△0	1,312	△719	2,232	286	128,115

2019年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位: 百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	56,967	14,275	54,701	△347	125,596
当期変動額					
剰余金の配当			△1,501		△1,501
親会社株主に帰属する 当期純利益			4,951		4,951
土地再評価差額金の 取崩			473		473
自己株式の取得				△1	△1
自己株式の処分		△11		98	87
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)					—
当期変動額合計	—	△11	3,924	96	4,010
当期末残高	56,967	14,264	58,625	△250	129,606

	その他の包括利益累計額					新株予約権	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付に 係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	1,639	△0	1,312	△719	2,232	286	128,115
当期変動額							
剰余金の配当							△1,501
親会社株主に帰属する 当期純利益							4,951
土地再評価差額金の 取崩							473
自己株式の取得							△1
自己株式の処分							87
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)	△1,476	2	△473	△180	△2,128	△35	△2,164
当期変動額合計	△1,476	2	△473	△180	△2,128	△35	1,845
当期末残高	163	1	838	△899	103	250	129,960

## 連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円)

	2018年度 自2018年4月1日 至2019年3月31日	2019年度 自2019年4月1日 至2020年3月31日
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	8,541	6,826
減価償却費	2,786	2,967
減損損失	32	6
貸倒引当金の増減(△)	39	540
賞与引当金の増減額(△は減少)	0	△21
退職給付に係る資産の増減額(△は増加)	151	230
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	△154	△108
役員退職慰労引当金の増減額(△は減少)	6	9
睡眠預金払戻損失引当金の増減(△)	△65	△39
偶発損失引当金の増減(△)	△23	4
ポイント引当金の増減額(△は減少)	10	25
利息返還損失引当金の増減額(△は減少)	△58	△71
資金運用収益	△29,469	△29,393
資金調達費用	1,535	1,326
有価証券関係損益(△)	1	920
金銭の信託の運用損益(△は運用益)	313	93
為替差損益(△は益)	△1,558	△1,079
固定資産処分損益(△は益)	20	25
貸出金の純増(△)減	△98,866	△24,672
預金の純増減(△)	70,470	59,504
譲渡性預金の純増減(△)	7,385	△797
借入金(劣後特約借入金を除く)の純増減(△)	△22,996	1,003
預け金(日銀預け金を除く)の純増(△)減	△346	376
コールローン等の純増(△)減	151	747
債券貸借取引受入担保金の純増減(△)	△22,059	△17,733
外国為替(資産)の純増(△)減	413	1,037
外国為替(負債)の純増減(△)	△19	117
リース債権及びリース投資資産の純増(△)減	△843	△2,731
中央清算機関差入証拠金の純増(△)減	△2,700	—
資金運用による収入	30,590	31,827
資金調達による支出	△1,692	△1,398
その他	564	3,734
小計	△57,838	33,278
法人税等の支払額	△3,447	△2,157
営業活動によるキャッシュ・フロー	△61,286	31,120
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△184,870	△377,557
有価証券の売却による収入	162,604	315,074
有価証券の償還による収入	151,205	76,921
金銭の信託の増加による支出	△5,000	△16,800
金銭の信託の減少による収入	—	27,750
有形固定資産の取得による支出	△2,056	△1,902
無形固定資産の取得による支出	△1,984	△1,990
有形固定資産の売却による収入	527	1,535
有形固定資産の除却による支出	△54	△76
投資活動によるキャッシュ・フロー	120,371	22,952
財務活動によるキャッシュ・フロー		
劣後特約付社債の償還による支出	△12,000	—
株式の発行による収入	5,646	—
配当金の支払額	△1,689	△1,498
リース債務の返済による支出	△417	△438
自己株式の取得による支出	△2	△1
自己株式の処分による収入	28	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	△8,435	△1,937
現金及び現金同等物に係る換算差額	17	△7
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	50,667	52,128
現金及び現金同等物の期首残高	202,959	253,626
現金及び現金同等物の期末残高	253,626	305,754

## 注記事項 (2019年度)

●連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

## 1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 6社  
主要な連結子会社名は、「子会社等の状況」に記載しているため省略しました。

## (2) 非連結子会社 2社

会社名 りゅうぎん6次産業化ファンド投資事業有限責任組合  
B O Rベンチャーファンド1号投資事業有限責任組合  
非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

## 2. 持分法の適用に関する事項

## (1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

## (2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

## (3) 持分法非適用の非連結子会社 2社

会社名 りゅうぎん6次産業化ファンド投資事業有限責任組合  
B O Rベンチャーファンド1号投資事業有限責任組合  
持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除外しております。

## (4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

## 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

(1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。

3月末日 6社

(2) 連結される子会社は、それぞれの決算日の財務諸表により連結しております。

## 4. 会計方針に関する事項

## (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

## (2) 有価証券の評価基準及び評価方法

①有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、持分法非適用の非連結子会社出資金については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。  
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

②有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

## (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

## (4) 固定資産の減価償却の方法

①有形固定資産(リース資産を除く)  
当行の有形固定資産は、定額法を採用しております。また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物:5~50年

その他:3~20年

連結子会社の一部の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、定率法により償却しております。

②無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

## ③リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

## (5) 繰延資産の処理方法

社債発行費は資産として計上し、社債の償還期間にわたり定額法により償却しております。

株式交付費は、支出時に全額費用として処理しております。

## (6) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下、「破綻懸念先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。

上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。なお、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先の一部に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は2,725百万円であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

## (7) 賞与引当金の計上基準

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。



- (8) 役員退職慰労引当金の計上基準  
役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見積額のうち、当連結会計年度末までに発生していると思われる額を計上しております。
- (9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準  
睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金の預金者からの将来の払戻請求に備えるため、過去の支払実績に基づき、必要と認められた額を計上しております。
- (10) 偶発損失引当金の計上基準  
偶発損失引当金は、責任共有制度による信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見積額を計上しております。
- (11) ポイント引当金の計上基準  
ポイント引当金は、クレジットカード業務に係る交換可能ポイントの将来の利用による負担に備えるため、将来利用される見込額を合理的に見積り、必要と認められた額を計上しております。
- (12) 利息返還損失引当金の計上基準  
利息返還損失引当金は、利息制限法の上限金利を超過する貸付金利息の返還請求に備えるため、過去の返還実績等を勘案し、必要と認められた額を計上しております。
- (13) 退職給付に係る会計処理の方法  
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。  
過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(12年)による定額法により損益処理  
数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(12年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生した連結会計年度から損益処理  
連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。
- (14) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準  
当行の外貨建資産及び負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。
- (15) 収益及び費用の計上基準  
リース業を営む連結子会社のファイナンス・リース取引に係る収益及び費用の計上については、リース料を受受すべき時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。  
一部の連結子会社の、包括信用購入幹旋業務及び個別信用購入幹旋業務の収益の計上については、期日到来基準とし、主に7・8分法によっております。
- (16) 重要なヘッジ会計の方法  
①金利リスク・ヘッジ  
当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日。以下、「業種別監査委員会報告第24号」という。)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の(残存)期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。  
連結子会社のヘッジ会計の方法は、一部の負債について、金利スワップの特例処理を行っております。  
②為替変動リスク・ヘッジ  
当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日。)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。  
連結子会社は、ヘッジ会計を行っておりません。
- (17) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲  
連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち、現金、日本銀行への預け金、要求払預金及び預入期間が3ヵ月以下の定期預金であります。
- (18) 消費税等の会計処理  
当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

## ●未適用の会計基準等

1. 収益認識に関する会計基準等  
・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)  
・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2020年3月31日)
- (1) 概要  
収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。  
ステップ1：顧客との契約を識別する。  
ステップ2：契約における履行義務を識別する。  
ステップ3：取引価格を算定する。  
ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。  
ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。
- (2) 適用予定日  
当行並びに連結される子会社は、当該会計基準等を2021年4月1日に開始する連結会計年度の期首から適用する予定であります。
- (3) 当該会計基準等の適用による影響  
当該会計基準等の適用による影響は、評価中であります。
2. 時価の算定に関する会計基準等  
・「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日)  
・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2019年7月4日)  
・「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)  
・「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日)
- (1) 概要  
国際的な会計基準の定めとの比較可能性を向上させるため、「時価の算定に関する会計基準」及び「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(以下「時価算定会計基準等」という。)が開発され、時価の算定方法に関するガイダンス等が定められました。時価算定会計基準等は次の項目の時価に適用されます。  
・「金融商品に関する会計基準」における金融商品  
また「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」が改訂され、金融商品の時価のレベルごとの内訳等の注記事項が定められました。

- (2) 適用予定日  
当行並びに連結される子会社は、当該会計基準等を2021年4月1日に開始する連結会計年度の期首から適用する予定であります。
- (3) 当該会計基準等の適用による影響  
当該会計基準等の適用による影響は、評価中であります。

## ●追加情報

新型コロナウイルス感染症拡大の影響に関する一定の仮定  
当行及び一部の連結子会社は新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、2020年度上期にピークに達し2020年度末にかけて収束していくものと想定しておりますが、当行及び一部の連結子会社の貸倒引当金は、新型コロナウイルスの影響による支援目的の返済条件変更等を実施した取引先について、今後の事業活動に一定の不確実性があると仮定して債務者区分の見直し等を行った上で計上しております。  
なお、貸倒引当金計上額は現時点の最善の見積りであるものの、見積りに用いた仮定には不確実性があり、新型コロナウイルス感染症の感染状況やその経済環境への影響が変化した場合、翌年度の連結財務諸表に与える影響額が増減する可能性があります。

## ●連結貸借対照表関係

1. 非連結子会社及び関連会社の出資金の総額  
出資金 147百万円
2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。  
破綻先債権額 398百万円  
延滞債権額 23,399百万円  
なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。  
また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。  
貸出金のうち3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。  
3ヵ月以上延滞債権額 840百万円  
なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3ヵ月以上延滞している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。
4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。  
貸出条件緩和債権額 18,140百万円  
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。
5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。  
合計額 42,778百万円  
なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。  
6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。  
4,895百万円
7. 担保に供している資産は次のとおりであります。  
担保に供している資産
- |                |           |
|----------------|-----------|
| 有価証券           | 19,466百万円 |
| リース債権及びリース投資資産 | 15,233百万円 |
| その他資産          | 8,503百万円  |
| 貸出金            | 79百万円     |
| 預け金            | 15百万円     |
| 計              | 43,298百万円 |
- 担保資産に対応する債務
- |             |           |
|-------------|-----------|
| 借入金         | 20,087百万円 |
| 預金          | 16,530百万円 |
| 債券貸借取引受入担保金 | 4,001百万円  |
- 上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。  
有価証券 3,685百万円  
その他資産 27百万円  
預け金 15百万円  
非連結子会社、関連会社の借入金等の担保として差し入れているものはありません。
- また、その他資産には、中央清算機関差入証拠金、先物取引差入証拠金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。  
中央清算機関差入証拠金 32,000百万円  
先物取引差入証拠金 1,248百万円  
保証金 928百万円
8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は、次のとおりであります。  
融資未実行残高 321,386百万円  
うち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なもの 317,526百万円  
なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができ旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産、有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 土地の再評価に関する法律（1998年3月31日公布法律第34号）に基づき、当社の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。
- 再評価を行った年月日 1998年3月31日  
同法律第3条第3項に定める再評価の方法  
土地の再評価に関する法律施行令（1998年3月31日公布政令第119号）第2条第4号に定める地価税法に基づいて、奥行価格補正、時点修正等、合理的な調整を行って算出。  
同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額
10. 有形固定資産の減価償却累計額 3,181百万円  
11. 有形固定資産の圧縮記帳額 21,187百万円  
圧縮記帳額 253百万円  
（当連結会計年度の圧縮記帳額）（一百万円）
12. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額 2,933百万円

## ●連結損益計算書関係

1. その他の経常収益には、次のものを含んでおります。
- 株式等売却益 114百万円
2. 営業経費には、次のものを含んでおります。
- 給与・手当 9,504百万円
3. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。
- 株式等売却損 1,195百万円  
貸出金償却 904百万円  
株式等償却 260百万円  
債権売却損 4百万円

## ●連結包括利益計算書関係

1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額
- その他有価証券評価差額金
- |              |           |
|--------------|-----------|
| 当期発生額        | △3,149百万円 |
| 組替調整額        | 1,073 "   |
| 税効果調整前       | △2,076 "  |
| 税効果額         | 599 "     |
| その他有価証券評価差額金 | △1,476 "  |
- 繰延ヘッジ損益
- |         |      |
|---------|------|
| 当期発生額   | 5 "  |
| 組替調整額   | △2 " |
| 税効果調整前  | 3 "  |
| 税効果額    | △0 " |
| 繰延ヘッジ損益 | 2 "  |
- 退職給付に係る調整額
- |            |          |
|------------|----------|
| 当期発生額      | △489 "   |
| 組替調整額      | 232 "    |
| 税効果調整前     | △257 "   |
| 税効果額       | 77 "     |
| 退職給付に係る調整額 | △180 "   |
| その他の包括利益合計 | △1,654 " |

## ●連結株主資本等変動計算書関係

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項  
（単位：千株）

	当連結会計	当連結会計	当連結会計	当連結会計	摘要
	年度期首株式数	年度増加株式数	年度減少株式数	年度末株式数	
発行済株式					
普通株式	43,108	—	—	43,108	
自己株式					
普通株式	250	1	70	180	(注)

(注) 単元未満株式の買取による増加並びに譲渡制限付株式の割当て46千株及び新株予約権の権利行使24千株による減少であります。

## 2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる当連結会計年度期首株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)		当連結会計年度末残高(百万円)	摘要
			当連結会計年度増加	当連結会計年度減少		
当行	ストック・オプションとしての新株予約権		—	—	250	
合計			—	—	250	

## 3. 配当に関する事項

## (1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月27日 定時株主総会	普通株式	750	17.50	2019年3月31日	2019年6月28日
2019年11月8日 取締役会	普通株式	751	17.50	2019年9月30日	2019年12月6日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
2020年6月24日 定時株主総会	普通株式	751	利益剰余金	17.50	2020年3月31日	2020年6月25日

## ●連結キャッシュ・フロー計算書関係

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

現金預け金勘定	305,962百万円
金融有利息預け金	△35百万円
金融無利息預け金	△68百万円
外貨預け金	△104百万円
現金及び現金同等物	305,754百万円

## ●リース取引関係

(借手側)

1. ファイナンス・リース取引
- (1) 所有権移転外ファイナンス・リース取引  
重要性が乏しいため、注記を省略しております。
- (2) 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引  
該当ありません。
2. オペレーティング・リース取引  
該当事項はありません。

(貸手側)

1. ファイナンス・リース取引
- (1) リース投資資産の内訳
- |          |           |
|----------|-----------|
| リース料債権部分 | 27,165百万円 |
| 見積残存価額部分 | 24百万円     |
| 受取利息相当額  | △2,645百万円 |
| 合計       | 24,544百万円 |
- (2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の連結決算日後の回収予定額

(単位：百万円)

	リース債権	リース投資資産
1年以内	115	9,452
1年超2年以内	84	7,153
2年超3年以内	61	4,773
3年超4年以内	42	3,269
4年超5年以内	25	1,667
5年超	75	849
合計	405	27,165

(注) 上記(1)及び(2)は転リース取引に係る金額を含めて記載しております。

## 2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

1年内	747百万円
1年超	872百万円
合計	1,620百万円

## 3. 転リース取引

転リース取引に該当し、かつ、利息相当額控除前の金額で連結貸借対照表に計上している額

- (1) リース債権及びリース投資資産
- |                |          |
|----------------|----------|
| リース債権及びリース投資資産 | 1,701百万円 |
|----------------|----------|
- (2) リース債務
- |       |          |
|-------|----------|
| リース債務 | 1,816百万円 |
| その他負債 |          |

## ●金融商品関係

## 1. 金融商品の状況に関する事項

## (1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、当行及び子会社6社で構成され、銀行業務を中心に、信用保証業務、クレジットカード業務、リース業務、個別信用購入斡旋業などの金融サービス事業を行っております。これらの事業を行うため、市場の状況や長短のバランスを調整して、預金等による資金調達及び貸出金や有価証券等による資金運用を行っております。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、当行では、資産及び負債の総合的管理 (ALM) をしております。その一環として、デリバティブ取引も行っておりますが、デリバティブ取引は「市場リスクに対するヘッジ」、「お客様のニーズに対応した新商品の提供」のための手段として位置付けており、短期的な売買による収益手段としての「トレーディング」については取り組んでおりません。

## (2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。当連結会計年度末現在における貸出金のうち、不動産業、医療・福祉業、建設業、小売業に対する貸出金の構成比が比較的高く、これらの業種を巡る経済環境等の状況の変化により、契約条件に従った債務履行がなされない可能性がおります。また、商品有価証券及び有価証券は、主に債券、株式、投資信託及び組合出資金であり、売買目的、満期保有目的及びその他有価証券として保有しているほか、一部の子会社ではその他有価証券として保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。

デリバティブ取引には主に、金利関連では金利スワップ取引、通貨関連では先物が替予約取引、有価証券関連では債券先物取引、債券先物オプション取引等があります。当行では、金利リスク及び為替変動リスクを回避する目的で、「金融商品会計に関する実務指針」等に準拠する内規により、デリバティブ取引を行っております。金利リスクに対するヘッジ会計を適用した場合の会計方法は、繰延ヘッジ会計を適用しております。ヘッジ対象は、貸出金、債券等、ヘッジ手段は金利スワップ等です。ヘッジ有効性の評価は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号）に則り行っております。為替変動リスクに対するヘッジ会計を適用した場合の会計方法は、繰延ヘッジ会計を適用しております。ヘッジ対象は外貨建金銭債権債務、ヘッジ手段は通貨スワップ及び為替スワップです。ヘッジ有効性の評価は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号）に則り行っております。また、一部の子会社では、一部の負債について金利スワップの特例処理を行っております。



### (3) 金融商品に係るリスク管理体制

#### ①信用リスクの管理

当行グループの信用リスク管理体制は、営業部門から独立し与信判断や銀行全体の信用リスクの管理を行う審査部、市場部門の信用リスクテイクや信用リスク管理を行う証券国際部、与信監査部門として資産の自己査定を監査するリスク統括部の相互牽制体制から構成されています。信用リスクのうち信用集中リスクについては、取締役会の定めた「融資運用方針」や「信用リスク管理方針」により特定の業種、企業、グループへの与信の集中を排除しており、融資運用方針の遵守状況を定期的に取締役会が確認しております。貸出金等の与信から生ずる信用リスクの全体的な把握については、信用格付毎の倒産確率や債権毎の保全状況に応じた信用リスクを定量化することで、格付毎、業種毎、地域毎の信用リスクの分布状況を把握・分析することで信用リスクを管理しております。市場取引にかかる信用リスク管理は、主に公正な第三者機関である外部格付機関の評価を用い、格付ランクに応じた取引限度額を設定、遵守することでリスク管理を徹底しております。

#### ②市場リスクの管理

##### ア 金利リスクの管理

当行グループは、スプレッド収益管理手法等を用いたALMにより金利リスクを管理しております。市場リスクに関する規程により、リスク管理方法や手続き等の詳細を明記しており、ALM委員会において市場動向の把握・分析、資産の運用及び管理状況の把握・確認、今後の対応策等の協議を行っております。日常的には金融資産及び負債についてリスク統括部はリスクリミットやアラーム・ポイントの遵守状況を総合的に把握し、キャッシュ分析や金利感応度分析等によりモニタリングを行い、月次ベースでALM委員会に報告しております。

##### イ 為替リスクの管理

当行グループの為替リスクについては、主に為替スワップ取引及び債券レポ取引等を利用し、持高限度額を定めて常にポジションをスクエアにし、為替相場の変動リスクを最小化することとしております。一部円投(外貨買)による外債運用も行っておりますが、運用方針にて取引限度額を定めるほかリスクの定量的分析等によりモニタリングを行い、過度なリスクテイクを抑制しております。

##### ウ 価格変動リスクの管理

当行の有価証券を含む投資商品の保有については、市場運用部門である証券国際部の運用方針に基づき、市場リスク統括部門であるリスク統括部の管理の下、市場取引運用基準に従って行われております。証券国際部では、事前調査や投資限度額の設定、継続的なモニタリングを通じて、価格変動リスクの軽減を図っております。また、当行および一部の子会社で保有している株式等の多くは、発行会社との取引関係の維持・深耕や東証成長発展への寄与、社会的責任・公共的使命を果たすことを目的として保有しているものであり、取締役会において保有の適否等について検証しているほか、市場環境や取引先の財務状況などをモニタリングしております。これらの情報や管理状況は、ALM委員会等において定期的に報告されております。

##### エ デリバティブ取引

当行グループのデリバティブ取引のリスク管理体制につきましては、市場運用部門から独立した市場リスク統括部門として、リスク統括部を設置しております。市場運用部門につきましては、取引の約定を行う市場取引部門(フロントオフィス)と、運用基準・方針等の遵守状況を把握管理し、ポジション・評価損益・運用状況を定期的にリスク統括部門、担当役員へ報告する市場リスク管理部門(ミドルオフィス)、取引の確認事務、対外決済等勘定処理を行う後方事務部門(バックオフィス)間による相互牽制体制を敷いております。また、デリバティブ取引の開始に際しましては、リスク統括部と協議の上、ヘッジ方針を明確に定めて取引を開始しております。

##### オ 市場リスクに係る定量的情報

###### (ア) トレーディング目的の金融商品

トレーディング目的の金融商品は保有しない方針としております。

###### (イ) トレーディング目的以外の金融商品

当行グループにおいて、主要なリスク変数である金利リスクの影響を受ける主たる金融商品は、「有価証券」、「貸出金」、「預金」、「借入金」、「デリバティブ取引」のうちの金利スワップ取引であります。当行では、これらの金融資産及び金融負債について、期末後1年程度で予想される合理的な金利変動幅を用いた、当年度1年間の損益に与える影響額を、金利変動リスクの管理にあたっての定量的分析に利用しています。当該影響額の算定にあたっては、対象の金融資産及び金融負債を固定金利群と変動金利群に分けて、それぞれ金利期日に応じて適切な期間に残高を分解し、期間毎の金利変動幅を用いています。

2020年3月31日現在、当行のトレーディング目的以外の金利リスク量(VaR)は、全体で6,858百万円であり(観測期間5年、信頼区間99%、保有期間:預貸金等250日、債券90日)。当該リスク量は、金利とその他のリスク変数との相関を考慮していません。また、合理的な予想変動幅を超える金利の変動が生じた場合には、算定額を超える影響が生じる可能性があります。

また、価格変動リスクの影響を受ける「有価証券」のうち時価のある株式等については、過去のマーケット指標や市場価格の変動実績から、期末後1年程度で予想される合理的な価格変動幅を用いた、当年度1年間の損益に与える影響額を、価格変動リスクの算定にあたっての定量的分析に利用しています。当該影響額の算定にあたっては、個別の価格変動幅を用いて見積ることを原則としています。

2020年3月31日現在、当行のトレーディング目的以外の価格変動リスク量(VaR)は、全体で1,608百万円であり(観測期間1年、信頼区間99%、保有期間:時価のある株式・投資信託90日、政策投資及び時価のない株式・投資信託250日)。当該リスク量は、金利などのリスク変数との相関を考慮していません。また、合理的な予想変動幅を超えるマーケット指標や市場価格の変動が生じた場合には、算定額を超える影響が生じる可能性があります。

###### (ウ) リスク変数の変動を合理的な範囲で想定した場合の開示情報(価格変動リスク)

当行において、価格変動リスクの影響を受ける主たる金融商品は「有価証券」のその他有価証券に分類される時価のない株式等があります。

その他すべてのリスク変数が一定の場合、2020年3月31日現在のTOPIXのボラティリティ121ベシス・ポイント(1.21%、観測期間1年)から、当該金融資産についての価格変動リスク量(VaR)は2,468百万円となり(保有期間1年、信頼区間99%)。

(為替リスク)  
当行において、為替リスクについては主に為替スワップ取引及び債券レポ取引等を利用し、持高限度額を定めて常にポジションをスクエアにし、為替相場の変動リスクを最小化することとしております。一部円投(外貨買)による外債運用も行っておりますが、運用方針にて取引限度額を定めるほかリスクの定量的分析等によりモニタリングを行い、過度なリスクテイクを抑制しております。

2020年3月31日現在、当行の外貨調達に係る為替リスク量(VaR)は発生していません(観測期間1年、信頼区間99%、保有期間90日)。当該リスク量の計測にあたっては、金利などのリスク変数との相関を考慮していません。また、合理的な予想変動幅を超える為替変動が生じた場合には、算定額を超える影響が生じる可能性があります。

#### ③資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、資金調達・運用構造に即した適切かつ安定的な資金繰りに加え、安全性・収益性のバランスを考慮した効率的な資金調達・運用を基本方針としており、日々の資金繰りを担う証券国際部(資金繰り管理部)と資金繰り管理部の手法並びに手続などの適切性を検証する総合企画部(流動性リスク管理部)を明確に区分し、相互に牽制する体制としております。

管理手法としては、支払準備額や預貸率等について、それぞれリスクリミットを設定し、モニタリングを実施することで、流動性リスクの状況を管理しております。また、不測の事態に備えて、資金繰りの状況を逼迫度に応じて4段階に区分し、それぞれの局面において権限者、対応策などを定め、速やかに対処できる体制を整えております。

#### (4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

#### 2. 金融商品の時価等に関する事項

企業集団の事業の運営において重要なものについて開示しております。連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません(注2)参照)。

(単位:百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	305,962	305,962	—
(2) コールローン及び買入手形	—	—	—
(3) 金銭の信託	3,603	3,603	—
(4) 有価証券			
満期保有目的の債券	30,263	31,027	763
その他有価証券	225,548	225,548	—
(5) 貸出金	1,723,532		
貸倒引当金(*1)	△6,393		
貸倒引当金控除後	1,717,139	1,729,332	12,192
資産計	2,282,518	2,295,474	12,956
(1) 預金	2,213,744	2,213,932	△188
(2) 譲渡性預金	30,631	30,631	—
(3) 債券貸借取引受入担保金	4,001	4,001	—
(4) 借入金	20,123	20,115	7
負債計	2,268,499	2,268,680	△180
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(63)	(63)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(105)	(105)	—
デリバティブ取引計	△169	△169	—

(\*1) 貸出金に対する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。  
(\*2) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、( )で表示しております。

#### (注1) 金融商品の時価の算定方法

- 現金預け金  
満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、重要性が乏しいこと及びそのすべてが、残存期間1年以内の短期であることから、当該帳簿価額を時価としております。
- コールローン及び買入手形  
約定期間が短期(1年以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- 金銭の信託  
有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券については、株式は取引所の価格、債券は日本証券業協会の価格又は取引金融機関が算定する価格等によっております。デリバティブ取引については、情報ベンダーが提供する価格等を時価としております。投資信託は、証券投資信託委託会社が提供する価額によっております。  
なお、保有目的ごとの金銭の信託に関する注記事項については、「金銭の信託関係」に記載しております。
- 有価証券  
株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格又は取引金融機関から提示された基準価格によっております。  
自行保証付私債券は、将来のキャッシュ・フローを割引いて現在価値を算定しております。  
なお、保有目的毎の有価証券に関する注記事項については「有価証券関係」に記載しております。
- 貸出金  
貸出金については、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分毎に、元金合計額をTIBOR等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率で割引いて時価を算定しております。  
また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。  
貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。



## 負債

- (1) 預金、及び(2) 譲渡性預金  
要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間毎に区分して、将来のキャッシュ・フローを割引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。
- なお、譲渡性預金について預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- (3) 債券貸借取引受入担保金  
約定期間が短期間(1年以内)であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。
- (4) 借入金  
固定金利によるものは、一定の期間毎に区分した当該借入金の元利金の合計額を同様の借入において想定される利率で割引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のもの並びに重要性が乏しいものについては、時価は帳簿価額と近似していると想定されるため、当該帳簿価額を時価としております。

## デリバティブ取引

デリバティブ取引は、金利関連取引(金利先物、金利オプション、金利スワップ等)、通貨関連取引(通貨先物、通貨オプション、通貨スワップ等)、債券関連取引(債券先物、債券先物オプション等)であり、取引所の価格、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算出した価額によっております。

- (注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(4) その他有価証券」には含まれておりません。

区分	2020年3月31日
有価証券	
①不動産投資信託(*1)	—
②非上場株式(*1)(*2)	2,012
③組合出資金(*3)	611
金銭の信託(*4)	500
合計	3,124

- (注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

区分	2020年3月31日					
	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金(*1)	266,465	—	—	—	—	—
買入金銭債権	—	31	2	—	—	—
金銭の信託	3,603	—	—	—	—	—
有価証券						
満期保有目的の債券	—	20,624	2,440	245	—	6,953
うち国債	—	20,076	—	—	—	6,953
社債	—	548	2,440	245	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの	38,186	47,593	15,429	29,614	92,235	1,182
うち国債	25,180	20,217	—	—	—	1,182
地方債	—	6,702	12,931	27,616	72,639	—
社債	2,002	1,704	297	—	499	—
その他	11,003	18,969	2,200	1,997	19,096	—
貸出金(*2)	267,787	207,894	179,064	136,794	159,143	622,079
合計	576,043	276,144	196,936	166,654	251,379	630,215

- (注4) 借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

区分	2020年3月31日					
	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	2,099,340	106,147	8,256	—	—	—
譲渡性預金	30,631	—	—	—	—	—
債券貸借取引受入担保金	4,001	—	—	—	—	—
借入金	7,436	9,766	2,911	4	2	2
合計	2,141,408	115,914	11,167	4	2	2

- (\*) 預金のうち、要求払預金1,462,217百万円については、「1年以内」に含めて開示しております。

## ●有価証券関係

※連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」及び「買入金銭債権」中の貸付債権信託受益権を含めて記載しております。

1. 売買目的有価証券  
該当ありません。
2. 満期保有目的の債券

(単位:百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	時価	差額
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債	27,030	27,774	744
	社債	3,035	3,055	19
	小計	30,065	30,829	764
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	社債	198	197	△0
	合計	30,263	31,027	763

## 3. その他有価証券

(単位:百万円)

	種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	585	214	371
	債券	53,375	52,979	396
	国債	46,907	46,580	326
	地方債	4,992	4,935	56
	社債	1,476	1,463	12
	その他	23,194	22,745	448
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	小計	77,155	75,939	1,216
	株式	627	651	△23
	債券	117,594	117,994	△400
	地方債	114,555	114,954	△398
	社債	3,038	3,040	△1
合計	その他	30,205	30,752	△546
	小計	148,427	149,398	△971
	合計	225,583	225,338	245

4. 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券  
該当ありません。
5. 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

(単位:百万円)

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株式	161	21	5
債券	223,785	433	1,143
国債	187,514	28	1,143
地方債	4,918	157	—
社債	31,352	247	0
その他	91,126	3,047	1,410
合計	315,074	3,503	2,559

6. 保有目的を変更した有価証券  
該当ありません。

## 7. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて30%以上下落しており、時価が取得原価まで回復の見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、その評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。当連結会計年度における減損処理額は株式259百万円であります。

## ●金銭の信託関係

## 1. 運用目的の金銭の信託

(単位:百万円)

	連結貸借対照表計上額	連結会計年度の損益に含まれた評価差額
運用目的の金銭の信託	3,603	△6

## 2. 満期保有目的の金銭の信託

該当ありません。

## 3. その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

(単位:百万円)

	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額	うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの
その他の金銭の信託	500	500	—	—	—

(注) 「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

## ●その他有価証券評価差額金

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

(単位:百万円)

	金額
評価差額	222
その他有価証券	222
(+) 繰延税金資産(又は(△)繰延税金負債)	△59
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	163
(△) 非支配株主持分相当額	—
その他有価証券評価差額金	163

## ●デリバティブ取引関係

- ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引  
ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。  
(1) 金利関連取引  
該当ありません。  
(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益
店頭	為替予約				
	売建	10,710	—	△64	△64
	買建	38	—	0	0
合計				△63	△63

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定

割引現在価値により算定しております。

- 株式関連取引  
該当ありません。
- 債券関連取引  
該当ありません。
- 商品関連取引  
該当ありません。
- クレジット・デリバティブ取引  
該当ありません。

- ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引  
ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。  
(1) 金利関連取引  
該当ありません。  
(2) 通貨関連取引

(単位：百万円)

ヘッジ 会計の方法	種類	主 な ヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価
原則的 処理方法	資金関連スワップ	外貨建の預金	12,470	—	△105
合計					△105

(注) 1. 「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2. 時価の算定

割引現在価値により算定しております。

- 株式関連取引  
該当ありません。
- 債券関連取引  
該当ありません。

## ●退職給付関係

- 採用している退職給付制度の概要  
当行は、従業員の退職給付に充てるため、積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。確定給付企業年金制度では、給与と勤務期間に基づいた一時金又は年金を支給しております。  
退職一時金制度(非積立型制度ではありませんが、退職給付信託を設定した結果、積立型制度となっております。)では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給しており、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。  
また、連結子会社は非積立型の退職一時金制度を設けております。

### 2. 確定給付制度

- 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

区分	金額
退職給付債務の期首残高	11,618
勤務費用	365
利息費用	41
数理計算上の差異の発生額	12
退職給付の支払額	△286
その他	△11
退職給付債務の期末残高	11,740

- 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

区分	金額
年金資産の期首残高	11,288
期待運用収益	282
数理計算上の差異の発生額	△477
事業主からの拠出額	133
退職給付の支払額	△198
その他	0
年金資産の期末残高	11,029

- 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(単位：百万円)

区分	金額
積立型制度の退職給付債務	11,587
年金資産	△11,029
	558
非積立型制度の退職給付債務	152
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	710

(単位：百万円)

区分	金額
退職給付に係る負債	1,123
退職給付に係る資産	△412
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	710

- 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位：百万円)

区分	金額
勤務費用	365
利息費用	41
期待運用収益	△282
数理計算上の差異の費用処理額	389
過去勤務費用の費用処理額	△157
その他	—
確定給付制度に係る退職給付費用	356

- 退職給付に係る調整額  
退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	金額
過去勤務費用	157
数理計算上の差異	100
その他	—
合計	257

- 退職給付に係る調整累計額  
退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	金額
未認識過去勤務費用	△1,202
未認識数理計算上の差異	2,486
その他	—
合計	1,283

- 年金資産に関する事項

- 年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	金額
債券	63%
株式	14%
生保一般勘定	7%
現金及び預金	0%
その他	16%
合計	100%

(注) 年金資産合計には、退職一時金制度に対して設定した退職給付信託が48%含まれております。

- 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

- 数理計算上の計算基礎に関する事項  
主要な数理計算上の計算基礎

区分	金額
割引率	0.0%~0.7%
長期期待運用収益率	2.0%~3.0%
予想昇給率	2.5%~3.3%

- 確定拠出制度

当行の確定拠出制度への要拠出額は78百万円であります。

## ●ストック・オプション等関係

1. ストック・オプションにかかる費用計上額及び科目名  
営業経費 一百万円

2. ストック・オプションの内容、規模及びその変動状況  
(1) ストック・オプションの内容

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	取締役8名、監査役3名 及び執行役員8名	取締役8名、監査役3名 及び執行役員3名
株式の種類別のストック・ オプションの付与数 (注)	普通株式 95,600株	普通株式 74,500株
付与日	2011年7月29日	2012年7月31日
権利確定条件	権利確定条件を定めてい ない	同 左
対象勤務期間	対象勤務期間を定めてい ない	同 左
権利行使期間	2011年8月1日から 2041年7月28日まで	2012年8月1日から 2042年7月30日まで

	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	取締役9名、監査役3名 及び執行役員3名	取締役10名、監査役3名 及び執行役員3名
株式の種類別のストック・ オプションの付与数 (注)	普通株式 54,200株	普通株式 50,600株
付与日	2013年7月31日	2014年7月31日
権利確定条件	権利確定条件を定めてい ない	同 左
対象勤務期間	対象勤務期間を定めてい ない	同 左
権利行使期間	2013年8月1日から 2043年7月30日まで	2014年8月1日から 2044年7月30日まで

	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	取締役9名、監査役3名 及び執行役員4名	取締役8名、監査役3名 及び執行役員5名
株式の種類別のストック・ オプションの付与数 (注)	普通株式 37,500株	普通株式 66,200株
付与日	2015年7月31日	2016年7月29日
権利確定条件	権利確定条件を定めてい ない	同 左
対象勤務期間	対象勤務期間を定めてい ない	同 左
権利行使期間	2015年8月1日から 2045年7月30日まで	2016年8月1日から 2046年7月30日まで

	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション
付与対象者の区分及び人数	取締役8名、監査役4名 及び執行役員5名	取締役9名、監査役4名 及び執行役員5名
株式の種類別のストック・ オプションの付与数 (注)	普通株式 52,100株	普通株式 48,300株
付与日	2017年7月31日	2018年7月31日
権利確定条件	権利確定条件を定めてい ない	同 左
対象勤務期間	対象勤務期間を定めてい ない	同 左
権利行使期間	2017年8月1日から 2047年7月30日まで	2018年8月1日から 2048年7月30日まで

(注) 株式数に換算して記載しております。

(2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(2020年3月期)において存在したストック・オプションを  
対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載して  
おります。

①ストック・オプションの数

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション
権利確定前 (株)				
前連結会計年度末	—	—	—	—
付与	—	—	—	—
失効	—	—	—	—
権利確定	—	—	—	—
未確定残	—	—	—	—
権利確定後 (株)				
前連結会計年度末	10,800	13,600	14,000	18,800
権利確定	—	—	—	—
権利行使	—	—	—	3,200
失効	—	—	—	—
未行使残	10,800	13,600	14,000	15,600

	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション
権利確定前 (株)				
前連結会計年度末	—	—	—	—
付与	—	—	—	—
失効	—	—	—	—
権利確定	—	—	—	—
未確定残	—	—	—	—
権利確定後 (株)				
前連結会計年度末	21,900	43,000	45,300	48,300
権利確定	—	—	—	—
権利行使	2,400	4,100	6,500	8,700
失効	—	—	—	—
未行使残	19,500	38,900	38,800	39,600

②単価情報

	2011年 ストック・オプション	2012年 ストック・オプション	2013年 ストック・オプション	2014年 ストック・オプション
権利行使価格	1株当たり 1円	1株当たり 1円	1株当たり 1円	1株当たり 1円
行使時平均株価	1株当たり 1円	1株当たり 1円	1株当たり 1円	1株当たり 1,157円
付与日における 公正な評価単価	1株当たり 927円	1株当たり 854円	1株当たり 1,162円	1株当たり 1,411円

	2015年 ストック・オプション	2016年 ストック・オプション	2017年 ストック・オプション	2018年 ストック・オプション
権利行使価格	1株当たり 1円	1株当たり 1円	1株当たり 1円	1株当たり 1円
行使時平均株価	1株当たり 1,157円	1株当たり 1,157円	1株当たり 1,141円	1株当たり 1,162円
付与日における 公正な評価単価	1株当たり 1,715円	1株当たり 1,015円	1株当たり 1,396円	1株当たり 1,608円

3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与されたストック・オプションはありません。

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用しております。

## ●税効果会計関係

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生主な原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	3,193 百万円
退職給付に係る資産及び負債	1,708 百万円
有税償却有価証券	419 百万円
減価償却	379 百万円
その他	1,070 百万円
繰延税金資産小計	6,770 百万円
評価性引当額	△1,356 百万円
繰延税金資産合計	5,413 百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△59 百万円
その他	△47 百万円
繰延税金負債合計	△106 百万円
繰延税金資産の純額	5,307 百万円

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率 (調整)	29.91 %
評価性引当額	△3.35
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.43
受取配当金等永久に損金に算入されない項目	△1.95
住民税均等割額	0.40
子会社からの受取配当金消去	1.83
その他	0.19
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.46 %



# 資料編 (連結情報)

## ●資産除去債務関係

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

- 当該資産除去債務の概要  
営業店舗の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務のほか、建物の解体時におけるアスベスト除去費用等について資産除去債務を計上しております。
- 当該資産除去債務の金額の算定方法  
使用見込期間を建物の残存耐用年数39年以内と見積り、割引率は当該使用見込期間に見合う国債の流通利回り0.2%~2.2%を使用して資産除去債務の金額を算定しております。
- 当該資産除去債務の総額の増減

期首残高	251 百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	15 百万円
時の経過による調整額	3 百万円
資産除去債務の履行による減少額	6 百万円
期末残高	264 百万円

## ●賃貸等不動産関係

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

## ●関連当事者情報

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

## ●1株当たり情報

1株当たり純資産額	3,021.59	円
1株当たり当期純利益	115.40	円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	114.87	円

(注) 1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

純資産の部の合計額	129,960	百万円
純資産の部の合計額から控除する金額	250	百万円
うち新株予約権	250	百万円
普通株式に係る期末の純資産額	129,710	百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	42,927	千株

2 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益	4,951	百万円
普通株主に帰属しない金額	—	百万円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	4,951	百万円
普通株式の期中平均株式数	42,910	千株
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額	—	百万円
普通株式増加数	196	千株
うち新株予約権	196	千株

## ●重要な後発事象

該当ありません。

## セグメント情報等

## (セグメント情報)

## 1. 報告セグメントの概要

当行グループは当行及び連結子会社6社で構成され、銀行業務を中心にリース業務などの金融サービスに係る事業を行っており、当行の取締役会において定期的にグループ内の会社別の財務情報を報告しております。

したがって、当行グループは、当行をはじめ各連結子会社別のセグメントから構成されておりますが、全セグメントの経常収益の概ね7割を占める「銀行業」のほか、重要性を鑑み「リース業」の2つを報告セグメントとしております。

「銀行業」は、当行の本店のほか支店等においては、預金業務、貸出業務、外国為替業務、外国為替業務及び有価証券投資業務等並びにこれらに付随する業務を行っており、「リース業」は、リース業務等を行っております。

## 2. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であり、報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値であります。

なお、セグメント間の内部経常収益は、第三者間の取引価格に基づいております。

## 3. 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	41,077	16,734	57,812	4,305	62,117	—	62,117
セグメント間の内部経常収益	976	131	1,108	1,498	2,606	△2,606	—
計	42,054	16,866	58,920	5,803	64,724	△2,606	62,117
セグメント利益	7,397	520	7,917	1,142	9,059	△398	8,661
セグメント資産	2,350,763	43,145	2,393,909	34,923	2,428,832	△39,218	2,389,613
セグメント負債	2,236,659	37,171	2,273,831	24,297	2,298,128	△36,630	2,261,498
その他の項目							
減価償却費	2,060	582	2,643	142	2,786	—	2,786
資金運用収益	29,613	10	29,624	566	30,190	△720	29,469
資金調達費用	1,460	149	1,609	247	1,856	△321	1,535
減損損失	32	—	32	—	32	—	32
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	3,055	926	3,982	58	4,040	—	4,040

- (注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。  
2. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、クレジットカード業務、信用保証業務、個別信用購入幹旋業務、現金精査整理業務、事務代行業務、産業・経済・金融に関する調査研究業務等であります。  
3. 「調整額」は主にセグメント間取引消去であります。  
4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位: 百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する経常収益	41,532	16,897	58,430	4,305	62,735	—	62,735
セグメント間の内部経常収益	958	161	1,120	1,538	2,658	△2,658	—
計	42,490	17,059	59,550	5,843	65,393	△2,658	62,735
セグメント利益	5,374	573	5,948	1,372	7,320	△400	6,919
セグメント資産	2,395,499	44,806	2,440,305	34,375	2,474,680	△38,991	2,435,689
セグメント負債	2,280,490	38,456	2,318,946	23,197	2,342,144	△36,415	2,305,729
その他の項目							
減価償却費	2,280	564	2,844	122	2,967	—	2,967
資金運用収益	29,543	9	29,552	539	30,091	△698	29,393
資金調達費用	1,256	151	1,408	196	1,605	△278	1,326
減損損失	6	—	6	—	6	—	6
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,832	1,029	3,862	30	3,893	—	3,893

- (注) 1. 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。  
2. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、クレジットカード業務、信用保証業務、個別信用購入幹旋業務、現金精査整理業務、事務代行業務、産業・経済・金融に関する調査研究業務等であります。  
3. 「調整額」は主にセグメント間取引消去であります。  
4. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

## (関連情報)

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

## 1. サービスごとの情報

	貸出業務 (百万円)	有価証券 投資業務 (百万円)	リース業務 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)
外部顧客に対する経常収益	26,373	5,492	16,674	13,576	62,117

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

## 2. 地域ごとの情報

## (1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

## (2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

## 3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

## 1. サービスごとの情報

	貸出業務 (百万円)	有価証券 投資業務 (百万円)	リース業務 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)
外部顧客に対する経常収益	26,785	5,222	16,842	13,885	62,735

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

## 2. 地域ごとの情報

## (1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

## (2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

## 3. 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

## (報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報)

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(セグメント情報) に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(セグメント情報) に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

す。

## (報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報)

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

該当事項はありません。

## (報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報)

前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

該当事項はありません。

## リスク管理債権

(単位: 百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
破綻先債権額	425	398
延滞債権額	24,323	23,399
3カ月以上延滞債権額	990	840
貸出条件緩和債権額	2,387	18,140
合計	28,127	42,778

(注) 破綻先債権、延滞債権、3カ月以上延滞債権、貸出条件緩和債権の用語の説明についてはP.60に記載しています。

## ■ 営業の概況

当事業年度は次のような経営成績となりました。

貸出金の期末残高は地公体向け貸出が減少したものの、個人向けが住宅ローンを中心に増加したほか、法人向けも不動産業を中心に増加したことから前期末を249億69百万円上回る1兆7,456億13百万円となりました。預金等（譲渡性預金含む）の期末残高は、公金預金が減少したものの、個人預金、法人預金、金融預金が堅調に推移した結果、前期末を582億68百万円上回る2兆2,568億82百万円となりました。

経常収益は、株式等売却益の減少によるその他経常収益の減少及び有価証券利息配当金の減少による資金運用収益の減少があったものの、国債等債券売却益の増加によるその他業務収益の増加及びカード関連業務等の役務取引等収益の増加により、前期を4億36百万円上回る424億90百万円となりました。一方、経常費用は、利回り低下による預金利息の減少等により資金調達費用が減少したものの、国債等債券償還損の増加によるその他業務費用の増加、物件費の増加による営業経費の増加及び一般貸倒引当金繰入額の増加によるその他経常費用の増加等により、前期を24億58百万円上回る371億16百万円となりました。この結果、経常利益は前期を20億22百万円下回る53億74百万円、当期純利益は前期を13億65百万円下回る40億9百万円となりました。

## ■ 主要な経営指標等の推移

(単位：百万円)

回次	第100期	第101期	第102期	第103期	第104期
決算年月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月	2020年3月
経常収益	40,238	41,119	42,470	42,054	42,490
うち信託報酬	—	—	—	—	—
経常利益	8,302	7,414	10,759	7,397	5,374
当期純利益	5,052	5,012	7,827	5,374	4,009
資本金	54,127	54,127	54,127	56,967	56,967
発行済株式総数	普通株 38,508千株	普通株 38,508千株	普通株 38,508千株	普通株 43,108千株	普通株 43,108千株
純資産額	98,139	98,945	105,225	114,823	115,908
総資産額	2,202,610	2,216,130	2,321,902	2,351,674	2,396,224
預金残高	2,038,488	2,024,515	2,088,580	2,159,185	2,218,250
貸出金残高	1,465,549	1,530,073	1,619,489	1,720,644	1,745,613
有価証券残高	471,309	425,797	410,784	282,070	261,394
1株当たり純資産額	2,572.41円	2,590.83円	2,745.67円	2,672.46円	2,694.24円
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	普通株式 35.00円 (17.50)	普通株式 35.00円 (17.50)	普通株式 42.00円 (17.50)	普通株式 35.00円 (17.50)	普通株式 35.00円 (17.50)
1株当たり当期純利益	132.75円	131.58円	205.21円	131.29円	93.43円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	132.18円	130.94円	204.20円	130.64円	93.00円
自己資本比率	4.44%	4.45%	4.52%	4.87%	4.82%
単体自己資本比率(国内基準)	8.75%	8.42%	8.57%	8.31%	8.46%
自己資本利益率	5.26%	5.09%	7.68%	4.89%	3.48%
株価収益率	9.52倍	12.16倍	7.87倍	8.59倍	11.34倍
配当性向	26.37%	26.60%	20.51%	27.90%	37.47%
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	1,233人 (334人)	1,252人 (401人)	1,281人 (396人)	1,400人 (334人)	1,352人 (286人)
信託財産額	—	—	—	—	—
信託勘定貸出金残高	—	—	—	—	—
信託勘定有価証券残高	—	—	—	—	—

- (注) 1. 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。  
 2. 第104期(2020年3月)中間配当についての取締役会決議は2019年11月8日に行いました。  
 3. 第102期(2018年3月)の1株当たり配当額のうち7.00円は記念配当であります。  
 4. 自己資本比率は、(期末純資産の部合計-期末新株予約権)を期末資産の部の合計で除して算出してあります。  
 5. 単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく2006年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出してあります。当行は、国内基準を採用しております。



当行は、貸借対照表および損益計算書について、会社法第396条第1項によるEY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。  
 当行は、財務諸表（貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書）について、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。

## 貸借対照表

### 資産の部

(単位：百万円)

	2018年度 (2019年3月31日)	2019年度 (2020年3月31日)
現金預け金	253,544	305,664
現金	34,045	39,494
預け金	219,499	266,170
コールローン	707	—
買入金銭債権	74	34
金銭の信託	15,148	4,103
有価証券	282,070	261,394
国債	74,633	73,938
地方債	7,534	119,547
社債	55,946	7,747
株式	6,527	6,184
その他の証券	137,429	53,976
貸出金	1,720,644	1,745,613
割引手形	6,957	4,895
手形貸付	148,407	133,164
証書貸付	1,430,179	1,467,039
当座貸越	135,099	140,513
外国為替	8,992	7,955
外国他店預け	8,992	7,950
取立外国為替	—	4
その他資産	39,628	38,507
前払費用	20	42
未収収益	1,775	1,418
先物取引差入証拠金	1,188	1,248
金融派生商品	338	2
中央清算機関差入証拠金	32,000	32,000
その他の資産	4,306	3,795
有形固定資産	21,527	20,140
建物	5,821	5,564
土地	12,519	12,757
建設仮勘定	20	175
その他の有形固定資産	3,166	1,644
無形固定資産	3,782	4,549
ソフトウエア	2,049	3,458
その他の無形固定資産	1,732	1,091
前払年金費用	1,256	1,025
繰延税金資産	2,867	3,898
支払承諾見返	7,163	9,568
貸倒引当金	△5,733	△6,230
資産の部合計	2,351,674	2,396,224

### 負債及び純資産の部

(単位：百万円)

	2018年度 (2019年3月31日)	2019年度 (2020年3月31日)
(負債の部)		
預金	2,159,185	2,218,250
当座預金	26,168	27,926
普通預金	1,331,224	1,397,312
貯蓄預金	6,178	6,188
通知預金	284	304
定期預金	762,964	735,665
その他の預金	32,365	50,855
譲渡性預金	39,428	38,631
債券貸借取引受入担保金	21,734	4,001
借入金	47	36
借入金	47	36
外国為替	108	225
売渡外国為替	72	220
未払外国為替	36	5
その他負債	5,810	6,609
未払法人税等	918	1,179
未払費用	803	782
前受収益	1,182	1,095
金融派生商品	19	171
資産除去債務	251	264
その他の負債	2,633	3,115
賞与引当金	636	613
退職給付引当金	344	224
睡眠預金払戻損失引当金	109	70
偶発損失引当金	95	99
再評価に係る繰延税金負債	2,188	1,985
支払承諾	7,163	9,568
負債の部合計	2,236,851	2,280,316
(純資産の部)		
資本金	56,967	56,967
資本剰余金	12,937	12,926
資本準備金	12,840	12,840
その他資本剰余金	97	86
利益剰余金	42,028	45,010
利益準備金	2,648	2,949
その他利益剰余金	39,379	42,061
繰越利益剰余金	39,379	42,061
自己株式	△347	△250
株主資本合計	111,586	114,654
その他有価証券評価差額金	1,638	163
繰延ヘッジ損益	△0	1
土地再評価差額金	1,312	838
評価・換算差額等合計	2,949	1,003
新株予約権	286	250
純資産の部合計	114,823	115,908
負債及び純資産の部合計	2,351,674	2,396,224

## 損益計算書

(単位：百万円)

	2018年度 (自2018年4月1日 至2019年3月31日)	2019年度 (自2019年4月1日 至2020年3月31日)
経常収益	42,054	42,490
資金運用収益	29,613	29,543
貸出金利息	26,132	26,529
有価証券利息配当金	2,796	2,126
コールローン利息	10	△3
預け金利息	85	83
その他の受入利息	589	807
役務取引等収益	6,786	7,233
受入為替手数料	1,722	1,760
その他の役務収益	5,064	5,473
その他業務収益	2,184	4,019
外国為替売買益	821	149
商品有価証券売買益	0	0
国債等債券売却益	1,362	3,388
金融派生商品収益	—	481
その他の業務収益	0	—
その他経常収益	3,469	1,694
償却債権取立益	746	332
株式等売却益	1,718	114
睡眠預金払戻損失引当金取崩額	65	39
偶発損失引当金取崩額	23	—
金銭の信託運用益	10	79
その他の経常収益	905	1,128
経常費用	34,657	37,116
資金調達費用	1,460	1,256
預金利息	1,186	1,265
譲渡性預金利息	8	9
コールマネー利息	△28	△18
債券貸借取引支払利息	240	0
借入金利息	0	0
社債利息	53	—

(単位：百万円)

	2018年度 (自2018年4月1日 至2019年3月31日)	2019年度 (自2019年4月1日 至2020年3月31日)
役務取引等費用	4,694	5,067
支払為替手数料	346	352
その他の役務費用	4,348	4,715
その他業務費用	1,539	2,967
国債等債券売却損	1,246	1,363
国債等債券償還損	285	1,603
社債発行費償却	7	—
営業経費	24,153	24,618
その他経常費用	2,809	3,205
貸倒引当金繰入額	112	601
貸出金償却	346	510
株式等売却損	1,423	1,195
株式等償却	130	260
偶発損失引当金繰入	—	4
金銭の信託運用損	302	—
その他の経常費用	495	632
経常利益	7,397	5,374
特別利益	0	9
固定資産処分益	0	9
特別損失	119	102
固定資産処分損	87	96
減損損失	32	6
税引前当期純利益	7,277	5,281
法人税、住民税及び事業税	1,952	1,908
法人税等調整額	△49	△636
法人税等合計	1,903	1,272
当期純利益	5,374	4,009

## ■ 株主資本等変動計算書

2018年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位:百万円)

	株主資本								株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			自己株式	
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計		
当期首残高	54,127	10,000	99	10,099	2,311	36,018	38,330	△375	102,181
当期変動額									
新株の発行	2,840	2,840		2,840					5,680
剰余金の配当					337	△2,024	△1,686		△1,686
当期純利益						5,374	5,374		5,374
自己株式の取得								△2	△2
自己株式の処分			△2	△2				30	28
土地再評価差額金の 取崩						10	10		10
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)									—
当期変動額合計	2,840	2,840	△2	2,838	337	3,361	3,698	28	9,405
当期末残高	56,967	12,840	97	12,937	2,648	39,379	42,028	△347	111,586

	評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	1,483	△0	1,323	2,806	236	105,225
当期変動額						
新株の発行						5,680
剰余金の配当						△1,686
当期純利益						5,374
自己株式の取得						△2
自己株式の処分						28
土地再評価差額金の 取崩						10
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)	154	△0	△10	142	49	192
当期変動額合計	154	△0	△10	142	49	9,597
当期末残高	1,638	△0	1,312	2,949	286	114,823



# 資料編 (単体情報)

2019年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位: 百万円)

	株主資本								株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			自己株式	
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計		
当期首残高	56,967	12,840	97	12,937	2,648	39,379	42,028	△347	111,586
当期変動額									
剰余金の配当					300	△1,801	△1,501		△1,501
当期純利益						4,009	4,009		4,009
自己株式の取得								△1	△1
自己株式の処分			△11	△11				98	87
土地再評価差額金の 取崩						473	473		473
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)									—
当期変動額合計	—	—	△11	△11	300	2,681	2,981	96	3,067
当期末残高	56,967	12,840	86	12,926	2,949	42,061	45,010	△250	114,654

	評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	1,638	△0	1,312	2,949	286	114,823
当期変動額						
剰余金の配当						△1,501
当期純利益						4,009
自己株式の取得						△1
自己株式の処分						87
土地再評価差額金の 取崩						473
株主資本以外の項目 の当期変動額 (純額)	△1,474	2	△473	△1,946	△35	△1,982
当期変動額合計	△1,474	2	△473	△1,946	△35	1,085
当期末残高	163	1	838	1,003	250	115,908

## 注記事項 (2019年度)

### ●重要な会計方針

1. 商品有価証券の評価基準及び評価方法  
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

### 2. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。  
なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

### 3. デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

### 4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)  
有形固定資産は、定額法を採用しております。また、主な耐用年数は次のとおりであります。  
建物: 5~50年  
その他: 3~20年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)  
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

### 5. 繰延資産の処理方法

社債発行費は資産として計上し、社債の償還期間にわたり定額法により償却しております。  
株式交付費は、支出時に全額費用として処理しております。

### 6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

### 7. 引当金の計上基準

#### (1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下、「破綻懸念先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。  
なお、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先の一部に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は2,725百万円です。

#### (2) 賞与引当金

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

#### (3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用: その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(12年)による定額法により損益処理  
数理計算上の差異: 各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(12年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生時の翌事業年度から損益処理

#### (4) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金の預金者からの将来の払戻請求に備えるため、過去の支払実績に基づき、必要と認められた額を計上しております。

#### (5) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、責任共有制度による信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来の負担金支払見積額を計上しております。

### 8. ヘッジ会計の方法

#### (1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の(残存)期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

#### (2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

### 9. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

#### (1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

#### (2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税(以下、消費税等という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

### ●追加情報

新型コロナウイルス感染症拡大の影響に関する一定の仮定について

当行は新型コロナウイルス感染症拡大の影響は、2020年度上期にピークに達し2020年度末にかけて収束していくものと想定しておりますが、当行の貸倒引当金は、新型コロナウイルスの影響による支援目的の返済条件変更等を実施した取引先について、今後の事業活動に一定の不確実性があると仮定して債務者区分の見直し等を行った上で計上しております。

なお、貸倒引当金計上額は現時点の最善の見積りであるものの、見積りに用いた仮定には不確実性があり、新型コロナウイルス感染症の感染状況やその経済環境への影響が変化した場合には、翌年度の財務諸表に与える影響額が増減する可能性があります。

### ●貸借対照表関係

#### 1. 関係会社の株式又は出資金の総額

株式	3,251百万円
出資金	145百万円

#### 2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

破綻先債権額	355百万円
延滞債権額	23,323百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

#### 3. 貸出金のうち3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

3ヵ月以上延滞債権額	789百万円
------------	--------

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3ヵ月上延滞している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

#### 4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

貸出条件緩和債権額	17,847百万円
-----------	-----------

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取扱いを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

#### 5. 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

合計額	42,315百万円
-----	-----------

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	4,895百万円
--	----------

#### 7. 担保に供している資産は次のとおりであります。

担保に供している資産	
有価証券	19,466百万円
預け金	15百万円
その他の資産	12百万円
計	19,494百万円

#### 担保資産に対応する債務

預金	16,530百万円
債券借取引受入担保金	4,001百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

有価証券	3,685百万円
その他の資産	27百万円
預け金	15百万円

子会社、関連会社の借入金等の担保として差し入れているものはありません。また、その他の資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	866百万円
--	--------

8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

融資未実行残高	302,420百万円
うち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なもの	298,560百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9. 有形固定資産の圧縮記帳額	253百万円
圧縮記帳額	(一百万円)
10. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額	2,933百万円
11. 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額	56百万円

●有価証券関係

子会社株式及び関連会社株式

時価のある子会社株式及び関連会社株式はありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

子会社株式	3,251百万円
-------	----------

●税効果会計関係

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生的主要原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	2,347 百万円
退職給付引当金	1,562 百万円
減価償却	379 百万円
有税償却有価証券	378 百万円
その他	838 百万円
繰延税金資産小計	5,506 百万円
評価性引当額	△1,223 百万円
繰延税金資産合計	4,282 百万円
繰延税金負債	
前払年金費用	△306 百万円
其他有価証券評価差額金	△49 百万円
その他	△27 百万円
繰延税金負債合計	△384 百万円
繰延税金資産の純額	3,898 百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率	29.91%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.47%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△2.51%
住民税均等割等	0.47%
評価性引当額	△3.98%
収用土地の特別控除	△0.28%
その他	0.01%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	24.09%

●重要な後発事象

該当ありません。



## ■ 業務粗利益の状況

(単位：百万円、%)

	国内業務部門		国際業務部門		合 計	
	2018年度	2019年度	2018年度	2019年度	2018年度	2019年度
資金運用収益	27,824	28,157	1,825	1,398	35	12
					29,613	29,543
資金調達費用	605	423	887	842	35	12
					1,457	1,253
資金運用収支	27,218	27,733	938	556	28,156	28,290
信託報酬	—	—	—	—	—	—
役務取引等収支	2,061	2,124	30	41	2,092	2,165
役務取引等収益	6,716	7,161	70	71	6,786	7,233
役務取引等費用	4,655	5,037	39	30	4,694	5,067
その他業務収支	45	△1,776	599	2,828	645	1,052
その他業務収益	338	971	1,846	3,048	2,184	4,019
その他業務費用	292	2,747	1,246	220	1,539	2,967
業務粗利益	29,325	28,081	1,568	3,426	30,893	31,508
業務粗利益率	1.33	1.25	1.24	5.12	1.36	1.38
業務純益					6,281	5,542
実質業務純益					6,925	7,133
コア業務純益					7,095	6,712
コア業務純益 (投資信託解約損益を除く。)					7,427	6,863

- (注) 1. 国内業務部門は国内店の円建取引、国際業務部門は国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。  
 2. 資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。  
 3. 資金調達費用は、金銭の信託運用見合費用を控除して表示しております。  
 4. 業務粗利益率 =  $\frac{\text{業務粗利益}}{\text{資金運用勘定平均残高}} \times 100$

## ■ 資金運用・調達勘定平均残高、利息、利回り

## 国内業務部門

(単位：百万円、%)

	2018年度			2019年度		
	平均残高	利 息	利 回 り	平均残高	利 息	利 回 り
資金運用勘定	2,202,151	27,824	1.26	2,230,935	28,157	1.26
うち貸出金	1,638,608	26,119	1.59	1,714,778	26,526	1.54
うち商品有価証券	2	0	0.20	2	0	0.21
うち有価証券	236,893	1,586	0.66	244,430	1,543	0.63
うちコールローン	170,336	△3	△0.00	161,650	△9	△0.00
うち預け金	84,906	85	0.10	83,578	83	0.10
資金調達勘定	(71,306) 2,228,524	(35) 605	0.02	(26,440) 2,242,878	(12) 423	0.01
うち預金	2,093,293	575	0.02	2,155,472	436	0.02
うち譲渡性預金	34,628	8	0.02	37,814	9	0.02
うちコールマネー	94,912	△28	△0.03	69,639	△18	△0.02
うち借入金	13,914	0	0.00	38	0	0.12
うち社債	6,969	53	0.76	—	—	—

- (注) 1. 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高 (2018年度48,115百万円、2019年度37,364百万円) を控除して表示しております。  
 2. ( ) 内は国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息 (内書き) であります。  
 3. 資金調達勘定は、金銭の信託運用見合額の平均残高及び利息を、それぞれ控除して表示しております。

## 国際業務部門

(単位：百万円、%)

	2018年度			2019年度		
	平均残高	利 息	利 回 り	平均残高	利 息	利 回 り
資 金 運 用 勘 定	(71,306) 125,661	(35) 1,825	1.45	(26,440) 66,811	(12) 1,398	2.09
うち貸 出 金	433	12	2.97	139	3	2.34
うち有 価 証 券	119,417	1,210	1.01	62,373	582	0.93
うちコ ー ル ロ ー ン	825	14	1.78	617	6	0.98
資 金 調 達 勘 定	126,152	887	0.70	68,246	842	1.23
うち預 金	28,507	610	2.14	37,405	829	2.21
うちコ ー ル マ ネ ー	—	—	—	—	—	—
うち債券貸借取引受入担保金	26,232	240	0.91	4,309	0	0.01

- (注) 1. 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(2018年度267百万円、2019年度282百万円)を控除して表示しております。  
 2. 国際業務部門の国内店外貸建取引の平均残高は月次カレント方式(前月末TT仲値を当該月のノンエクスチェンジ取引に適用する方式)により算出しております。  
 3. ( )内は国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

## 合計 (国内・国際)

(単位：百万円、%)

	2018年度			2019年度		
	平均残高	利 息	利 回 り	平均残高	利 息	利 回 り
資 金 運 用 勘 定	2,256,505	29,613	1.31	2,271,306	29,543	1.30
うち貸 出 金	1,639,042	26,132	1.59	1,714,917	26,529	1.54
うち商 品 有 価 証 券	2	0	0.20	2	0	0.21
うち有 価 証 券	356,310	2,796	0.78	306,804	2,126	0.69
うちコ ー ル ロ ー ン	171,162	10	0.00	162,267	△3	△0.00
うち預 け 金	84,906	85	0.10	83,578	83	0.10
資 金 調 達 勘 定	2,283,370	1,457	0.06	2,284,684	1,253	0.05
うち預 金	2,121,801	1,186	0.05	2,192,877	1,265	0.05
う ち 譲 渡 性 預 金	34,628	8	0.02	37,184	9	0.02
うちコ ー ル マ ネ ー	94,912	△28	△0.03	69,640	△18	△0.02
うち債券貸借取引受入担保金	26,232	240	0.91	4,309	0	0.01
う ち 借 用 金	13,914	0	0.00	38	0	0.12
う ち 社 債	6,969	53	0.76	—	—	—

- (注) 1. 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(2018年度48,383百万円、2019年度37,646百万円)をそれぞれ控除して表示しております。  
 2. 国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息は、相殺して記載しております。  
 3. 資金調達勘定は、金銭の信託運用見合額の平均残高及び利息を、控除して表示しております。

## ■ 受取・支払利息の分析

## 国内業務部門

(単位：百万円)

	2018年度			2019年度		
	残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減
受取利息	782	△1,584	△802	363	△30	333
うち貸出金	1,551	△1,371	179	1,178	△771	406
うち商品有価証券	△0	△0	△0	1	△1	0
うち有価証券	△502	△474	△976	47	△90	△42
うちコールローン	△0	2	1	0	△6	△5
うち預け金	△0	0	△0	△1	△0	△1
支払利息	22	△343	△321	2	△184	△182
うち預金	18	△291	△272	12	△152	△139
うち譲渡性預金	1	△0	0	0	△0	0
うちコールマネー	△11	1	△9	6	4	10
うち借入金	△0	0	△0	△17	17	△0
うち社債	△38	0	△37	△53	—	△53

(注) 1. 残高及び利率の増減要因が重なる部分については、残高による増減に含めて記載しております。  
2. 支払利息は、金銭の信託運用見合費用を控除しております。

## 国際業務部門

(単位：百万円)

	2018年度			2019年度		
	残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減
受取利息	470	183	653	△1,232	805	△426
うち貸出金	△34	21	△13	△6	△2	△9
うち有価証券	351	147	498	△532	△94	△627
うちコールローン	△8	5	△3	△2	△6	△8
支払利息	231	102	333	△714	670	△44
うち預金	△50	221	171	197	21	218
うちコールマネー	—	—	—	—	—	—
うち債券貸借取引受入担保金	121	52	174	△2	△238	△240

(注) 残高及び利率の増減要因が重なる部分については、残高による増減に含めて記載しております。

## 合計 (国内・国際)

(単位：百万円)

	2018年度			2019年度		
	残高による増減	利率による増減	純増減	残高による増減	利率による増減	純増減
受取利息	949	△1,093	△144	192	△262	△70
うち貸出金	1,533	△1,366	166	1,173	△776	397
うち商品有価証券	△0	△0	△0	0	△0	0
うち有価証券	△316	△161	△478	△343	△326	△670
うちコールローン	1	△2	△1	0	△14	△14
うち預け金	△0	0	△0	△1	△0	△1
支払利息	59	△42	16	0	△204	△203
うち預金	35	△137	△101	41	37	78
うち譲渡性預金	1	△0	0	0	△0	0
うちコールマネー	△11	1	△9	6	4	10
うち借入金	△0	0	△0	△17	17	△0
うち社債	△38	0	△37	—	—	—
うち債券貸借取引受入担保金	121	52	174	△2	△238	△240

(注) 1. 残高及び利率の増減要因が重なる部分については、残高による増減に含めて記載しております。  
2. 支払利息は、金銭の信託運用見合費用を控除しております。



## ■ 利回り・利鞘

(単位：%)

	2018年度			2019年度		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
資金運用利回 ①	1.26	1.45	1.31	1.25	2.08	1.29
資金調達原価 ②	1.04	1.75	1.11	1.03	3.32	1.11
総資金利鞘 ①-②	0.22	△0.30	0.20	0.22	△1.24	0.18

## ■ 預貸率・預証率

(単位：%)

	2018年度			2019年度			
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計	
預貸率	期末残高	78.69	1.40	78.26	77.99	0.66	77.34
	期中平均	77.00	1.52	76.00	78.20	0.37	76.89
預証率	期末残高	8.44	789.02	12.82	9.65	239.53	11.58
	期中平均	11.13	418.89	16.52	11.14	166.74	13.75

預貸率：貸出金の預金に対する比率 預証率：有価証券の預金に対する比率 (注) 預金には譲渡性預金を含んでいます。

## ■ 利益率

(単位：%)

	2018年度	2019年度
総資産経常利益率	0.30	0.22
資本経常利益率	6.75	4.60
総資産当期純利益率	0.22	0.16
資本当期純利益率	4.90	3.43

(注)

- 総資産経常(当期純)利益率 =  $\frac{\text{経常(当期純)利益}}{\text{総資産(除く支払承諾見返)平均残高}} \times 100$
- 資本経常(当期純)利益率 =  $\frac{\text{経常(当期純)利益}}{\text{資本勘定平均残高}} \times 100$

## ■ 定期預金の残存期間別残高

(単位：百万円)

		期 間	2019年3月31日	2020年3月31日	
定期預金	うち固定金利定期預金	3ヵ月未満	216,541	206,676	
		3ヵ月以上6ヵ月未満	129,868	128,387	
		6ヵ月以上1年未満	257,855	243,782	
		1年以上2年未満	26,658	24,763	
		2年以上3年未満	10,226	10,495	
		3年以上	13,131	8,287	
		合計	654,281	622,392	
		うち変動金利定期預金	3ヵ月未満	216,511	206,661
			3ヵ月以上6ヵ月未満	129,854	128,370
			6ヵ月以上1年未満	257,803	243,650
			1年以上2年未満	26,476	24,523
			2年以上3年未満	9,999	10,446
			3年以上	13,131	8,287
			合計	653,777	621,940
うち変動金利定期預金	3ヵ月未満	18	13		
	3ヵ月以上6ヵ月未満	13	16		
	6ヵ月以上1年未満	52	131		
	1年以上2年未満	182	239		
	2年以上3年未満	226	48		
	3年以上	0	0		
	合計	492	450		

(注) 本表の預金残高には、積立定期預金を含んでおりません。

## ■ 預金科目別平均残高

(単位：百万円、%)

	2018年度				2019年度			
	国内業務部門	国際業務部門	合計	構成比	国内業務部門	国際業務部門	合計	構成比
流動性預金	1,284,574	—	1,284,574	59.5	1,384,757	—	1,384,757	62.0
うち有利息預金	1,129,132	—	1,129,132	52.3	1,233,502	—	1,233,502	55.3
定期性預金	796,286	—	796,286	36.9	756,977	—	756,977	33.9
うち固定金利定期預金	795,764	—	795,764	36.9	756,493	—	756,493	33.9
うち変動金利定期預金	503	—	503	0.0	466	—	466	0.0
その他	12,432	28,507	40,940	1.8	13,737	37,405	51,142	2.2
計	2,093,293	28,507	2,121,801	98.3	2,155,472	37,405	2,192,877	98.3
譲渡性預金	34,628	—	34,628	1.6	37,184	—	37,184	1.6
信託合同元本	—	—	—	0.0	—	—	—	0.0
合計	2,127,922	28,507	2,156,429	100.0	2,192,656	37,405	2,230,061	100.0

- (注) 1. 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金  
 2. 定期性預金 = 定期預金  
 固定金利定期預金：預入時に満期日迄の利率が確定する定期預金  
 変動金利定期預金：預入期間中の市場金利の変化に応じて金利が変動する定期預金  
 3. 国際業務部門の国内国外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

## ■ 貸出金科目別平均残高

(単位:百万円)

	2018年度			2019年度		
	国内業務部門	国際業務部門	合計	国内業務部門	国際業務部門	合計
手形貸付	136,759	—	136,759	136,796	—	136,796
証書貸付	1,377,901	433	1,378,334	1,441,264	139	1,441,403
当座貸越	118,320	—	118,320	131,609	—	131,609
割引手形	5,628	—	5,628	5,107	—	5,107
合計	1,638,608	433	1,639,042	1,714,778	139	1,714,917

## ■ 中小企業等向貸出

(単位:百万円、%)

	2019年3月31日	2020年3月31日
貸出金残高	1,499,396	1,532,657
総貸出に占める比率	87.14	87.80

(注) 中小企業等とは、資本金3億円（ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品賃貸業等は5千万円）以下の会社又は常用する従業員が300人（ただし、卸売業、物品賃貸業等は100人、小売業、飲食業は50人）以下の企業等であります。

## ■ 貸出金使途別内訳

(単位:百万円、%)

	2019年3月31日	構成比	2020年3月31日	構成比
設備資金	1,194,903	69.45	1,256,462	71.98
運転資金	525,741	30.55	489,151	28.02
合計	1,720,644	100.00	1,745,613	100.00

## ■ 貸出金担保別内訳

(単位:百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
有価証券	512	531
債権	5,217	5,857
商品	1,153	805
不動産	806,911	843,782
その他	45,192	40,203
計	858,986	891,179
保証	654,838	652,549
信用	206,819	201,884
合計	1,720,644	1,745,613

## ■ 支払承諾見返の担保別内訳

(単位:百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
有価証券	226	226
債権	—	—
商品	—	—
不動産	4,999	7,545
その他	427	335
計	5,653	8,107
保証	1,160	1,002
信用	349	458
合計	7,163	9,568

## ■ 貸出金の残存期間別残高

(単位:百万円)

		期 間	2019年3月31日	2020年3月31日
貸出金	うち 変動金利	1年以下	214,132	186,376
		1年超3年以下	81,591	73,164
		3年超5年以下	82,899	88,614
		5年超7年以下	73,635	82,687
		7年超	1,133,326	1,174,297
		期間の定めのないもの	135,059	140,473
		合計	1,720,644	1,745,613
	うち 固定金利	1年以下	—	—
		1年超3年以下	19,494	21,698
		3年超5年以下	40,402	39,903
		5年超7年以下	39,036	41,370
		7年超	1,007,448	1,068,400
		期間の定めのないもの	50,366	62,732
合計	—	—		

(注) 残存期間1年以下の貸出金については、変動金利、固定金利の区別をしておりません。

## 貸出金業種別内訳

(単位：件、百万円、%)

業種	2019年3月31日			2020年3月31日		
	貸出先数	貸出金残高	構成比	貸出先数	貸出金残高	構成比
製造業	350	28,924	1.68	337	26,588	1.52
農業、林業	235	4,382	0.26	267	4,678	0.27
漁業	17	225	0.01	21	195	0.01
鉱業、採石業、砂利採取業	14	3,305	0.19	10	4,346	0.25
建設業	1,276	54,542	3.17	1,331	55,765	3.20
電気・ガス・熱供給・水道業	31	6,540	0.38	26	5,287	0.30
情報通信業	126	4,032	0.24	130	3,474	0.20
運輸業、郵便業	206	33,196	1.93	216	22,128	1.27
卸売業、小売業	1,255	77,707	4.52	1,229	69,658	3.99
金融業、保険業	44	51,453	2.99	43	41,109	2.36
不動産業、物品賃貸業	4,443	540,131	31.39	4,547	563,873	32.30
医療・福祉	564	79,353	4.61	566	79,494	4.55
その他のサービス	2,253	95,209	5.53	2,487	100,421	5.75
地方公共団体	28	136,956	7.96	29	139,865	8.01
その他	99,353	604,677	35.14	97,765	628,719	36.02
合計	110,195	1,720,644	100.00	109,004	1,745,613	100.00

## 貸出金償却額

(単位：百万円)

	2018年度	2019年度
貸出金償却額	346	510

## 貸倒引当金内訳

(単位：百万円)

科目	2018年度		2019年度	
	期末残高	期中増減額	期末残高	期中増減額
一般貸倒引当金	2,397	644	3,988	1,591
個別貸倒引当金	3,336	△716	2,241	△1,095
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—
合計	5,733	△72	6,230	497

## 特定海外債権残高

該当する債権は、2018年度及び2019年度ともにありません。

## リスク管理債権

(単位：百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
破綻先債権額	401	355
延滞債権額	24,215	23,323
3ヵ月以上延滞債権額	921	789
貸出条件緩和債権額	2,148	17,847
合計	27,686	42,315

- ・破綻先債権とは、法人税個別通達「金融機関の未収利息の取扱について」の規定により、未収利息を収益不計上とすることが認められている貸出金のうち、会社更生法、破産法、民事再生法等の法的手続がとられている債務者や手形交換所において取引停止処分を受けた債務者に対する貸出金のことです。なお、この開示額は、担保の処分等によって回収できるものを考慮していませんので、銀行の将来の損失額をそのまま表すものではありません。
- ・延滞債権とは、法人税個別通達「金融機関の未収利息の取扱について」の規定により、未収利息を収益不計上とすることが認められている貸出金から、破綻先債権および金利棚上げにより未収利息を収益不計上とした貸出金を除いた貸出金のことです。なお、この開示額は、担保の処分等によって回収できるものを考慮していませんので、銀行の将来の損失額をそのまま表すものではありません。
- ・3ヵ月以上延滞債権とは、元金又は利息の支払が、約定支払日の翌日を起算日として3ヵ月以上延滞している貸出金で、貸借対照表の注記対象となっている破綻先債権及び延滞債権に該当しないものです。
- ・貸出条件緩和債権とは、経済的困難に陥った債務者の再建・支援を図り、当該債権の回収を促進することなどを目的に、債務者に有利な一定の譲歩（金利の減免、利息の支払猶予、元金の返済猶予、債権放棄、現金贈与、代物弁済の受入など）を実施した貸出金です。



## ■ 有価証券平均残高

(単位：百万円、%)

	2018年度				2019年度			
	国内業務部門	国際業務部門	合計	構成比	国内業務部門	国際業務部門	合計	構成比
国債	96,409	—	96,409	27.1	110,854	—	110,854	36.1
地方債	7,880	—	7,880	2.2	86,476	—	86,476	28.2
社債	71,799	—	71,799	20.1	20,210	—	20,210	6.6
株式	6,675	—	6,675	1.9	6,185	—	6,185	2.0
その他	54,128	119,417	173,545	48.7	20,704	62,373	83,077	27.1
うち外国債券	—	119,417	119,417	33.5	—	62,373	62,373	20.3
うち外国株式	—	0	0	0.0	—	0	0	0.0
合計	236,893	119,417	356,310	100.0	244,430	62,373	306,804	100.0

(注) 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式により算出しております。

## ■ 有価証券の残存期間別残高

(単位：百万円)

種類	期 間	2019年3月31日	2020年3月31日	
国債	1年以下	—	25,317	
	1年超3年以下	56,408	40,464	
	3年超5年以下	10,039	—	
	5年超7年以下	—	—	
	7年超10年以下	—	—	
	10年超	8,185	8,156	
	期間の定めのないもの	—	—	
	合計	74,633	73,938	
	地方債	1年以下	—	—
		1年超3年以下	—	6,713
3年超5年以下		6,122	12,953	
5年超7年以下		—	27,574	
7年超10年以下		399	72,307	
10年超		1,011	—	
期間の定めのないもの		—	—	
合計		7,534	119,547	
社債	1年以下	33,595	2,002	
	1年超3年以下	15,002	2,260	
	3年超5年以下	1,133	2,739	
	5年超7年以下	103	245	
	7年超10年以下	201	499	
	10年超	5,910	—	
	期間の定めのないもの	—	—	
合計	55,946	7,747		
株式	期間の定めのないもの	6,527	6,184	
その他の証券	1年以下	23,841	11,004	
	1年超3年以下	20,529	18,857	
	3年超5年以下	4,312	2,203	
	5年超7年以下	25,098	1,981	
	7年超10年以下	46,914	19,157	
	10年超	1,313	—	
	期間の定めのないもの	15,493	805	
	合計	137,503	54,010	
	うち外国債券	1年以下	23,841	11,004
		1年超3年以下	16,509	18,634
3年超5年以下		1,707	1,704	
5年超7年以下		16,204	—	
7年超10年以下		37,853	13,863	
10年超		1,313	—	
期間の定めのないもの		—	—	
合計	97,428	45,206		
うち外国株式		0	0	

※その他の証券には、買入金銭債権が含まれています。

## ■ 商品有価証券平均残高

(単位：百万円)

種 類	2018年度	2019年度
商 品 国 債	2	2
商 品 地 方 債	—	—
商 品 政 府 保 証 債	—	—
その他の商品有価証券	—	—
合 計	2	2

## ■ 有価証券関係

### I 2018年度

※貸借対照表の「国債」「地方債」「社債」「株式」「その他の証券」のほか、「商品有価証券」及び「買入金銭債権」中の貸付債権信託受益権が含まれております。

#### 1. 売買目的有価証券 (2019年3月31日現在)

該当ありません。

#### 2. 満期保有目的の債券 (2019年3月31日現在) (単位：百万円)

	種 類	貸借対照表計上額	時 価	差 額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	国 債	27,068	28,109	1,041
	社 債	700	701	1
	小 計	27,768	28,810	1,042
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	国 債	—	—	—
	そ の 他	5,000	5,000	—
	小 計	5,000	5,000	—
合 計		32,768	33,810	1,042

#### 3. 子会社・子法人等株式及び関連法人等株式

(2019年3月31日現在)

該当ありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社・子法人等株式及び関連法人等株式

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額
子会社・子法人等株式	3,251
関連法人等株式	—
合 計	3,251

#### 4. その他有価証券 (2019年3月31日現在) (単位：百万円)

	種 類	貸借対照表計上額	取得原価	差 額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株 式	839	364	475
	債 券	106,698	105,523	1,175
	国 債	47,564	46,905	659
	地 方 債	7,534	7,361	173
	社 債	51,599	51,256	342
	そ の 他	92,615	89,577	3,037
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	小 計	200,153	195,465	4,688
	株 式	665	746	△80
	債 券	3,647	3,648	△1
	社 債	3,647	3,648	△1
	そ の 他	38,568	40,888	△2,320
小 計	42,881	45,282	△2,401	
合 計		243,034	240,747	2,286

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券

(単位：百万円)

区 分	貸借対照表計上額
株 式	1,770
そ の 他	1,320
合 計	3,090

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

#### 5. 当期中に売却した満期保有目的の債券

(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当ありません。

#### 6. 当期中に売却したその他有価証券

(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

種 類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株 式	2,652	1,150	61
債 券	29,917	334	0
国 債	20,594	117	—
地 方 債	2,036	36	—
社 債	7,286	180	0
そ の 他	126,343	1,595	2,608
合 計	158,913	3,080	2,669

#### 7. 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

#### 8. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて30%以上下落しており、時価が取得原価まで回復の見込みがあると認められないものについて、当該時価をもって貸借対照表額とするともに、その差額を減損処理しております。

当事業年度における減損処理額は株式121百万円であります。

### II 2019年度

※貸借対照表の「国債」「地方債」「社債」「株式」「その他の証券」のほか、「商品有価証券」及び「買入金銭債権」中の貸付債権信託受益権が含まれております。

#### 1. 売買目的有価証券 (2020年3月31日現在)

該当ありません。

#### 2. 満期保有目的の債券 (2020年3月31日現在) (単位：百万円)

	種 類	貸借対照表計上額	時 価	差 額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	国 債	27,030	27,774	744
	社 債	3,035	3,055	19
	小 計	30,065	30,829	764
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	国 債	—	—	—
	社 債	198	197	△0
	小 計	198	197	△0
合 計		30,263	31,027	763

#### 3. 子会社・子法人等株式及び関連法人等株式

(2020年3月31日現在)

該当ありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社・子法人等株式及び関連法人等株式

(単位：百万円)

	貸借対照表計上額
子会社・子法人等株式	3,251
関連法人等株式	—
合 計	3,251

## 4. その他有価証券 (2020年3月31日現在) (単位: 百万円)

	種 類	貸借対照表計上額	取得原価	差 額
貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株 式	545	207	338
	債 券	53,375	52,979	396
	国 債	46,907	46,580	326
	地 方 債	4,992	4,935	56
	社 債	1,476	1,463	12
	そ の 他	23,194	22,745	448
	小 計	77,115	75,932	1,182
貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株 式	620	643	△22
	債 券	117,594	117,994	△400
	地 方 債	114,555	114,954	△398
	社 債	3,038	3,040	△1
	そ の 他	30,205	30,752	△546
小 計	148,420	149,390	△970	
合 計		225,536	225,323	212

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められるその他有価証券  
(単位: 百万円)

区 分	貸借対照表計上額
株 式	1,767
そ の 他	610
合 計	2,378

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

## 5. 当期中に売却した満期保有目的の債券

(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

該当ありません。

## 6. 当期中に売却したその他有価証券

(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

(単位: 百万円)

種 類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
株 式	161	21	5
債 券	223,785	433	1,143
国 債	187,514	28	1,143
地 方 債	4,918	157	—
社 債	31,352	247	0
そ の 他	91,126	3,047	1,410
合 計	315,074	3,503	2,559

## 7. 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

## 8. 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて30%以上下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについて、当該時価をもって貸借対照表額とするとともに、その差額を減損処理しております。

当事業年度における減損処理額は株式259百万円であります。

## ■ 金銭の信託関係

## I 2018年度

## 1. 運用目的の金銭の信託 (2019年3月31日現在)

(単位: 百万円)

	貸借対照表計上額	当事業年度の損益に含まれた評価差額
運用目的の金銭の信託	14,648	23

## 2. 満期保有目的の金銭の信託 (2019年3月31日現在)

該当ありません。

3. その他の金銭の信託 (運用目的及び満期保有目的以外)  
(2019年3月31日現在)

(単位: 百万円)

	貸借対照表計上額	取得原価	差額	うち貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	うち貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの
その他の金銭の信託	500	500	—	—	—

(注) 「うち貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

## II 2019年度

## 1. 運用目的の金銭の信託 (2020年3月31日現在)

(単位: 百万円)

	貸借対照表計上額	当事業年度の損益に含まれた評価差額
運用目的の金銭の信託	3,603	△6

## 2. 満期保有目的の金銭の信託 (2020年3月31日現在)

該当ありません。

3. その他の金銭の信託 (運用目的及び満期保有目的以外)  
(2020年3月31日現在)

(単位: 百万円)

	貸借対照表計上額	取得原価	差額	うち貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	うち貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの
その他の金銭の信託	500	500	—	—	—

(注) 「うち貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

## デリバティブ取引関係

### I 2018年度

#### 1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

- (1) 金利関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

- (2) 通貨関連取引 (2019年3月31日現在)

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益
店頭	為替予約				
	売建	41,504	—	289	289
	買建	98	—	0	0
	合計	—	—	289	289

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定  
割引現在価値により算定しております。

- (3) 株式関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

- (4) 債券関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

- (5) 商品関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

- (6) クレジットデリバティブ取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

#### 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

- (1) 金利関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

- (2) 通貨関連取引 (2019年3月31日現在)

(単位：百万円)

ヘッジ 会計の方法	種類	主 な ヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価
原則的 処理方法	資金関連スワップ	外貨建の預金	6,054	—	29
	合計		—	—	29

(注) 1. 「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2. 時価の算定  
割引現在価値により算定しております。

- (3) 株式関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

- (4) 債券関連取引 (2019年3月31日現在)  
該当ありません。

### II 2019年度

#### 1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

- (1) 金利関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

- (2) 通貨関連取引 (2020年3月31日現在)

(単位：百万円)

区分	種類	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価	評価損益
店頭	為替予約				
	売建	10,710	—	△64	△64
	買建	38	—	0	0
	合計	—	—	△63	△63

(注) 1. 上記取引については時価評価を行い、評価損益を損益計算書に計上しております。

2. 時価の算定  
割引現在価値により算定しております。

- (3) 株式関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

- (4) 債券関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

- (5) 商品関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

- (6) クレジットデリバティブ取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

#### 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

- (1) 金利関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

- (2) 通貨関連取引 (2020年3月31日現在)

(単位：百万円)

ヘッジ 会計の方法	種類	主 な ヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち 1年超のもの	時価
原則的 処理方法	資金関連スワップ	外貨建の預金	12,470	—	△105
	合計		—	—	△105

(注) 1. 「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2. 時価の算定  
割引現在価値により算定しております。

- (3) 株式関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。

- (4) 債券関連取引 (2020年3月31日現在)  
該当ありません。



## ■ 自己資本の充実の状況等

(注) 2014年金融庁告示第7号（銀行法施行規則第19条の2第1項第5号二等の規定に基づき、自己資本の充実の状況等について金融庁長官が別に定める事項）に基づいて記載しております。各項目に、その条文番号を示しております。

### ● 自己資本の構成に関する開示事項（連結）（第12条第2項）

(単位：百万円)

項 目	2019年3月31日	2020年3月31日
コア資本に係る基礎項目（1）		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	124,846	128,855
うち、資本金及び資本剰余金の額	71,242	71,231
うち、利益剰余金の額	54,701	58,625
うち、自己株式の額（△）	347	250
うち、社外流出予定額（△）	750	751
うち、上記以外に該当するものの額	—	—
コア資本に算入されるその他の包括利益累計額	△719	△899
うち、為替換算調整勘定	—	—
うち、退職給付に係るものの額	△719	△899
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	286	250
コア資本に係る調整後非支配株主持分の額	—	—
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	3,211	4,856
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	3,211	4,856
うち、適格引当金コア資本算入額	—	—
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	787	508
非支配株主持分のうち、経過措置によりコア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
コア資本に係る基礎項目の額	(イ) 128,412	133,570
コア資本に係る調整項目（2）		
無形固定資産（モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。）の額の合計額	4,257	4,921
うち、のれんに係るもの（のれん相当差額を含む。）の額	—	—
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	4,257	4,921
繰延税金資産（一時差異に係るものを除く。）の額	—	—
適格引当金不足額	—	—
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	—	—
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	—	—
退職給付に係る資産の額	479	412
自己保有普通株式等（純資産の部に計上されるものを除く。）の額	—	—
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	—	—
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	—	—
特定項目に係る十パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—	—
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産（一時差異に係るものに限る。）に関連するものの額	—	—
コア資本に係る調整項目の額	(ロ) 4,737	5,334
自己資本		
自己資本の額 ((イ) - (ロ))	(ハ) 123,675	128,236
リスク・アセット等（3）		
信用リスク・アセットの額の合計額	1,288,137	1,313,063
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	△1,070	△1,419
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	—	—
うち、上記以外に該当するものの額	△1,070	△1,419
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	—	—
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	74,437	75,132
信用リスク・アセット調整額	—	—
オペレーショナル・リスク相当額調整額	—	—
リスク・アセット等の額の合計額	(ニ) 1,362,575	1,388,195
連結自己資本比率		
連結自己資本比率 ((ハ) / (ニ))	9.07%	9.23%

# 資料編 (自己資本の充実の状況等)

## ●自己資本の構成に関する開示事項 (単体) (第10条第2項)

(単位:百万円)

項 目	2019年3月31日	2020年3月31日
コア資本に係る基礎項目 (1)		
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る株主資本の額	110,836	113,902
うち、資本金及び資本剰余金の額	69,905	69,894
うち、利益剰余金の額	42,028	45,010
うち、自己株式の額 (△)	347	250
うち、社外流出予定額 (△)	750	751
うち、上記以外に該当するものの額	—	—
普通株式又は強制転換条項付優先株式に係る新株予約権の額	286	250
コア資本に係る基礎項目の額に算入される引当金の合計額	2,397	3,988
うち、一般貸倒引当金コア資本算入額	2,397	3,988
うち、適格引当金コア資本算入額	—	—
適格旧非累積的永久優先株の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
適格旧資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
公的機関による資本の増強に関する措置を通じて発行された資本調達手段の額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	—	—
土地再評価額と再評価直前の帳簿価額の差額の四十五パーセントに相当する額のうち、コア資本に係る基礎項目の額に含まれる額	787	508
コア資本に係る基礎項目の額 (イ)	114,308	118,650
コア資本に係る調整項目 (2)		
無形固定資産 (モーゲージ・サービシング・ライツに係るものを除く。)の額の合計額	3,774	4,542
うち、のれんに係るものの額	—	—
うち、のれん及びモーゲージ・サービシング・ライツに係るもの以外の額	3,774	4,542
繰延税金資産 (一時差異に係るものを除く。)の額	—	—
適格引当金不足額	—	—
証券化取引に伴い増加した自己資本に相当する額	—	—
負債の時価評価により生じた時価評価差額であって自己資本に算入される額	—	—
前払年金費用の額	1,256	1,025
自己保有普通株式等 (純資産の部に計上されるものを除く。)の額	—	—
意図的に保有している他の金融機関等の対象資本調達手段の額	—	—
少数出資金融機関等の対象普通株式等の額	—	—
特定項目に係る十パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産 (一時差異に係るものに限る。)に関連するものの額	—	—
特定項目に係る十五パーセント基準超過額	—	—
うち、その他金融機関等の対象普通株式等に該当するものに関連するものの額	—	—
うち、モーゲージ・サービシング・ライツに係る無形固定資産に関連するものの額	—	—
うち、繰延税金資産 (一時差異に係るものに限る。)に関連するものの額	—	—
コア資本に係る調整項目の額 (ロ)	5,031	5,567
自己資本		
自己資本の額 ((イ) - (ロ)) (ハ)	109,277	113,083
リスク・アセット等 (3)		
信用リスク・アセットの額の合計額	1,248,007	1,269,182
うち、経過措置によりリスク・アセットの額に算入される額の合計額	△1,070	△1,419
うち、他の金融機関等向けエクスポージャー	—	—
うち、上記以外に該当するものの額	△1,070	△1,419
マーケット・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	—	—
オペレーショナル・リスク相当額の合計額を八パーセントで除して得た額	65,970	66,755
信用リスク・アセット調整額	—	—
オペレーショナル・リスク相当額調整額	—	—
リスク・アセット等の額の合計額 (ニ)	1,313,978	1,335,938
自己資本比率		
自己資本比率 ((ハ) / (ニ))	8.31%	8.46%

## ●連結の範囲に関する事項（第12条第3項第1号）

イ、自己資本比率告示第26条の規定により連結自己資本比率を算出する対象となる会社の集団（以下「連結グループ」という。）に属する会社と連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則（1976年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）第5条に基づき連結の範囲（以下、「会計連結範囲」という。）に含まれる会社との相違点および当該相違点の生じた原因

連結自己資本比率を算出する対象となる会社の集団に属する会社と会計連結範囲に含まれる会社に相違点はありません。

ロ、連結グループのうち、連結子会社の数ならびに主要な連結子会社の名称および主要な業務の内容

連結グループに属する連結子会社は6社です。

名称	主要な業務の内容
りゅうぎんビジネスサービス株式会社	現金精査整理業務等
株式会社りゅうぎん総合研究所	産業、経済、金融に関する調査研究業務等
株式会社りゅうぎんディーシー	クレジットカード業務等
りゅうぎん保証株式会社	信用保証業務等
株式会社OCS	クレジットカード、個別信用購入斡旋業務等
株式会社琉球リース	総合リース業務等

ハ、自己資本比率告示第32条が適用される金融業務を営む関連法人等の数ならびに当該金融業務を営む関連法人等の名称、貸借対照表の総資産の額および純資産の額ならびに主要な業務の内容

該当ありません。

二、連結グループに属する会社であって会計連結範囲に含まれないものおよび連結グループに属しない会社であって会計連結範囲に含まれるものの名称、貸借対照表の総資産の額および純資産額ならびに主要な業務の内容

該当ありません。

ホ、連結グループ内の資金および自己資本の移動に係る制限等の概要

連結グループ内の資金および自己資本の移動については、特段の制限等を設けておりませんが、グループ内の会社において法令等に基づく適切な自己資本が確保されるよう留意することはもちろん、業務の健全かつ適切な運営を損なうものとならぬよう、また支払能力、流動性、収益性に悪影響をおよぼさないよう、適切性について十分考慮した上で行ってまいります。

## ●自己資本調達手段（その額の全部または一部が、自己資本比率告示第25条もしくは第37条の算式におけるコア資本に係る基礎項目の額に含まれる資本調達手段をいう。）の概要（第10条第3項第1号、第12条第3項第2号）

連結、単体ともに以下の通りです。  
自己資本調達手段（2020年3月31日）

自己資本調達手段	概要
普通株式（43百万株）	完全議決権株式 ・コア資本に係る基礎項目の額に算入された額：56,967百万円

## ●自己資本の充実度に関する評価方法の概要（第10条第3項第2号、第12条第3項第3号）

当行では自己資本の充実度に関する評価基準として、次の基準を採用しております。

- ・自己資本比率
- ・自己資本に対する繰延税金資産の割合
- ・オペレーショナルリスクに対する所要自己資本の額
- ・早期警戒制度の枠組みにおける「金利リスク」量および「信用集中リスク」量

また、自己資本と信用リスク・市場関連リスク・オペレーショナルリスク等の銀行業務で必要とされる所要リスク量を対比し、自己資本の充実度の評価を行っております。

連結子会社につきましては、グループ全体の経営効率化や収益力の強化ならびに信用リスク等の管理を目的とした「りゅうぎんグループ統括要綱」に基づき、適正な業務運営に努めております。

特に従属業務以外を営む連結子会社につきましては、定期的に財務・収益状況等の報告を求め分析し、当該子会社の状況および課題を踏まえた上で、自己資本の充実度が同業界平均等に比較して適正なものとなっているか検討・評価しております。

## ●信用リスクに関する事項（第10条第3項第3号、第12条第3項第4号）

イ、リスク管理の方針および手続きの概要

当行の信用リスク管理態勢は、営業部門から独立し与信判断を行い、貸出金等の与信から生ずる信用リスクを管理する審査部、市場部門の信用リスクテイクや信用リスク管理を行う証券国際部、与信監査部門として資産の自己査定を監査するリスク統括部の相互牽制態勢から成っております。

信用リスクのうち集中リスクについては、取締役会の定めた「融資運用方針」や「信用リスク管理方針」により特定の業種・企業・グループへの与信の集中を排除しており、融資運用方針の遵守状況を定期的に取締役会が確認しております。

融資などから生ずる信用リスクの全体的な把握については、信用格付ごとの倒産確率や債権ごとの保全状況に応じた信用リスクを計量化し、リスクの分布状況を把握・分析しております。

市場取引にかかる信用リスク管理は、おもに公正な第三者機関である外部格付機関の評価を用い、格付ランクに応じた取引限度額を設定・遵守することでリスク管理を徹底しております。

連結子会社につきましては、各社の内部規程に従い信用リスクを管理しております。また、半期に一度各社の自己資産査定の内容を監査し、過度な信用リスクテイクや信用リスクが顕在化していないか確認を行っております。

（貸倒引当金の計上基準）

当行の与信関連資産の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破綻先（注1）および実質破綻先（注2）の債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収見込額を控除した残額（注3）について、個別貸倒引当金を計上するか、もしくは部分直接償却（注4）を実施しております。

破綻懸念先（注5）の債権については、債権額から、担保の処分可能見込額および保証による回収可能見込額を控除した残額のうち、損失の発生が見込まれる額について個別貸倒引当金を計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき一般貸倒引当金を計上しております。

なお、すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業店および本部営業関連部門において一次査定を実施し、本部貸出承認部門において二次査定を実施した上で、営業関連部門から独立した資産監査部門が査定結果の適切性を検証した後、上記の引当を行っております。

連結子会社の貸倒引当金は、過去の貸倒実績率や個別の回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ引き当てております。

（注）1. 破綻先とは、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者をいい、具体的には、破産、会社更生、民事再生、手形交換所の取引停止処分等の事由により経営破綻に陥っている債務者をいいます。

2. 実質破綻先とは、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者と同等の状況にある債務者をいいます。

3. 以下については、個別貸倒引当金を計上しており、それ以外は部分直接償却を実施しております。

・担保の評価額と処分可能見込額との差額に相当する残額

・会社更生法、民事再生法等の規定による更生手続申立先に対する債権額から、担保の処分可能見込額および保証等による回収見込額を控除した残額

・貸付有価証券、外国為替、支払承諾見返の債権額から、担保の処分可能見込額および保証等による回収見込額を控除した残額

4. 部分直接償却とは、貸倒償却として債権額を帳簿価額から直接減額することをいい、その金額は2,725百万円であります。

5. 破綻懸念先とは、現在は経営破綻の状態にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者をいいます。

ロ、リスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称およびエクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関等の名称

リスク・ウェイトの判定においては、内部管理との整合性を考慮し、また、特定の格付機関に偏らず、格付の客観性を高めるためにも複数の格付機関等を利用することが適正との判断に基づき、R&B社、JCR社、Moody's社、S&P社の4社の格付機関を採用しております。なお、エクスポージャーの種類ごとに格付機関の使い分けは行っておりません。

## ●信用リスク削減手法に関するリスク管理の方針および手続きの概要（第10条第3項第4号、第12条第3項第5号）

（信用リスク削減手法とは）

当行では信用リスクを削減するために、融資や市場取引に際しては、主に不動産・国債等債券・株式・預金等の担保、信用保証協会・保証会社・第三者保証人等による保証、担保に徴求していない預金との相殺等で信用リスクを削減しております。

連結子会社においては、カード関連事業や小口の消費者向けローンなどの小口分散効果により信用リスクが削減されている融資・保証業務は無担保で取扱っておりますが、住宅ローンや比較的金額の大きな消費性資金等は資金使途に応じた適切な担保を徴求しております。

金融庁告示第19号に基づく自己資本比率算出上は、信用リスク削減手法として包括的手法を採用しており、適格金融資産担保として預金ならびに国債を、外部格付を有する保証会社の保証や国・地方公共団体による保証などを信用リスク削減手法として採用しております。

連結子会社においても同様に算出しております。

（方針および手続き）

当行では、担保の管理において不動産、国債等債券、株式、預金等それぞれについて業務規程に則り、評価および管理しております。担保は、業務規程に則り担保に適切な掛目を乗じた上で担保評価しており、規程に基づき定期的に評価の見直しを図っております。また、担保評価の掛目についても、規程に基づき定期的にその適切性を検証しております。

保証により保全されている融資等は、国・地方公共団体の保証や政府関係機関による保証、保証協会保証等については日本国政府と同様の信用力評価としております。その他の保証会社については、規程に基づき保証会社の財務情報や定性情報により保証能力を判定の上、リスク削減手法として採用しております。

融資等と自行預金の相殺にあたっては、債務者の担保（総合口座含む）登録のない定期預金を対象としております。

連結子会社においても、それぞれの規程に則り担保を管理しており、信用リスクの削減に努めております。

（信用リスク削減手法の適用に伴う信用リスクの集中）

当行ならびに連結子会社において、信用リスク削減手法の提供者が特定先に集中することや適格金融資産担保が同一銘柄に集中することはありません。



## ●派生商品取引および長期決済期間取引の取引相手のリスクに関するリスク管理の方針および手続きの概要 (第10条第3項第5号、第12条第3項第6号)

当行は派生商品取引として、主に外貨調達目的で為替スワップを行っております。  
 為替スワップ取引についてはCSA契約に基づき相手方へ担保差入を行っており、当行の信用状態が悪化した場合、取引を中止して差入担保と当行への与信相当額が相殺される可能性があります。  
 また差入担保に関しては、差入先の信用リスクを算出し与信相当額を自己資本比率計算に算入しております。なお、当行では派生商品取引に係る保全や引当の算出は行っていません。  
 長期決済期間取引については、該当ありません。  
 連結子会社については、該当ありません。

## ●証券化エクスポージャーに関する事項 (第10条第3項第6号、第12条第3項第7号)

- イ. リスク管理の方針およびリスク特性の概要  
 オリジネーターとしての証券化取引  
 該当ありません。  
 投資家としての証券化取引  
 (取引の内容)  
 当行は、住宅ローン債権を裏付けとした証券化商品への投資を行っております。  
 (取引に対する取組方針)  
 再証券化商品への投資の予定はありません。  
 (取引に係るリスクの内容)  
 当行が投資家として保有する証券化商品は信用リスクおよび金利リスクを有しておりますが、これらは貸出金や有価証券等の取引により発生するものと基本的に変わるものではありません。  
 (取引に係るリスク管理体制)  
 当行が投資家として行う証券化取引については、他の有価証券等と同じ枠組みの中でリスク管理を行っております。また、それぞれの実績については事後的モニタリングを実施しております。
- ロ. 証券化取引における格付の利用に関する基準に規定されている体制の整備およびその運用状況の概要  
 当行は、外部格付の利用に係るモニタリング体制を「証券化商品のモニタリングマニュアル」に定め、包括的なリスク特性に係る情報や、裏付資産について包括的なリスク特性およびパフォーマンスに係る情報および証券化取引の構造上の特性等について、受託者である信託銀行からの月次報告書によりモニタリングを実施しております。
- ハ. 信用リスク削減手法として証券化取引を用いる場合の方針  
 信用リスク削減手法として証券化取引を用いる予定はありません。
- 二. 証券化エクスポージャーの信用リスク・アセットの額の算出に使用する方式の名称  
 当行では証券化エクスポージャーの信用リスク・アセット額の算出には、金融庁告示第19号「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適切であるかどうかを判断するための基準」に定める「外部格付準拠方式」を採用しております。
- ホ. 証券化エクスポージャーのマーケット・リスク相当額の算出に使用する方式の名称  
 該当ありません。
- ヘ. 銀行が証券化目的導管体を用いて第三者の資産に係る証券化取引を行った場合には、当該証券化目的導管体の種類および当該銀行が当該証券化取引に係る証券化エクスポージャーを保有しているかどうかの別  
 該当ありません。

- ト. 銀行の子法人等 (連結子法人等を除く。) および関連法人等のうち、当該銀行が行った証券化取引 (銀行が証券化目的導管体を用いて行った証券化取引を含む。) に係る証券化エクスポージャーを保有しているものの名称  
 該当ありません。
- チ. 証券化取引に関する会計方針  
 (会計方針)  
 証券化取引の会計上の処理につきましては、金融資産の契約上の権利に対する支配が他に移転したことにより金融資産の消滅を認識する売却処理を採用しております。  
 (資産売却の認識)  
 証券化取引における資産の売却は、証券化取引の委託者である当行が、アレンジャーに優先受益権を売却した時点で認識しております。
- リ. 証券化エクスポージャーの種類ごとのリスク・ウェイトの判定に使用する適格格付機関の名称  
 証券化エクスポージャーのリスク・ウェイトの判断については、R&I社、JCR社、Moody's社、S&P社の4社の格付機関を採用しており、エクスポージャーの種類による格付機関の使い分けは行っていません。  
 連結子会社につきましては、該当ありません。

## ●オペレーショナル・リスクに関する事項 (第10条第3項第8号、第12条第3項第9号)

- イ. リスク管理の方針および手続きの概要  
 オペレーショナル・リスクとは、銀行の業務の過程、役職員 (パートタイム、派遣社員等を含む) の活動、もしくはシステムが不適切であることまたは外的な事象により、当行が損失を被るリスクをいいます。  
 当行ではオペレーショナル・リスクを①事務リスク、②システムリスク、③法務リスク、④風評リスク、⑤有形資産リスク、⑥人的リスクとして捉え、リスク統括部を統括部署とした上で、リスクごとに所管部を設置し各種リスクを専門的な立場から管理しております。  
 なお、①～⑥以外のリスクが発生した場合には、リスクの内容を考慮し、リスク統括部および関係部が協議の上、担当部を定めることとしております。  
 具体的には、「コンプライアンス委員会 (四半期毎)」、「品質向上委員会 (毎月)」等でリスク情報を収集・分析し、再発防止策等の検証を行っております。  
 連結子会社においては、重大な事務事故や不祥事件の発生およびその他、当行を含む連結子会社各社の営業等に影響をおよぼす重要事項等については、速やかに連結子会社統括部署へ報告し、事故・事件等への対応やその再発防止策について協議・実施することとしております。また、連結子会社のコンプライアンス管理状況については、当行のリスク統括部コンプライアンス室が四半期ごとにコンプライアンス勉強会やコンプライアンス・チェック等の実施内容を検証することで遵守状況を管理しております。
- ロ. オペレーショナル・リスク相当額の算出に使用する手法の名称  
 自己資本比率規制上のオペレーショナル・リスク相当額の算出にあたっては、金融庁告示第19号「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適切であるかどうかを判断するための基準」に定める「基礎的手法」を採用しております。

## ●出資等または株式等エクスポージャーに関するリスク管理の方針および手続きの概要 (第10条第3項第9号、第12条第3項第10号)

当行では、「市場取引において資産・負債の健全かつ効率的な運用・調達を図り、市場リスクを当行として許容される範囲内に管理しながら、安定的な収益確保を目指すことを目的とする」という市場関連リスク管理方針に則り、株式等のリスクを管理しております。  
 投資金額については、経済環境から先行きの金利や株式相場の見通しに基づく、期待収益と他商品 (債券・投信等) のリスク・リターンを考慮した市場部門全体における分散投資の観点と銀行全体の資金動向を検討し、投資限度額を常務会にて決定し、取締役会へ報告しております。  
 株式は時価のあるものについては、時価評価額をモニタリングし、純投資株式については1銘柄の投資限度額、ロスカット基準を設け、過度なリスクを取らないようにしております。  
 政策投資株式については、ロスカットルールは設けておりませんが、時価評価により会計原則に則り決算時に適正に減損処理を実施しております。  
 子会社・子法人等株式の評価につきましては、移動平均法による原価法、時価のあるものにつきましては決算日の市場価格等に基づく時価法 (売却原価は移動平均法により算定)、時価のないものにつきましては、移動平均法による原価法または償却原価法により評価しております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。  
 また、子会社、子法人等が新たに株式を取得または処分する際には当行に対し事前承認・調整することとしており、その評価につきましても上記の当行方針および手続に準じたリスク管理方法となっており、当行グループ全体の適正なリスク管理に努めております。  
 株式等について、会計方針を変更した場合は財務諸表等規則第8条の3に基づき、変更の理由や影響額について財務諸表の注記に記載しております。



## ●金利リスクに関する事項（第10条第3項第10号、第12条第3項第11号）

### イ. リスク管理の方針および手続きの概要

当行は、資産・負債の健全かつ効率的な運用・調達を図り、市場リスクを当行として許容される範囲内に管理しながら、安定的な収益確保を目指すことを基本方針としております。

具体的には、銀行全体の収益機会を捉えるため、能動的に一定のリスク・テイクを行っておりますが、市場部門の経営上の位置付け、自己資本、収益力、リスク管理能力を勘案し、市場関連リスクについて限度枠等の設定を行い金利リスクのコントロールを行っております。また、過大なリスク・テイクを防止するため、市場関連リスク管理部門による相互牽制機能の向上に努めております。

市場リスクを適切にコントロールするため、金利リスクを含めた市場リスクに対してリスク資本が配賦されており、半期毎に取締役会で決定した資本配賦額をリスクリミットとし、市場リスク量や損失額を一定の範囲内に抑える管理運営を行っております。また、市場リスク管理部門のリスク統括部では、リスクリミットの遵守状況についてモニタリングを実施し、ALM委員会等で報告しております。

金利リスクの管理対象としては、すべての金利感応資産ならびに負債、およびオフバランス取引とし、預貸金取引は月次、市場性取引は日次でリスク量を計測しております。これらの金利リスクの計測については、 $\Delta$ EVE（金利変動に伴う経済価値の変化量）、VaR（バリュアット・リスク）、BPV（ベース・ポイント・バリュアット）といった金利リスク指標を用いております。金利リスクを削減する際は、資産の売却・ヘッジ等の対応策を協議し対応する体制とし、市場取引運用基準等においてヘッジ取引の取り組み方針等を定めております。

なお、連結子会社については、連結子会社と当行単体の資産ないしは負債ないしはオフバランスの残高を比較し、連結子会社の当該計数の合算値が当行単体の5%以下となることから、影響は軽微であるため金利リスクの計量は行っておりません。

上記から、金利リスクに関する事項については当行単体の管理方法および金利リスクによる経済価値の増減額となります。

### ロ. 金利リスクの算定手法の概要

（銀行勘定の金利リスクに関する事項：IRBBB）

流動性預金に割り当てられた金利改定の平均満期は1.65年程度、最長の金利改定満期は10年としております。

満期のない流動性預金（当座預金、普通預金、決済用預金などの円貨の要求払預金）については、コア預金内部モデルを使用して、過去の流動性預金残高推移を市場金利や顧客属性等を考慮して統計的に解析し、将来預金残高を保守的に推計することで実質的な満期を割り当てております。また、固定金利貸出の期限前償還や定期預金の早期解約については、当局が定める保守的な前提の反映により考慮しております。

複数通貨の取り扱いについては、通貨毎に算出した金利リスクが正となる通貨を単純合算しており、異通貨間の金利の相関は考慮しておりません。また、金利リスク量の算出にあたっては、割引金利の金利ショック幅をリスクフリーレートと同一と見做しており、割引金利間の相関やスプレッド及びその変動は考慮しておりません。

前事業年度末よりコア預金内部モデルを使用しております。コア預金内部モデルのパラメーター値の見直しなどにより金利リスクの計測結果に大きな影響を与える場合があります。

ファンド等については可能な限りファンドの裏付け資産を通貨毎に分類し、重要性に応じて適切に金利リスクを計測し、保守的に合算しております。 $\Delta$ EVEは基準値である自己資本の額の20%以内に収まっており、金利リスク管理上問題のない水準と認識しております。

（内部管理上使用しているその他の金利リスクに関する事項）

統合リスク管理では、市場リスク量の統一的な尺度としてVaR（バリュアット・リスク）によるリスク量計測を基本とし、信用リスクやその他のリスクを含めて、リスク配賦資本の範囲内でリスクテイクを行うよう管理運営しております。

VaRによる金利リスク量計測については、観測期間5年、信頼区間99%、保有期間は預貸金等250日、債券90日として、業務別に分散共分散法により計測しております。当該リスク量は金利とその他変数との相関は考慮しておりません。

また、自己資本の充実度や期間損益への影響等を検証するため、急激な金融情勢の変化等のストレス事象を想定したストレステストを定期的の実施し、市場リスクのモニタリング強化やリスク管理の高度化に努めております。

# 資料編 (自己資本の充実の状況等)

- その他金融機関等（自己資本比率告示第29条第6項第1号に規定するその他金融機関等をいう。）であって銀行の子法人等であるもののうち、自己資本比率規制上の所要自己資本を下回った会社の名称と所要自己資本を下回った額の総額（第12条第4項第1号）  
その他金融機関等であって銀行の子法人等であるもののうち、自己資本比率規制上の所要自己資本を下回った会社はありません。
- 自己資本の充実度に関する事項（第12条第4項第2号）  
 イ. 信用リスクに対する所要自己資本の額およびこのうち次に掲げるポートフォリオごとの内訳  
 所要自己資本の額（連結）

(単位：百万円)

項 目		2019年3月31日	2020年3月31日
信用リスク (オン・バランス)	1. 現金	—	—
	2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	—	—
	3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	399	170
	4. 国際決済銀行等向け	—	—
	5. 我が国の地方公共団体向け	—	—
	6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	—	20
	7. 国際開発銀行向け	—	—
	8. 地方公共団体金融機構向け	6	3
	9. 我が国の政府関係機関向け	94	46
	10. 地方三公社向け	112	68
	11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	414	322
	12. 法人等向け	13,578	13,363
	13. 中小企業等向け及び個人向け	12,479	12,780
	14. 抵当権付住宅ローン	4,461	4,668
	15. 不動産取得等事業向け	15,497	16,786
	16. 三ヶ月以上延滞等	361	311
	17. 取立未済手形	—	—
	18. 信用保証協会等による保証付	117	126
	19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	—	—
	20. 出資等	147	140
	21. 上記以外	3,027	3,264
	22. 証券化 (うちSTC要件適用分) (うち非STC要件適用分)	0 — 0	0 — 0
	23. リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャー ルック・スルー方式 マンデート方式 蓋然性方式 (250%) 蓋然性方式 (400%) フォールバック方式 (1250%)	425 425 — — — —	63 63 — — — —
	24. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	140	112
	25. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額 (△)	67	53
オン・バランス合計	51,196	52,197	
信用リスク (オフ・バランス)	1. 任意の時期に無条件で取消可能又は自動的に取消可能なコミットメント	—	—
	2. 原契約期間が1年以下のコミットメント	3	—
	3. 短期の貿易関連偶発債務	0	0
	4. 特定の取引に係る偶発債務 (うち経過措置を適用する元本補てん信託契約)	91	146
	5. N I F 又は R U F	—	—
	6. 原契約期間が1年超のコミットメント	49	77
	7. 内部格付手法におけるコミットメント	—	—
	8. 信用供与に直接的に代替する偶発債務 (うち借入金の保証) (うち有価証券の保証) (うち手形引受) (うち経過措置を適用しない元本補てん信託契約) (うちクレジット・デリバティブのプロテクション提供)	80 80 — — —	65 65 — — —
	9. 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等 (控除後) 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等 (控除前) 控除額 (△)	— — —	— — —
	10. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	41	—
	11. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	44	34
	12. 派生商品取引 (1) 外為関連取引 (2) 金利関連取引 (3) 金関連取引 (4) 株式関連取引 (5) 貴金属 (金を除く) 関連取引 (6) その他のコモディティ関連取引 (7) クレジット・デリバティブ取引 (カウンター・パーティー・リスク) 一括清算ネットリング契約による与信相当額削減効果 (△)	6 4 0 — 0 — — — —	0 0 — — — — — — —
	13. 長期決済期間取引	—	—
	14. 未決済取引	—	—
	15. 証券化エクスポージャーに係る適格なサービサー・キャッシュ・アドバンスの信用供与 枠のうち未実行部分	—	—
	16. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	—	—
オフ・バランス合計	317	324	
CVAリスク相当額	9	0	
中央清算機関関連エクスポージャー	2	0	
信用リスクに対する所要自己資本の額	51,525	52,522	
オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額	2,977	3,005	
信用リスク及びオペレーショナル・リスクに対する総所要自己資本の額	54,503	55,527	

(注) 1. 信用リスクに対する所要自己資本の額は標準的手法によって算出しております。また、適格金融資産担保の信用リスク削減効果の勘案においては包括的手法を使用しております。  
 2. 信用リスクに対する所要自己資本の額における、リスク・ウェイト区分の判定には内部管理との整合性を考慮し、エクスポージャーの種類に関わらず以下の適格格付機関が付与した格付を共通して使用しております。  
株式会社格付投資情報センター (R&I)、株式会社日本格付研究所 (JCR)、ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク (Moody's)、S&Pグローバル・レーティング (S&P)  
 3. 信用リスクに対する所要自己資本の額は、信用リスク削減効果を考慮する前の債務者の区分にて記載しております。  
 4. オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額は基礎的手法によって算出しております。  
 5. CVAリスク相当額は簡便的手法によって算出しております。

## ●信用リスクに関する次に掲げる事項（連結）（第12条第4項第3号）

- イ、信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高およびエクスポージャーの主な種類別の内訳  
 ロ、信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高のうち、区分ごとの額およびそれらのエクスポージャーの主な種類別の内訳  
 ハ、三ヶ月以上延滞エクスポージャーの期末残高またはデフォルトしたエクスポージャーの期末残高および区分ごとの内訳

(単位：百万円)

	2019年3月31日				
	信用リスクエクスポージャー期末残高	貸出金、コミットメント及び その他のデリバティブ以外 のオフ・バランス取引	債 券	デリバティブ取引	三ヶ月以上延滞 エクスポージャー
製造業	33,616	30,627	600	—	113
農業、林業	6,048	5,773	—	—	97
漁業	487	482	—	—	1
鉱業、採石業、砂利採取業	3,679	3,306	19	—	—
建設業	70,167	63,723	300	—	166
電気・ガス・熱供給・水道業	6,854	6,802	—	—	8
情報通信業	5,604	4,339	0	—	6
運輸業、郵便業	44,369	34,074	6,713	—	51
卸売業、小売業	91,618	85,863	138	—	152
金融業、保険業	204,107	114,181	77,029	1	18
不動産業	519,980	518,298	28	—	1,671
その他のサービス	251,306	212,011	220	—	612
国、地方公共団体	503,718	137,114	147,065	89	—
個人	582,847	560,292	—	0	5,181
その他	101,572	0	—	—	2
合計	2,425,981	1,776,892	232,115	91	8,085
国内計	2,328,844	1,774,249	138,212	91	8,085
国外計	97,137	2,643	93,903	—	—
合計	2,425,981	1,776,892	232,115	91	8,085
1年以下	394,925	316,995	57,440	91	3,367
1年超3年以下	194,570	90,060	87,313	—	265
3年超5年以下	131,498	93,034	18,052	—	205
5年超7年以下	94,158	70,519	16,681	—	314
7年超10年以下	168,225	129,184	36,465	—	604
10年超	1,093,946	1,076,292	16,015	—	3,032
期間の定めのないもの	348,656	803	147	—	294
合計	2,425,981	1,776,892	232,115	91	8,085

(単位：百万円)

	2020年3月31日				
	信用リスクエクスポージャー期末残高	貸出金、コミットメント及び その他のデリバティブ以外 のオフ・バランス取引	債 券	デリバティブ取引	三ヶ月以上延滞 エクスポージャー
製造業	31,205	28,294	656	—	95
農業、林業	6,673	6,367	—	—	85
漁業	478	476	—	—	25
鉱業、採石業、砂利採取業	4,603	4,347	19	—	—
建設業	74,710	66,513	1,307	—	110
電気・ガス・熱供給・水道業	5,797	5,760	—	—	—
情報通信業	5,889	4,090	150	—	—
運輸業、郵便業	27,555	22,958	799	—	10
卸売業、小売業	84,694	78,111	514	—	261
金融業、保険業	92,587	54,556	27,983	0	17
不動産業	554,567	551,900	823	—	1,094
その他のサービス	242,450	217,147	1,374	—	621
国、地方公共団体	611,993	139,904	205,387	125	—
個人	594,571	572,217	—	—	5,132
その他	115,641	0	7,819	—	1
合計	2,453,422	1,752,646	246,836	126	7,455
国内計	2,408,753	1,752,646	203,517	126	7,455
国外計	44,668	—	43,319	—	—
合計	2,453,422	1,752,646	246,836	126	7,455
1年以下	339,982	282,203	38,210	126	3,446
1年超3年以下	169,122	85,158	68,157	—	204
3年超5年以下	115,781	79,545	16,304	—	220
5年超7年以下	107,307	70,215	28,938	—	196
7年超10年以下	211,855	123,047	86,931	—	330
10年超	1,120,658	1,111,810	8,150	—	2,790
期間の定めのないもの	388,714	664	144	—	265
合計	2,453,422	1,752,646	246,836	126	7,455

(注) 1. オフ・バランス取引はデリバティブ取引を除いております。

2. 「三ヶ月以上延滞エクスポージャー」とは、元本または利息の支払が約定日の翌日から三ヶ月以上延滞しているエクスポージャーまたは引当金勘案前でリスク・ウェイトが150%であるエクスポージャーをいいます。

3. ファンドの構成資産につきましては、業種別の区分を行わず他に記載しております。

# 資料編 (自己資本の充実の状況等)

## 二. 一般貸倒引当金、個別貸倒引当金および特定海外債権引当金定の期末残高および期中の増減額

(単位：百万円)

	2018年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
一般貸倒引当金	2,555	3,211	2,555	3,211
個別貸倒引当金	6,113	1,029	1,645	5,497
特定海外債権引当金	—	—	—	—
合計	8,669	4,240	4,201	8,708

(単位：百万円)

	2019年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
一般貸倒引当金	3,211	4,856	3,211	4,856
個別貸倒引当金	5,497	990	2,094	4,392
特定海外債権引当金	—	—	—	—
合計	8,708	5,846	5,306	9,248

(個別貸倒引当金の業種別・地域別内訳)

(単位：百万円)

	2018年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
製造業	75	2	40	37
農業、林業	0	47	0	48
漁業	—	—	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	0	—	0	—
建設業	50	1	25	27
電気・ガス・熱供給・水道業	—	2	—	2
情報通信業	6	0	—	7
運輸業、郵便業	54	52	1	105
卸売業、小売業	59	7	38	28
金融業、保険業	1,671	17	552	1,136
不動産業	147	4	76	74
その他のサービス	2,217	209	289	2,136
国、地方公共団体	—	—	—	—
個人	1,827	682	620	1,889
その他	1	0	—	2
合計	6,113	1,029	1,645	5,497
国内計	6,113	1,029	1,645	5,497
国外計	—	—	—	—

(単位：百万円)

	2019年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
製造業	37	3	14	27
農業、林業	48	4	47	4
漁業	—	0	—	0
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—	—	—
建設業	27	0	10	17
電気・ガス・熱供給・水道業	2	—	2	—
情報通信業	7	2	0	10
運輸業、郵便業	105	73	5	172
卸売業、小売業	28	10	22	16
金融業、保険業	1,136	—	1,130	6
不動産業	74	12	29	57
その他のサービス	2,136	199	275	2,060
国、地方公共団体	—	—	—	—
個人	1,889	682	556	2,015
その他	2	0	—	2
合計	5,497	990	2,094	4,392
国内計	5,497	990	2,094	4,392
国外計	—	—	—	—



## ホ、貸出金償却額の業種別・地域別内訳

(単位：百万円)

	2018年度	2019年度
製造業	81	13
農業、林業	35	215
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—
建設業	507	475
電気・ガス・熱供給・水道業	5	1
情報通信業	215	83
運輸業、郵便業	95	133
卸売業、小売業	169	194
金融業、保険業	—	—
不動産業	227	182
その他のサービス	755	691
国、地方公共団体	—	—
個人	720	1,113
その他	—	—
合計	2,814	3,104
国内計	2,814	3,104
国外計	—	—

(注) 貸出金償却額には部分直接償却を含んでおります。

## ヘ、リスク・ウェイトの区分ごとのエクスポージャー

(単位：百万円)

	2019年3月31日			
	格付あり		格付なし	
	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後
0%	—	—	566,874	566,874
2%	—	—	2,912	2,912
4%	—	—	—	—
10%	—	—	54,563	54,563
20%	6,325	6,325	114,118	114,030
35%	—	—	318,705	318,705
50%	7,247	7,247	14,439	13,438
75%	—	—	415,665	415,338
100%	60	—	804,918	801,487
150%	66	62	6,051	5,771
250%	—	—	1,745	1,745
350%	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—
合計	13,700	13,634	2,299,994	2,294,868

(単位：百万円)

	2020年3月31日			
	格付あり		格付なし	
	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後
0%	—	—	689,181	689,181
2%	—	—	269	269
4%	—	—	—	—
10%	—	—	44,243	44,243
20%	6,237	6,237	52,910	52,909
35%	—	—	333,484	333,484
50%	5,424	5,424	10,464	9,277
75%	—	—	425,784	425,599
100%	57	—	835,804	833,428
150%	8	7	5,152	4,862
250%	—	—	3,740	3,740
350%	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—
合計	11,727	11,669	2,401,035	2,396,998

(注) 1. 「格付あり」欄には、適格格付機関による債務者自身および銘柄別の格付があるものを記載しており、保証人の格付およびソブリン準拠による格付のみの場合は「格付なし」欄に記載しております。

2. ファンドにつきましては、「格付なし」欄に記載しております。

# 資料編 (自己資本の充実の状況等)

●信用リスク削減手法に関する事項 (連結) (第12条第4項第4号)  
イ・ロ、信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャー

(単位:百万円)

	2019年3月31日	
	格付あり	格付なし
現金及び自行預金	—	28,934
金	—	—
適格債券	—	—
適格株式	—	—
適格投資信託	—	—
適格金融資産担保 計	—	28,934
適格保証	3,819	62,103
適格クレジット・デリバティブ	—	—
適格保証、クレジット・デリバティブ 計	3,819	62,103
上記 計	3,819	91,038

(単位:百万円)

	2020年3月31日	
	格付あり	格付なし
現金及び自行預金	—	10,222
金	—	—
適格債券	—	—
適格株式	—	—
適格投資信託	—	—
適格金融資産担保 計	—	10,222
適格保証	6,671	7,506
適格クレジット・デリバティブ	—	—
適格保証、クレジット・デリバティブ 計	6,671	7,506
上記 計	6,671	17,729

(注) 「格付あり」欄には、適格格付機関による債務者自身および銘柄別の格付があるものを記載しており、保証人の格付およびツプリン準拠による格付のみ場合は「格付なし」欄に記載しております。

●出資等または株式等エクスポージャーに関する事項 (連結) (第12条第4項第8号)

イ、連結貸借対照表計上額、時価および次に掲げる事項に係る連結貸借対照表計上額  
出資等エクスポージャーの連結貸借対照表計上額等

(単位:百万円)

	2019年3月31日	
	連結貸借対照表計上額	時価
上場している出資等または株式等エクスポージャーの連結貸借対照表計上額	1,554	
上場に該当しない出資等または株式等エクスポージャーの連結貸借対照表計上額	2,519	
合計	4,074	

(単位:百万円)

	2020年3月31日	
	連結貸借対照表計上額	時価
上場している出資等または株式等エクスポージャーの連結貸借対照表計上額	1,213	
上場に該当しない出資等または株式等エクスポージャーの連結貸借対照表計上額	2,622	
合計	3,836	

子会社・関連会社株式の連結貸借対照表計上額等  
該当ありません。

ロ、出資等または株式等エクスポージャーの売却および償却に伴う損益の額  
出資等または株式等エクスポージャー

(単位:百万円)

	2018年度	2019年度
売却損益額	298	△1,081
償却額	130	260

ハ、連結貸借対照表で認識され、かつ、連結損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位:百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
連結貸借対照表で認識され、かつ、連結損益計算書で認識されない評価損益の額	429	347

ニ、連結貸借対照表および連結損益計算書で認識されない評価損益の額  
該当ありません。

●リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャーの額 (連結) (第12条第4項第9号)

(単位:百万円)

計算方式	2019年3月31日	2020年3月31日
ルック・スルー方式	37,946	8,364
マンドート方式	—	—
蓋然性方式 (250%)	—	—
蓋然性方式 (400%)	—	—
フォールバック方式 (1250%)	—	—
合計	37,946	8,364

(注) リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャーの額を記載しております。

●金利リスクに関する事項 (第12条第4項第10号)

IRRBB1: 金利リスク

(単位:百万円)

項番		イ		ロ		ハ		ニ	
		△EVE		△NII					
		前期末	当期末	前期末	当期末	前期末	当期末	前期末	当期末
1	上方パラレルシフト	6,768	3,320					4,538	
2	下方パラレルシフト	19,470	6,859					0	
3	スティープ化	2,294	1,378						
4	フラット化								
5	短期金利上昇								
6	短期金利低下								
7	最大値	19,470	6,859					4,538	
		ホ		へ					
		前期末		当期末					
8	自己資本の額	123,675		128,236					

(注) 自己資本の額以外の数値については、連結で計測を行っていないため、単体の数値を記載しております。

## ●自己資本の充実に関する事項（第10条第4項第1号）

イ. 信用リスクに対する所要自己資本の額およびこのうちに掲げるポートフォリオごとの内訳  
所要自己資本の額（単体）

(単位：百万円)

項 目	2019年3月31日	2020年3月31日
1. 現金	—	—
2. 我が国の中央政府及び中央銀行向け	—	—
3. 外国の中央政府及び中央銀行向け	399	170
4. 国際決済銀行等向け	—	—
5. 我が国の地方公共団体向け	—	—
6. 外国の中央政府等以外の公共部門向け	—	20
7. 国際開発銀行向け	—	—
8. 地方公共団体金融機構向け	6	3
9. 我が国の政府関係機関向け	94	46
10. 地方三公社向け	112	68
11. 金融機関及び第一種金融商品取引業者向け	406	318
12. 法人等向け	13,064	12,805
13. 中小企業等向け及び個人向け	11,497	11,768
14. 抵当権付住宅ローン	4,461	4,668
15. 不動産取得等事業向け	15,497	16,786
16. 三ヶ月以上延滞等	324	275
17. 取立未済手形	—	—
18. 信用保証協会等による保証付	117	126
19. 株式会社地域経済活性化支援機構等による保証付	—	—
20. 出資等	265	259
21. 上記以外	2,842	2,999
22. 証券化	0	0
（うちSTC要件適用分）	—	—
（うち非STC要件適用分）	0	0
23. リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャー	425	63
ルック・スルー方式	425	63
マンドート方式	—	—
蓋然性方式（250%）	—	—
蓋然性方式（400%）	—	—
フォールバック方式（1250%）	—	—
24. 経過措置によりリスク・アセットの額に算入されるものの額	140	112
25. 他の金融機関等の対象資本調達手段に係るエクスポージャーに係る経過措置によりリスク・アセットの額に算入されなかったものの額 (△)	67	53
信用リスク (オン・バランス)	49,589	50,439
1. 任意の時期に無条件で取消可能又は自動的に取消可能なコミットメント	—	—
2. 原契約期間が1年以下のコミットメント	3	—
3. 短期の貿易関連偶発債務	0	0
4. 特定の取引に係る偶発債務 (うち経過措置を適用する元本補てん信託契約)	95	150
5. N I F又はR U F	—	—
6. 原契約期間が1年超のコミットメント	49	77
7. 内部格付手法におけるコミットメント	—	—
8. 信用供与に直接的に代替する偶発債務 (うち借入金の保証) (うち有価証券の保証) (うち手形引受) (うち経過措置を適用しない元本補てん信託契約) (うちクレジット・デリバティブのプロテクション提供)	78	64
9. 買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等 (控除後) (買戻条件付資産売却又は求償権付資産売却等 (控除前) 控除額 (△))	—	—
10. 先物購入、先渡預金、部分払込株式又は部分払込債券	41	—
11. 有価証券の貸付、現金若しくは有価証券による担保の提供又は有価証券の買戻条件付売却若しくは売戻条件付購入	44	34
12. 派生商品取引 (1) 外為関連取引 (2) 金利関連取引 (3) 金関連取引 (4) 株式関連取引 (5) 貴金属（金を除く）関連取引 (6) その他のコモディティ関連取引 (7) クレジット・デリバティブ取引（カウンター・パーティー・リスク）一括清算ネットティング契約による与信相当額削減効果 (△)	6	0
13. 長期決済期間取引	4	0
14. 未決済取引	0	—
15. 証券化エクスポージャーに係る適格なサービサー・キャッシュ・アドバンスの信用供与枠のうち未実行部分	0	—
16. 上記以外のオフ・バランスの証券化エクスポージャー	—	—
信用リスク (オフ・バランス)	—	—
CVAリスク相当額	319	326
中央清算機関関連エクスポージャー	9	0
信用リスクに対する所要自己資本の額	2	0
オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額	49,920	50,767
信用リスク及びオペレーショナル・リスクに対する総所要自己資本の額	2,638	2,670
信用リスク及びオペレーショナル・リスクに対する総所要自己資本の額	52,559	53,437

(注) 1. 信用リスクに対する所要自己資本の額は標準的手法によって算出しております。また、適格金融資産担保の信用リスク削減効果の勘案においては包括的手法を使用しております。

2. 信用リスクに対する所要自己資本の額における、リスク・ウェイト区分の判定には内部管理との整合性を考慮し、エクスポージャーの種類に関わらず以下の適格格付機関が付与した格付を共通して使用しております。  
株式会社格付投資情報センター（R&I）、株式会社日本格付研究所（JCR）、ムーディーズ・インベスターズ・サービス・インク（Moody's）、S&Pグローバル・レーティング（S&P）

3. 信用リスクに対する所要自己資本の額は、信用リスク削減効果を考慮する前の債務者の区分にて記載しております。

4. オペレーショナル・リスクに対する所要自己資本の額は基礎的手法によって算出しております。

5. CVAリスク相当額は簡便的手法によって算出しております。

# 資料編 (自己資本の充実の状況等)

## ●信用リスクに関する次に掲げる事項 (単体) (第10条第4項第2号)

- イ. 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高およびエクスポージャーの主な種類別の内訳  
 ロ. 信用リスクに関するエクスポージャーの期末残高のうち、区分ごとの額およびそれらのエクスポージャーの主な種類別の内訳  
 ハ. 三ヶ月以上延滞エクスポージャーの期末残高またはデフォルトしたエクスポージャーの期末残高および区分ごとの内訳

(単位: 百万円)

	2019年3月31日				
	信用リスクエクスポージャー期末残高	貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	債 券	デリバティブ取引	三ヶ月以上延滞エクスポージャー
製造業	31,645	30,627	600	—	103
農業、林業	5,773	5,773	—	—	54
漁業	482	482	—	—	1
鉱業、採石業、砂利採取業	3,329	3,306	—	—	—
建設業	64,023	63,723	300	—	161
電気・ガス・熱供給・水道業	6,808	6,802	—	—	8
情報通信業	4,475	4,339	—	—	6
運輸業、郵便業	41,191	34,074	6,713	—	43
卸売業、小売業	86,044	85,863	100	—	129
金融業、保険業	215,727	125,203	76,989	1	18
不動産業	518,792	518,298	—	—	1,632
その他のサービス	246,999	224,014	200	—	591
国、地方公共団体	503,311	137,114	147,065	89	—
個人	559,175	559,175	—	0	2,950
その他	98,017	0	—	—	2
合 計	2,385,797	1,798,800	231,968	91	5,703
国内計	2,288,660	1,796,157	138,064	91	5,703
国外計	97,137	2,643	93,903	—	—
合 計	2,385,797	1,798,800	231,968	91	5,703
1年以下	397,212	329,940	57,440	91	1,439
1年超3年以下	180,923	91,420	87,313	—	188
3年超5年以下	114,411	95,878	18,052	—	157
5年超7年以下	88,322	71,414	16,681	—	298
7年超10年以下	168,007	131,194	36,465	—	583
10年超	1,095,419	1,078,860	16,015	—	3,032
期間の定めのないもの	341,500	91	0	—	2
合 計	2,385,797	1,798,800	231,968	91	5,703

(単位: 百万円)

	2020年3月31日				
	信用リスクエクスポージャー期末残高	貸出金、コミットメント及びその他のデリバティブ以外のオフ・バランス取引	債 券	デリバティブ取引	三ヶ月以上延滞エクスポージャー
製造業	29,368	28,294	656	—	84
農業、林業	6,367	6,367	—	—	73
漁業	476	476	—	—	25
鉱業、採石業、砂利採取業	4,370	4,347	—	—	—
建設業	67,820	66,513	1,307	—	104
電気・ガス・熱供給・水道業	5,766	5,760	—	—	—
情報通信業	4,369	4,090	150	—	—
運輸業、郵便業	24,161	22,958	799	—	3
卸売業、小売業	78,668	78,111	475	—	257
金融業、保険業	104,275	65,343	27,945	0	—
不動産業	553,189	551,900	795	—	998
その他のサービス	238,134	229,650	1,354	—	593
国、地方公共団体	611,506	139,904	205,387	125	—
個人	571,171	571,171	—	—	2,833
その他	111,366	0	7,819	—	1
合 計	2,411,012	1,774,890	246,692	126	4,975
国内計	2,366,344	1,774,890	203,372	126	4,975
国外計	44,668	—	43,319	—	—
合 計	2,411,012	1,774,890	246,692	126	4,975
1年以下	342,630	296,307	38,210	126	1,351
1年超3年以下	155,708	87,528	68,157	—	146
3年超5年以下	97,783	81,479	16,304	—	188
5年超7年以下	99,599	70,610	28,938	—	183
7年超10年以下	214,249	127,123	86,931	—	313
10年超	1,120,177	1,111,810	8,150	—	2,790
期間の定めのないもの	380,863	31	—	—	1
合 計	2,411,012	1,774,890	246,692	126	4,975

- (注) 1. オフ・バランス取引はデリバティブ取引を除いております。  
 2. 「三ヶ月以上延滞エクスポージャー」とは、元本または利息の支払が約定日の翌日から三ヶ月以上延滞しているエクスポージャーまたは引当金勘案前でリスク・ウェイトが150%であるエクスポージャーをいいます。  
 3. ファンドの構成資産につきましては、業種別の区分を行わずその他に記載しております。



## 二. 一般貸倒引当金、個別貸倒引当金および特定海外債権引当勘定の期末残高および期中の増減額

(単位：百万円)

	2018年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
一般貸倒引当金	1,753	2,397	1,753	2,397
個別貸倒引当金	4,052	195	911	3,336
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—
合計	5,805	2,593	2,665	5,733

(単位：百万円)

	2019年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
一般貸倒引当金	2,397	3,988	2,397	3,988
個別貸倒引当金	3,336	271	1,366	2,241
特定海外債権引当勘定	—	—	—	—
合計	5,733	4,260	3,764	6,230

(個別貸倒引当金の業種別・地域別内訳)

(単位：百万円)

	2018年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
製造業	75	2	40	37
農業、林業	0	47	0	48
漁業	—	—	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—	—	—
建設業	36	1	14	22
電気・ガス・熱供給・水道業	—	2	—	2
情報通信業	6	0	—	7
運輸業、郵便業	41	37	1	78
卸売業、小売業	35	6	18	23
金融業、保険業	1,671	17	552	1,136
不動産業	123	3	66	60
その他のサービス	2,016	72	181	1,906
国、地方公共団体	—	—	—	—
個人	45	2	36	11
その他	0	0	—	0
合計	4,052	195	911	3,336
国内計	4,052	195	911	3,336
国外計	—	—	—	—

(単位：百万円)

	2019年度			
	期首残高	期中増加額	期中減少額	期末残高
製造業	37	3	13	27
農業、林業	48	—	47	0
漁業	—	—	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—	—	—
建設業	22	—	9	13
電気・ガス・熱供給・水道業	2	—	2	—
情報通信業	7	2	0	10
運輸業、郵便業	78	71	1	148
卸売業、小売業	23	10	17	16
金融業、保険業	1,136	—	1,130	6
不動産業	60	12	22	50
その他のサービス	1,906	121	116	1,911
国、地方公共団体	—	—	—	—
個人	11	49	4	56
その他	0	0	—	0
合計	3,336	271	1,366	2,241
国内計	3,336	271	1,366	2,241
国外計	—	—	—	—

# 資料編 (自己資本の充実の状況等)

ホ、貸出金償却額の業種別・地域別内訳

(単位：百万円)

	2018年度	2019年度
製造業	81	13
農業、林業	35	215
漁業	—	—
鉱業、採石業、砂利採取業	—	—
建設業	507	475
電気・ガス・熱供給・水道業	5	1
情報通信業	215	83
運輸業、郵便業	95	133
卸売業、小売業	169	194
金融業、保険業	—	—
不動産業	227	182
その他のサービス	755	691
国、地方公共団体	—	—
個人	611	734
その他	—	—
合計	2,705	2,725
国内計	2,705	2,725
国外計	—	—

(注) 貸出金償却額には部分直接償却を含んでおります。

ヘ、リスク・ウェイトの区分ごとのエクスポージャー

(単位：百万円)

	2019年3月31日			
	格付あり		格付なし	
	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後
0%	—	—	566,401	566,401
2%	—	—	2,912	2,912
4%	—	—	—	—
10%	—	—	54,540	54,540
20%	6,325	6,325	113,186	113,092
35%	—	—	318,705	318,705
50%	28,740	28,740	13,222	13,209
75%	—	—	381,176	381,047
100%	—	—	781,292	778,202
150%	—	—	5,234	5,231
250%	—	—	1,479	1,479
350%	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—
合計	35,066	35,066	2,238,150	2,234,821

(単位：百万円)

	2020年3月31日			
	格付あり		格付なし	
	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後	個別貸倒引当金控除前	個別貸倒引当金控除後
0%	—	—	688,759	688,759
2%	—	—	269	269
4%	—	—	—	—
10%	—	—	44,147	44,147
20%	6,237	6,237	52,372	52,371
35%	—	—	333,484	333,484
50%	27,722	27,722	9,047	9,027
75%	—	—	390,460	390,392
100%	—	—	810,578	808,445
150%	—	—	4,325	4,313
250%	—	—	2,715	2,715
350%	—	—	—	—
1250%	—	—	—	—
合計	33,959	33,959	2,336,160	2,333,926

(注) 1. 「格付あり」欄には、適格格付機関による債務者自身および銘柄別の格付があるものを記載しており、保証人の格付およびソブリン準拠による格付のみの場合は「格付なし」欄に記載しております。

2. ファンドにつきましては、「格付なし」欄に記載しております。

●信用リスク削減手法に関する事項（単体）（第10条第4項第3号）  
イ・ロ、信用リスク削減手法が適用されたエクスポージャー

(単位：百万円)

	2019年3月31日	
	格付あり	格付なし
現金及び自行預金	—	28,934
金	—	—
適格債券	—	—
適格株式	—	—
適格投資信託	—	—
適格金融資産担保 計	—	28,934
適格保証	3,819	62,103
適格クレジット・デリバティブ	—	—
適格保証、クレジット・デリバティブ 計	3,819	62,103
上記 計	3,819	91,038

(単位：百万円)

	2020年3月31日	
	格付あり	格付なし
現金及び自行預金	—	10,222
金	—	—
適格債券	—	—
適格株式	—	—
適格投資信託	—	—
適格金融資産担保 計	—	10,222
適格保証	6,671	7,506
適格クレジット・デリバティブ	—	—
適格保証、クレジット・デリバティブ 計	6,671	7,506
上記 計	6,671	17,729

(注) 「格付あり」欄には、適格格付機関による債務者自身および銘柄別の格付があるものを記載しており、保証人の格付およびツプリン準拠による格付のみ場合は「格付なし」欄に記載しております。

●派生商品取引および長期決済期間取引の取引相手のリスクに関する事項（第10条第4項第4号、第12条第4項第5号）

イ、与信相当額の算出に用いる方式  
スワップ、為替予約その他の派生商品取引および長期決済期間取引の与信相当額はカレント・エクスポージャー方式にて算出しております。

ロ、グロス再構築コストの額（零を下回らないものに限る。）の合計額

(単位：百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
グロス再構築コストの額（零を下回らないものに限る。）の合計額	29	2

ハ、担保による信用リスク削減手法の効果を勘案する前の与信相当額（派生商品取引にあっては、取引区分ごとの与信相当額を含む。）

(単位：百万円)

種類及び取引の区分	2019年3月31日	2020年3月31日
派生商品取引	91	126
外国為替関連取引及び金関連取引	91	126
金利関連取引	—	—
株式関連取引	—	—
貴金属関連取引（金関連取引を除く。）	—	—
その他コモディティ関連取引	—	—
クレジットデリバティブ	—	—
合計	91	126

(注) 原契約期間が5営業日以内の外国為替関連取引の与信相当額は上記記載から除いております。

ニ、ロのグロス再構築コストの額およびグロスのアドオンの合計額とハの与信相当額は一致しております。

ホ、担保の種類別の額  
該当ありません。

ヘ、担保による信用リスク削減手法の効果を勘案した後の与信相当額

(単位：百万円)

種類及び取引の区分	2019年3月31日	2020年3月31日
派生商品取引	91	126
外国為替関連取引及び金関連取引	91	126
金利関連取引	—	—
株式関連取引	—	—
貴金属関連取引（金関連取引を除く。）	—	—
その他コモディティ関連取引	—	—
クレジットデリバティブ	—	—
合計	91	126

(注) 原契約期間が5営業日以内の外国為替関連取引の与信相当額は上記記載から除いております。

ト、与信相当額算出の対象となるクレジット・デリバティブの想定元本額  
該当ありません。

チ、信用リスク削減手法の効果を勘案するために用いているクレジット・デリバティブの想定元本額  
該当ありません。

連結子会社につきましては、該当ありません。

●証券化エクスポージャーに関する事項  
（第10条第4項第5号、第12条第4項第6号）

イ、銀行がオリジネーターである場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項  
該当ありません。

ロ、銀行が投資家である場合における信用リスク・アセットの算出対象となる証券化エクスポージャーに関する事項

(1) 保有する証券化エクスポージャーの額

(単位：百万円)

	2019年3月31日	2020年3月31日
リース債権	—	—
事業者向け貸出	—	—
商業用不動産	—	—
社債	—	—
クレジットカード与信	—	—
住宅ローン債権	73	33
合計	73	33

(2) 保有する証券化エクスポージャーのリスク・ウェイトの区分ごとの残高および所要自己資本の額

(単位：百万円)

	2019年3月31日	
	残高	所要自己資本
0%	—	—
20%	73	0
50%	—	—
100%	—	—
1250%	—	—
合計	73	0

(単位：百万円)

	2020年3月31日	
	残高	所要自己資本
0%	—	—
20%	33	0
50%	—	—
100%	—	—
1250%	—	—
合計	33	0

(3) 自己資本比率告示第248条並びに第248条の4第1項第1号及び第2号の規定により1250パーセントのリスク・ウェイトが適用される証券化エクスポージャーの額  
該当ありません。

(4) 保有する再証券化エクスポージャーに対する信用リスク削減手法の適用の有無および保証人ごまたは当該保証人に適用されるリスク・ウェイトの区分ごとの内訳  
該当ありません。

連結子会社につきましては、該当ありません。

# 資料編 (自己資本の充実の状況等／役員報酬等に関する開示事項)

## ●出資等または株式等エクスポージャーに関する事項 (単体) (第10条第4項第7号)

イ. 貸借対照表計上額、時価および次に掲げる事項に係る貸借対照表計上額  
出資等エクスポージャーの貸借対照表計上額等

(単位:百万円)		
2019年3月31日		
	貸借対照表計上額	時価
上場している出資等または株式等エクスポージャーの貸借対照表計上額	1,505	
上場に該当しない出資等または株式等エクスポージャーの貸借対照表計上額	2,274	
合計	3,780	

(単位:百万円)		
2020年3月31日		
	貸借対照表計上額	時価
上場している出資等または株式等エクスポージャーの貸借対照表計上額	1,166	
上場に該当しない出資等または株式等エクスポージャーの貸借対照表計上額	2,377	
合計	3,544	

子会社・関連会社株式の貸借対照表計上額等

(単位:百万円)		
	2019年3月31日	2020年3月31日
子会社・子法人等	3,251	3,251
関連法人等	—	—
合計	3,251	3,251

ロ. 出資等または株式等エクスポージャーの売却および償却に伴う損益の額  
出資等または株式等エクスポージャー

(単位:百万円)		
	2018年度	2019年度
売却損益額	295	△1,081
償却額	130	260

ハ. 貸借対照表で認識され、かつ、損益計算書で認識されない評価損益の額

(単位:百万円)		
	2019年3月31日	2020年3月31日
貸借対照表で認識され、かつ、損益計算書で認識されない評価損益の額	394	315

二. 貸借対照表および損益計算書で認識されない評価損益の額  
該当ありません。

## ●リスク・ウェイトのみなし計算又は信用リスク・アセットのみなし計算が適用されるエクスポージャーの額 (第10条第4項第8号)

(単位:百万円)		
計算方式	2019年3月31日	2020年3月31日
ルック・スルー方式	37,946	8,364
マンドート方式	—	—
蓋然性方式 (250%)	—	—
蓋然性方式 (400%)	—	—
フォールバック方式 (1250%)	—	—
合計	37,946	8,364

(注) リスク・ウェイトのみなし計算が適用されるエクスポージャーの額を記載しております。

## ●金利リスクに関する事項 (第10条第4項第9号) (単体)

IRRBB1: 金利リスク

(単位:百万円)

項番		イ	ロ	ハ	ニ
		△EVE		△NII	
		前期末	当期末	前期末	当期末
1	上方パラレルシフト	6,768	3,320		4,538
2	下方パラレルシフト	19,470	6,859		0
3	スティープ化	2,294	1,378		
4	フラット化				
5	短期金利上昇				
6	短期金利低下				
7	最大値	19,470	6,859		4,538
		ホ		ヘ	
		前期末		当期末	
8	自己資本の額	109,277		113,083	



## 役員報酬等に関する開示事項

(注) 銀行法施行規則第19条の2第1項第6号等の規定に基づき、報酬等に関する事項であって、銀行等の業務の運営又は財産の状況に重要な影響を与えるものとして金融庁長官が別に定めるものを定める件（以下「報酬告示」という。）に基づいて記載しております。

### 1. 当行(グループ)の対象役職員の報酬等に関する組織体制の整備状況に関する事項

#### (1) 「対象役職員」の範囲

開示の対象となる報酬告示に規定されている「対象役員」および「対象従業員等」（合わせて「対象役職員」）の範囲については、以下のとおりであります。

##### ①「対象役員」の範囲

対象役員は、当行(グループ)の取締役および監査役であります。なお、社外役員(社外取締役および社外監査役)を除いております。

##### ②「対象従業員等」の範囲

当行(グループ)では、対象役員以外の当行(グループ)の役員および従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員のうち、「高額な報酬等を受ける者」で当行(グループ)およびその主要な連結子法人等の業務の運営または財産の状況に重要な影響を与える者等を「対象従業員等」として、開示の対象としております。

なお、当行(グループ)の対象役員以外の役員および従業員ならびに主要な連結子法人等の役職員で、対象従業員等に該当する者はありません。

##### (ア) 「主要な連結子法人等」の範囲

主要な連結子法人等とは、当行(グループ)経営に重要な影響を与える連結子法人等であり、具体的には以下の6社です。

名 称
1 りゅうぎんビジネスサービス株式会社
2 株式会社りゅうぎん総合研究所
3 株式会社りゅうぎんディーシー
4 りゅうぎん保証株式会社
5 株式会社OCS
6 株式会社琉球リース

##### (イ) 「高額な報酬等を受ける者」の範囲

「高額な報酬等を受ける者」とは、当行(グループ)の有価証券報告書記載の「役員区分ごとの報酬の総額」を同記載の「対象となる役員の員数」により除することで算出される「対象役職員の平均報酬額」以上の報酬等を受ける者を指します。

##### (ウ) 「当行(グループ)の業務の運営または財産の状況に重要な影響を与えるもの」の範囲

「当行(グループ)の業務の運営または財産の状況に重要な影響を与えるもの」とは、その者が通常行う取引や管理する事項が、当行(グループ)、主要な連結子法人等の業務の運営に相当程度の影響を与え、または取引等に損失が発生することにより財産の状況に重要な影響を与える者であります。

#### (2) 対象役職員の報酬等の決定について

##### 「対象役員」の報酬等の決定について

当行(グループ)では、株主総会において役員報酬の総額（上限額）を決定しております。株主総会で決議された取締役の報酬の個人別の分配については、取締役会に一任されております。また、監査役の報酬の個人別の分配については、監査役の協議に一任されております。

#### (3) 報酬委員会等の構成員に対して支払われた報酬等の総額および報酬委員会等の会議の開催回数

	開催回数（2019年4月～2020年3月）
取締役会（琉球銀行）	1回

(注) 報酬等の総額については、報酬委員会等の職務執行に係る対価に相当する部分のみを切り離して算出することができないため、報酬等の総額は記載していません。

### 2. 当行(グループ)の対象役職員の報酬等の体系の設計および運用の適切性の評価に関する事項

#### (1) 報酬等に関する方針について

##### 「対象役員」の報酬等に関する方針

当行は定款にて取締役ならびに監査役の報酬、賞与その他の職務執行の対価として受ける財産上の利益は、株主総会の決議によって定めるとしています。

2019年6月27日開催の第103期定時株主総会におきまして、取締役の報酬限度額を月額から年額に改め、現行の月額報酬額を年額換算した金額と同額である年額168百万円以内(決議時点の取締役の人数10人。うち社外取締役の報酬額は年額15百万円以内)と改定させていただきました。報酬制度が当行の持続的な企業価値の向上に向けた健全なインセンティブとして機能するよう、当行の取締役報酬を固定報酬と業績連動報酬のバランスを勘案しつつ、「基本報酬」(固定)、「賞与」(短期業績連動)及び「株式報酬」(株価及び中長期業績連動)の3種類により構成し、各報酬割合を概ね6:1:3となるような構成といたしました。なお上記の年額報酬の範囲内で、基本報酬と賞与を支給することといたしました。また、監査役の報酬限度額についても、現行の月額報酬額を年額換算した金額と同額である年額36百万円以内(決議時点の監査役の人数4人)と改定させていただきました。

また、役員報酬制度の見直しの一環として、取締役(社外取締役を除く。以下「対象取締役」という。)に当行の企業価値の持続的な向上を図るインセンティブを与えとともに、株主の皆様との一層の価値共有を進めることを目的として、上記の報酬枠とは別枠で、対象取締役に対して、新たに譲渡制限付株式の付与のための報酬を支給することとし、その総額は年額80百万円以内といたしました。

なお2019年度において取締役、監査役および執行役員に対するストック・オプション報酬制度を廃止し、以降は新たな発行を行っておりません。賞与の算定方法につきましては、継続的な企業価値の向上や株価向上につながるよう、連結ROE、時価総額等を目標指標に設定しております。

当事業年度における当行の役員報酬は、譲渡制限付き株式報酬および役員賞与である業績連動報酬と業績連動報酬以外の報酬等により構成されておりますが、取締役各々の報酬額支給については社外取締役が委員長を務めるコーポレート・ガバナンス委員会に諮問したあと取締役会で決議しているほか、監査役各々の報酬額については監査役会に諮問したあと取締役会で決議しております。

### 3. 当行(グループ)の対象役職員の報酬等の体系とリスク管理の整合性ならびに報酬等と業績の連動に関する事項

対象役職員の報酬等の決定に当たっては、株主総会で役員全体の報酬総額が決議され、決定される仕組みになっております。

### 4. 当行グループの対象役職員の報酬等の種類、支払総額および支払方法に関する事項

対象役職員の報酬等の総額（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

区分	人数	報酬等の総額(百万円)	固定報酬の総額		変動報酬の総額	譲渡制限付き株式報酬	賞与
			基本報酬				
対象役員(除く社外役員)	10	169	131	131	38	38	—
対象従業員等	—	—	—	—	—	—	—

(注) 株式報酬型ストックオプションの権利行使時期は以下のとおりであります。なお、当該ストックオプション契約では、行使期間中であっても権利行使は役職員の退職時まで繰延べることとしております。

	行使期間
株式会社 琉球銀行 第1回 新株予約権	2011年8月1日から 2041年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第2回 新株予約権	2012年8月1日から 2042年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第3回 新株予約権	2013年8月1日から 2043年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第4回 新株予約権	2014年8月1日から 2044年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第5回 新株予約権	2015年8月1日から 2045年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第6回 新株予約権	2016年8月1日から 2046年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第7回 新株予約権	2017年8月1日から 2047年7月30日まで
株式会社 琉球銀行 第8回 新株予約権	2018年8月1日から 2048年7月30日まで

### 5. 当行(グループ)の対象役職員の報酬等の体系に関し、その他参考となるべき事項

特段、前項までに掲げたもののほか、該当する事項はありません。

## ■ 信託業務

- 信託財産残高表  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 元本補てん契約のある信託の運用／受入状況  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 元本補てん契約のある信託に係る貸出金のうちリスク管理債権に該当するものの額ならびに合計額  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 金銭信託の信託残高  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 金銭信託の運用状況  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 貸出金科目別期末残高  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 貸出金契約期間別期末残高  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 金銭信託期間別元本残高  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 貸出金担保別内訳  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 貸出金使途別内訳  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 貸出金業種別内訳  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 中小企業等向貸出  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 有価証券期末残高  
該当する残高は、2018年度及び2019年度ともにありません。
- 主要信託の受託状況  
2018年度及び2019年度ともに、該当する事項はありません。

## ■ 大株主 2020年3月31日現在

### 普通株式

氏名又は名称	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を除く。) の総数に対する所有株式数の割合 (%)
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口)	2,440	5.68
日本マスタートラスト信託銀行株式会社 (信託口)	2,169	5.05
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口9)	1,351	3.14
琉球銀行行員持株会	1,002	2.33
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO (常任代理人シティバンク、エヌ・エイ東京支店)	949	2.21
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (信託口5)	923	2.15
資産管理サービス信託銀行株式会社 (証券投資信託口)	772	1.79
オリオンビール株式会社	694	1.61
沖縄電力株式会社	689	1.60
大同火災海上保険株式会社	615	1.43
計	11,608	27.04

(注) 2018年11月7日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書の変更報告書において、株式会社みずほ銀行及びその共同保有者であるみずほ証券株式会社、アセットマネジメントOne株式会社が2018年10月31日付で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当行として2020年3月31日時点における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。なお、大量保有報告書の変更報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株式等の数 (千株)	株式等保有割合 (%)
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町1丁目5番5号	112	0.26
みずほ証券株式会社	東京都千代田区大手町1丁目5番1号	61	0.14
アセットマネジメントOne株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目8番2号	2,397	5.56
合計	—	2,570	5.96



琉球銀行

琉球銀行グループ

BANK OF THE RYUKYUS GROUP

2020年7月発行

編集：琉球銀行 総合企画部

〒900-0015 沖縄県那覇市久茂地1-11-1

電話 (098) 866-1212 (大代表)

<http://www.ryugin.co.jp>